

西町田下遺跡 発掘調査報告書

1997

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

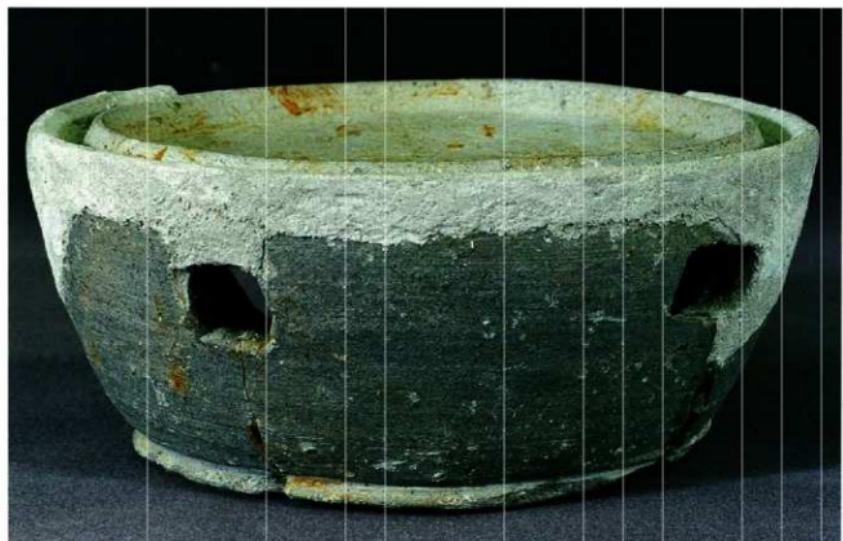
西町田下遺跡 発掘調査報告書

1997

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



手付有孔中空円面鏡 SK2079拡張トレンチ(1:1)

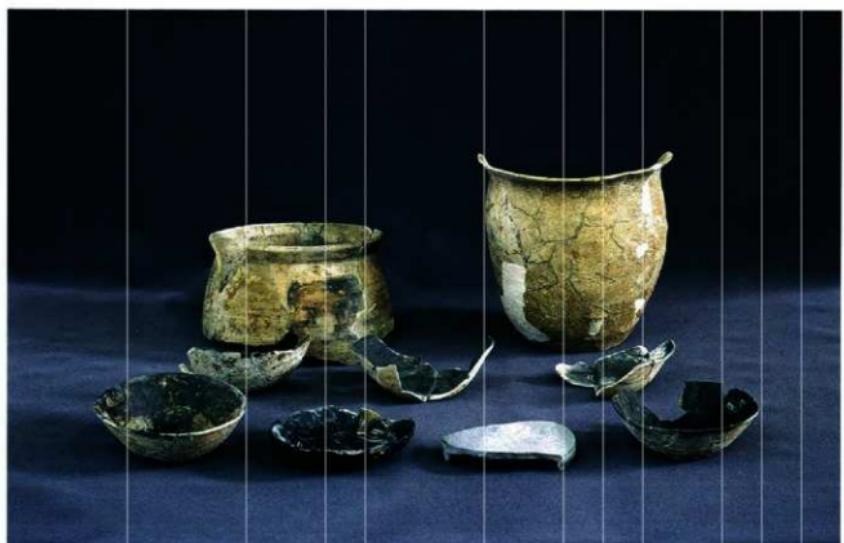


中空円面鏡 SK2079他(1:1)

卷頭 図版(2)



SK2079 出土遺物



ST48 出土遺物



西町田下遺跡空中写真

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、西町田下遺跡の調査成果をまとめたものです。

西町田下遺跡は山形県南部に位置する米沢市にあります。米沢市は古くから城下町として発展し、国指定史跡一ノ坂遺跡や上杉家御廟所、上杉本洛中洛外図屏風などをはじめとして多くの史跡や文化財があり、米沢盆地の中心都市として今日に至っています。

この度、国道121号（館山②）道路改良事業に伴い、工事に先立って西町田下遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、米沢市街の北方約2kmの水田の中から、竪穴住居跡・据立柱建物跡・井戸跡・溝跡・河川跡・道路状遺構などの遺構が検出され、土師器・須恵器などの遺物が出土し、7世紀後半から8世紀中頃を中心とする集落が存在したことが判明しました。

近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。これらの埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及・学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただきました関係各位に心から感謝申し上げます。

平成9年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 木場 清耕

例　言

- 1 本書は、国道121号（館山②）道路改良事業に係る「西町田下遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 調査は山形県土木部米沢建設事務所の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査要項は下記の通りである。

遺　跡　名　　西町田下遺跡 (D Y Z NM)　　遺跡番号　平成7年度登録

所　在　地　　山形県米沢市塩井町塩野字西町田下

調　査　主　体　　財団法人山形県埋蔵文化財センター

発掘調査・資料整理担当者

　　調査第二課長　　野尻　侃

　　主任調査研究員　尾形　與典

　　調査研究員　　高橋　敏

　　嘱託職員　　黒沼　幹男

　　嘱託職員　　豊野　潤子

- 4 発掘調査及び本書を作成するにあたり、山形県土木部米沢建設事務所、東南置賜教育事務所、米沢市教育委員会等関係機関、並びに米沢市の方々から協力をいただいた。また、資料整理にあたって、山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館川崎利夫館長、米沢市教育委員会手塚孝氏・月山隆弘氏、南陽市教育委員会吉野一郎氏、高畠町教育委員会井田秀和氏、愛知県陶磁資料館檍崎彰一総長、京都造形大学田辺昭三教授、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団主幹綿貫邦男氏に、ご指導を賜った。ここに記して感謝申し上げる。
- 5 本書の作成・執筆は高橋敏、黒沼幹男が担当した。編集は尾形與典、須賀井新人が担当し、全体については野尻侃が監修した。
- 6 委託業務は下記の通り実施した。

　　遺構の写真実測　　株式会社バスコ

　　一部の遺物の保存処理　　株式会社吉田生物研究所

　　自然科学分析　　株式会社パレオ・ラボ

- 7 出土遺物、調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡 例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記の通りである。

S T ……豊穴住居跡	S B ……掘立柱建物跡	S P ……柱穴
S E ……井戸跡	S D ……溝跡	S G ……河川跡
S K ……土壤	S X ……性格不明遺構	E B ……柱穴掘方
E P ……遺構内ピット	R P ……土器	

2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。

3 報告書執筆の基準は下記の通りである。

- (1) 遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。
- (2) グリッドの南北軸は、N -12°30' - E を測る。
- (3) 遺構実測図は1/40・1/60・1/80・1/100・1/200縮図で採録し、各拵図毎にスケールを付した。
- (4) 遺物実測図・拓影図は、土器については1/4を標準として採録し、それ以外の場合は個々に表示した。
- (5) 遺物図版については任意の縮尺であるが、同一器種の縮尺はほぼそろえてある。
- (6) 本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版とも共通のものとした。
- (7) 遺物について、本文で取り上げる場合には、「第○図△番」を「○-△」と略記した。
- (8) 土器実測図・拓影図の断面では、黒塗りが須恵器、無表示のものが土師器及び赤焼土器を表す。また、土器内外面の網点は黒色処理を表している。
- (9) 拓影図は左側が外面、右側が内面を表す。
- (10) 遺構覆土の色調については、1993年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に掲った。

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
II 遺跡の立地と環境	
1 地理的環境	1
2 歴史的環境	2
III 調査の概要	
1 調査の経過	4
2 遺跡の概観	6
IV 検出された遺構	
1 厚穴住居跡	8
2 据立柱建物跡	14
3 井戸跡	17
4 溝跡	18
5 道路遺構	19
6 土壙	20
7 河川跡	22
V 出土した遺物	
1 土師器・黒色土器	52
2 須恵器	53
3 円面鏡	54
4 その他の遺物	56
VI まとめ	83
山形県内出土円面鏡について	84
報告書抄録	99
付編	

表

表 1 出土遺物観察表(1)	77
表 2 出土遺物観察表(2)	78
表 3 出土遺物観察表(3)	79
表 4 出土遺物観察表(4)	80
表 5 出土遺物観察表(5)	81
表 6 出土遺物観察表(6)	82
表 7 山形県内出土円面鏡集成表	96

挿 図

第1図 遺跡位置図	3	第35図 遺物実測図(3)	59
第2図 調査概要図	5	第36図 遺物実測図(4)	60
第3図 基本層序図	7	第37図 遺物実測図(5)	61
第4図 遺構配置図	9	第38図 遺物実測図(6)	62
第5図 遺構実測図(1)	23	第39図 遺物実測図(7)	63
第6図 遺構実測図(2)	24	第40図 遺物実測図(8)	64
第7図 遺構実測図(3)	25	第41図 遺物実測図(9)	65
第8図 遺構実測図(4)	26	第42図 遺物実測図(10)	66
第9図 遺構実測図(5)	27	第43図 遺物実測図(11)	67
第10図 遺構実測図(6)	28	第44図 遺物実測図(12)	68
第11図 遺構実測図(7)	29	第45図 遺物実測図(13)	69
第12図 遺構実測図(8)	30	第46図 遺物実測図(14)	70
第13図 遺構実測図(9)	31	第47図 遺物実測図(15)	71
第14図 遺構実測図(10)	32	第48図 遺物実測図(16)	72
第15図 遺構実測図(11)	33	第49図 遺物実測図(17)	73
第16図 遺構実測図(12)	34	第50図 遺物実測図(18)	74
第17図 遺構実測図(13)	35	第51図 遺物実測図(19)	75
第18図 遺構実測図(14)	36	第52図 遺物実測図(20)	76
第19図 遺構実測図(15)	37	第53図 円面硯実測図(1)	92
第20図 遺構実測図(16)	38	第54図 円面硯実測図(2)	93
第21図 遺構実測図(17)	39	第55図 円面硯実測図(3)	94
第22図 遺構実測図(18)	40	第56図 山形県内円面硯出土遺跡分布図	95
第23図 遺構実測図(19)	41	第57図 遺跡周辺地籍図	97
第24図 遺構実測図(20)	42		
第25図 遺構実測図(21)	43		
第26図 遺構実測図(22)	44		
第27図 遺構実測図(23)	45		
第28図 遺構実測図(24)	46		
第29図 遺構実測図(25)	47		
第30図 遺構実測図(26)	48		
第31図 遺構実測図(27)	49		
第32図 遺構実測図(28)	51		
第33図 遺物実測図(1)	57		
第34図 遺物実測図(2)	58		

図 版

巻頭図版 1	手付有孔中空円面鏡 中空円面鏡	図版32	出土遺物(6)
巻頭図版 2	SK2079出土遺物 ST48出土遺物	図版33	出土遺物(7)
巻頭図版 3	西町田下遺跡空中写真	図版34	出土遺物(8)
図版 1	西町田下遺跡空中写真 遺跡遠景	図版35	出土遺物(9)
図版 2	調査状況	図版36	出土遺物(10)
図版 3	調査状況	図版37	出土遺物(11)
図版 4	調査状況 調査説明会状況	図版38	出土遺物(12)
図版 5	遺構精査状況	図版39	出土遺物(13)
図版 6	遺構精査状況	図版40	出土遺物(14)
図版 7	遺構精査状況	図版41	出土遺物(15)
図版 8	遺構精査状況	図版42	出土遺物(16)
図版 9	遺構精査状況	図版43	出土遺物(17)
図版10	遺構精査状況	図版44	出土遺物(18)
図版11	遺構精査状況		
図版12	遺構精査状況		
図版13	遺構精査状況		
図版14	遺構精査状況		
図版15	遺構精査状況		
図版16	遺構精査状況		
図版17	遺構精査状況		
図版18	遺構精査状況		
図版19	遺構精査状況		
図版20	遺構精査状況		
図版21	遺構精査状況		
図版22	遺構精査状況		
図版23	遺構精査状況 遺物出土状況		
図版24	遺物出土状況		
図版25	遺物出土状況 遺構精査状況		
図版26	基本層序		
図版27	出土遺物(1)		
図版28	出土遺物(2)		
図版29	出土遺物(3)		
図版30	出土遺物(4)		
図版31	出土遺物(5)		

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

米沢市には山麓、台地を中心として縄文時代の遺跡や古墳時代の遺跡、平地には古代・中世の遺跡など300を越える数多くの遺跡が確認されている。

当時の集落は、今日まで辛うじて地中にその痕跡を留めてきたが、近年のほ場整備事業、道路の改修や自動車道路の建設、種々の開発の波を遺跡は直接かつ広範に受けるようになってきており、その保存と活用を含めた調整が今日的課題となって来ている。

今回の発掘調査は、道路建設に伴う緊急発掘調査である。

平成4年8月、米沢市中田地区にかかる国道121号(笛山②)道路改良工事の事業計画が山形県土木部より示された。これを受け山形県教育庁文化(当時)課は同年9月、事業計画路線内に遺跡の有無を調査するために分布調査(表面踏査)を実施した。この結果、米沢市の遺跡地図に掲載されている周知の荒川遺跡と、その北約200mに奈良・平安時代の土器の散布が確認され荒川2遺跡として新規登録されることとなった。

さらにその北600mの地点で若干の遺物が確認され、「遺跡可能性地」として把握された。そのため、平成7年11月この地区で山形県教育庁文化財課により、詳細分布調査(試掘調査)が実施された。その結果、柱穴、溝跡、土壙などの遺構と土師器、須恵器などの遺物が検出されたため、路線区を中心とする東西160m、南北150mの約24,000m²を遺跡範囲とする平安時代の集落跡と推定され、西町田下遺跡として新規登録されることとなった。

これらの調査資料を基にして、事業主体の山形県米沢建設事務所と山形県教育庁文化財課との間で遺跡の取扱について協議を行い、現状保存の可能性や施工方法等の検討を含めた調整がはかられた。その結果、約9,800m²の道路用地部分全域について、山形県土木部より委託を受け、財団法人山形県埋蔵文化財センターが調査主体となって工事に先立って緊急の発掘調査を行い、記録保存することとなった。

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

山形県最南部にあり、福島県とは県境を共にする米沢市は、その中央部から北にかけて広がる米沢盆地の南半部にあたる。それを取り囲むようにして、北西部は低くなだらかな玉庭丘陵が広がり、次いで白鷹丘陵へと続く。南西部・南部は笛野山および南の吾妻火山群の山麓へと続く。東部は奥羽脊梁山脈の一部の豪士山から栗子山の山麓が連なる。米沢盆地はこのような高い山々に挟まれた、寒暖の差が大きい内陸型の気候で、県内でも降雪量の多い地域である。

西町田下遺跡は米沢市役所の北約2kmに位置し、東西160m、南北150mの規模で広がっている。標高は236mを測り、市街地を流れる最上川と、市の西部を流れる鬼面川との間の沖積地に立地している。南には堀立川が流れ、遺跡の東約1kmの所で最上川と合流し、さらに700m先で

は羽黒川と合流する。これらの支流が吾妻山系を源として流れ出し、長い年月をかけて運んで来た土砂により、大小の扇状地がいくつも形成され、米沢盆地の中央部に広がっているものと思われる。そのためこの地は水の便もよく、現在も水田が主な地目なっているが、転作して水田が畑地になっているところも多く見られるようになった。

米沢市は、近年、北部地域の開発がめざましく進み、工事に先だって発掘された遺跡も数多く存在している。

2 歴史的環境

これまでの発掘調査の結果をふまえ、西町田下遺跡周辺の主な遺跡について概観していく。

米沢市には縄文時代を中心に、古墳時代、古代、中世の遺跡が広範囲に点在している。

縄文時代の遺跡としては、国内最長の大型竪穴住居跡や連房式竪穴住居跡が検出され、石器製作を專業とした石器工房集落と推定される、平成8年度国指定史跡となった「一ノ坂遺跡」は、市街地の西方約2kmの笹野山西端の微高地に位置し、縄文時代前期初頭の遺跡とされている。

古墳時代のものとしては、市北東域の「戸塚山古墳群」のほぼ全容が確認されている。置賜一円を眺望できる標高365mを測る戸塚山山頂とその山麓一帯には前方後円墳、ほたて貝式古墳、円墳など137基が現存している。山頂で確認されたものは6世紀頃と推定されている。一方、山麓の円墳からは鉄劍や國分寺下層式と考えられる黒色土器A類坏（内面黒色処理）なども出土しており、7～8世紀とされる古墳が群集している。

中田町笹原地内に所在する笹原遺跡は奈良・平安時代の遺跡とされ、木簡、墨書き器、円面鏡（3点）などの出土から、当時の官衙に関連する集落跡と推測されている。また、古代置賜六郷の一つ「広瀬郷」とする見解もある。大浦遺跡群は、大浦b遺跡の棚列施設内に計画的に配置された建物群を中心に広範囲に分布している。また、ここを置賜郡都とする見解もあり、布目瓦や「延暦23(804)年」の記述がある漆紙文書（具注暦）、円面鏡（2点）などが出土している。川西町の境界に隣接する成島丘陵山麓に所在する大神窯跡は、当該窯跡で生産されたと考えられる須恵器穂焼が、近隣の大浦b遺跡、笹原遺跡、上浅川遺跡、荒川2遺跡、西町田下遺跡などの8世紀代とされる官衙及び官衙関連施設遺跡から出土することから、官衙供給用の須恵器窯として成立したものと考えられている。

本遺跡の600m南に荒川2遺跡、その南200mに荒川遺跡があり、それぞれ平成7年度・平成8年度に発掘調査が行われ、古代から中世にかけての遺構・遺物が検出されている。大浦b、笹原、荒川、荒川2、西町田下の各遺跡は奈良・平安時代にかけて、何らかの関わりがあったものと考えることが出来る。

本遺跡が所在する置賜地方は、「日本書記」持統天皇3(689)年の「陸奥国優嗜曇郡」が史料的に初見である。さらに和銅5(712)年出羽国建国の中に「置賜郡」の名が見られる。

市南部の山麓、山地には縄文時代の遺跡が多く確認されているが、時代が下がるにつれて北部の平地で多く見られるようになる。これらのことから、稲作など食糧事情の変化により人々の生活の場も次第に変わって来たことがうかがえる。



1. 西町田下道路
2. 芥川2号路
3. 芥川道路
4. 大前山道路
5. 番原道路
6. 大神宮路
7. 西方堀跡
8. 下小菅道路
9. 里堀2号路
10. 成島道路
11. 三月在紫野跡
12. 矢子大日向a道路
13. 矢子大日向b道路
14. 麻領原古墳
15. 中里道路
16. 備田古墳
17. 外ノ内堀跡
18. 八幡堀古墳
19. 佐呂明教道路
20. 金ヶ崎a道路
21. 中川原道路
22. 上新田道路
23. 下新田a道路
24. 西の屋敷道路
25. 大船石道路
26. 大源a道路
27. 大前a道路
28. 八木橋a道路
29. 八木橋b道路
30. 西谷地a道路
31. 西谷地b道路
32. 陸上a道路
33. 陸上b道路
34. 元立道路
35. 米沢道路

0
200m
国土地理院発行 1:25,000地形図「米沢北部」
「群野町」「米沢家原」縮小して使用

第1図 遺跡位置図

III 調査の概要

1 調査の経過

現地調査は平成8年5月8日から10月31日までの実働117日間の日程で行った。

遺跡推定面積約24,000m²のうち、国道121号(館山②)道路改良事業により破壊されると判断された9,800m²について調査の対象とした。

調査は5月8日に開始した。まず発掘器材の搬入と現地事務所の設営を行い、発掘作業の諸準備をした。次に地表面、遺物包含層確認のため調査区内に試掘トレンチを設定し、掘り下げた。その結果に基づいて、重機等を導入して水田耕作土(表土)を除去、併行して面整理を行なながら遺構の確認にあたった。遺物や遺構の位置関係を正確に記録するために、道路のセンター杭を基準にして、5m×5mを1単位とするグリッド(方眼区画)を設定した。グリッドの南北の基本軸は磁北から12°30'東に振れる。南北軸に北からアラビア数字による番号を、東西軸に西からアルファベットによる記号を割り当てた。

面整理を繰り返しながら、遺構検出そして白線マーキングを実施した。続いて遺構精査に入った。その間適宜平面図・断面図の作成や写真撮影等の記録作業にあたった。

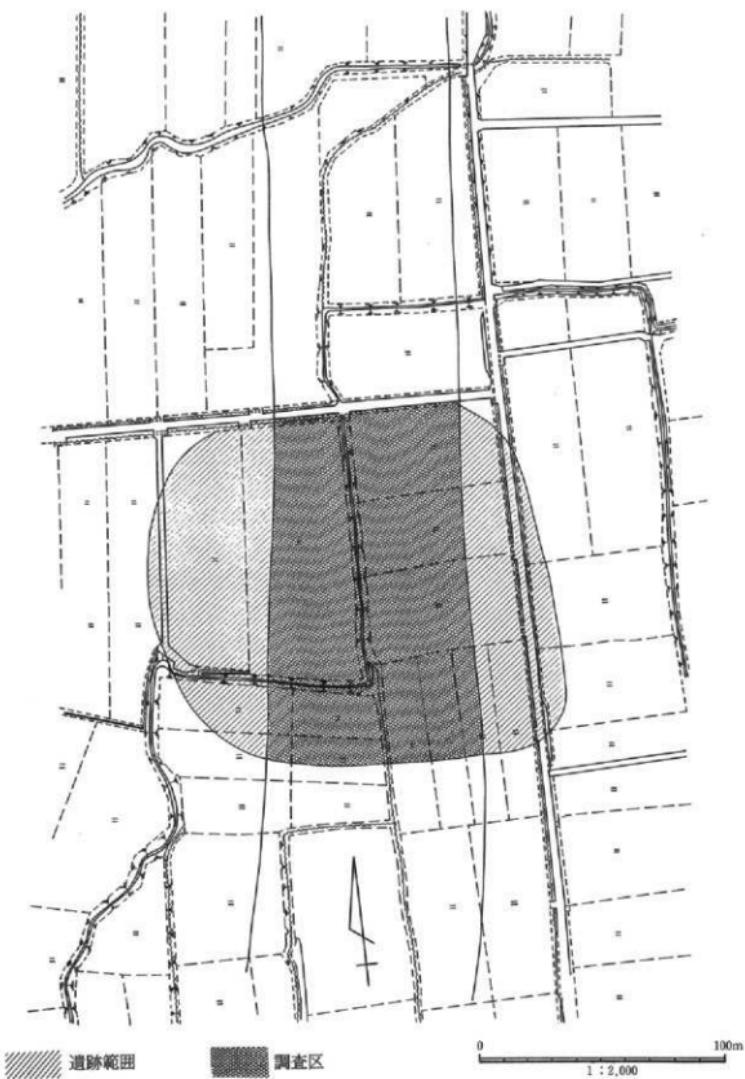
7月11日と10月29日には空中撮影による写真実測を行った。

なお、10月26日に調査結果を公表し、埋蔵文化財に対する理解と保護思想の普及を目的とした現地説明会を雨天の中実施し、10月31日器材を撤収し、現地調査を終了した。

重機による表土除去・面整理・遺構検出・遺構精査・記録という工程で調査を進めた。

現地調査の主な進行状況は下記の通りである。

5月8日	器材搬入 調査事務所設営 鍵入式
5月9日	屋内・屋外の環境整備 作業員研修
5月10日	調査区設定 調査区内環境整備 調査開始
5月14日	重機稼働
5月28日	ベンチマーク(3ヵ所に 235.700m)設定
5月29日	グリッド杭打ち 白線マーキング開始
6月19日	遺構精査開始
7月11日	遺跡西側空中写真測量(ラジコンヘリコプター)
9月2日	河川跡全面精査のため再度重機導入
10月26日	現地調査説明会
10月29日	遺跡全域空中写真測量(ラジコンヘリコプター)
10月31日	引き渡し 調査事務所撤収 器材搬出 現地調査終了



第2図 調査概要図

2 遺跡の概観

基本層序 山形県南部、米沢盆地の周囲を囲む東・西・南の山岳地帯から、雨水を集めながら流れ下った多くの河川は、中心都市である米沢市中央部から北部にかけて大小の扇状地を形成し、米沢扇状地群をなしている。西町田下遺跡の所在する塩野地区は、西を流れる鬼面川と、東を流れる山形県の母なる川、最上川に挟まれた河間低地に立地している。現在はほ場整備等の開発行為により整然とした区画がなされているが、字切り図や昭和40年代後半の空中写真によると、水路や水田の畦が網状に走るのが観察される。特に鬼面川流域で顕著に見られ、旧河道は激しい乱流を繰り返し、米沢市北西部平地の全面にわたって分布している。西町田下遺跡もその範囲に含まれる。これら旧河道は、中世以降徐々に開発の手が加わり水田に姿を変えといったと考えられる。調査区西側で検出した蛇行して北流する河川跡は、鬼面川の旧河道の一つの可能性がある。

西町田下遺跡の基本的な層序は第3図に示している。調査区内4カ所で観察を行った。層位はI～IV層に分かれる。I層は水田耕作土であり、II層は床土と考えられる。III層は遺構検出面であり、地山である。地山までの深さは、北側に位置する基本層序Aで20cm、南側の基本層序Cで50cmを測り、さらに東側が徐々に下がる傾向がある。IV層は遺物包含層の可能性もあるが、1カ所でのみ観察された。

第3図基本層序Aは、調査区最北端I-1グリッドに設定した土層断面である。ほ場整備による削平のため遺構検出面であるIII層は薄く、直下には疊層が確認される。IV層は中世ないし近世の文化層の可能性もあるが、断面での確認にとどまっている。

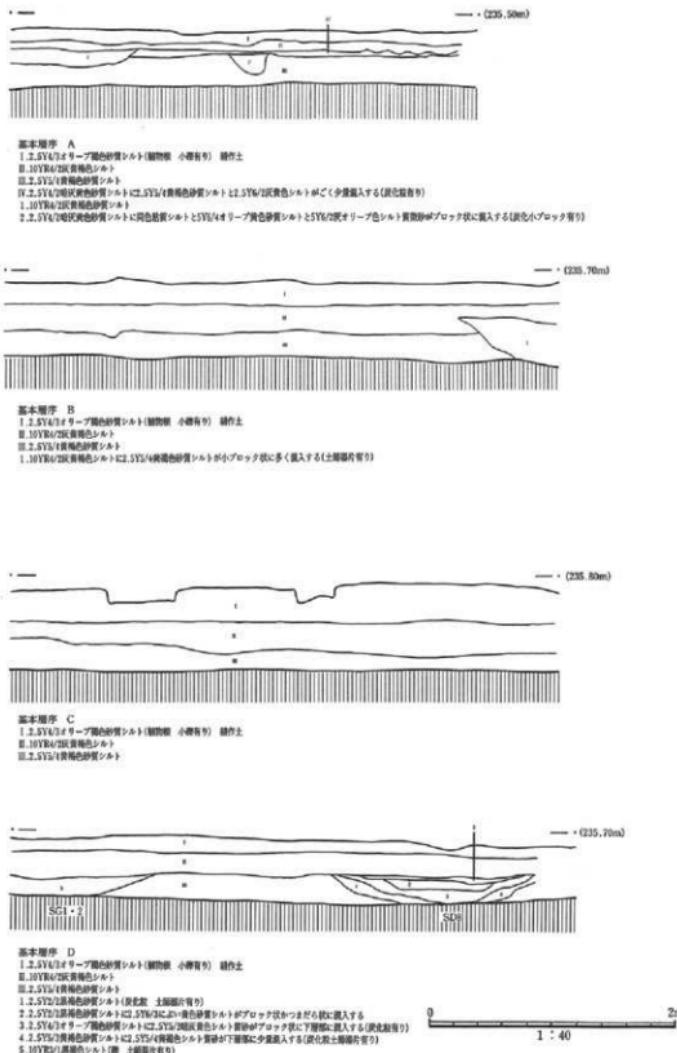
第3図基本層序Cは、南側東部分北壁O-21グリッドに設定した。ほ場整備による削平のためII層直下は地山で、遺構検出面となっている。地山は右側（東側）に向かって徐々に低くなるのが観察される。これは左側（西側）の河川跡との間に自然堤防が存在しているのを示唆するものである。この自然堤防上を中心に竪穴住居跡が検出されている。

第3図基本層序Dは、西側南部分G-14グリッドに設定した土層断面である。III層は地山で、遺構検出面となっている。右側（東側）に溝跡が観察されるが、道路遺構の西側側溝の下部と考えられる。遺構確認面からは検出不可能であった。

遺構の分布 遺構はほぼ調査区全体に分布するが、北側はほ場整備による削平のため密度はかなり薄くなる。総計2500基以上を数える。東側中央部分からは遺構の集中が見られ、土壌・溝跡・性格不明遺構などが錯綜して検出されている。

西側を大きく蛇行しながら北流する幅の広い河川跡があり、その右岸に遺構の分布域が存在する。竪穴住居跡は、前述したように河川を取り巻く自然堤防上に概ね分布する傾向があり、計19棟検出されている。掘立柱建物跡は南側に多く、特に南東隅のやや低くなる部分に集中域が見られる。計9棟検出されている。

道路遺構は、調査区のほぼ中央を真北に向かって延びているが農業用水路とほ場整備による削平のため、南側の約30mのみの検出であった。



第3図 基本層序図

IV 検出された遺構

遺構としては、竪穴住居跡19棟、掘立柱建物跡9棟、井戸跡2基、溝跡・道路跡・土壤・河川跡など、総計2,500基以上検出された。以下種別に概要を述べる。

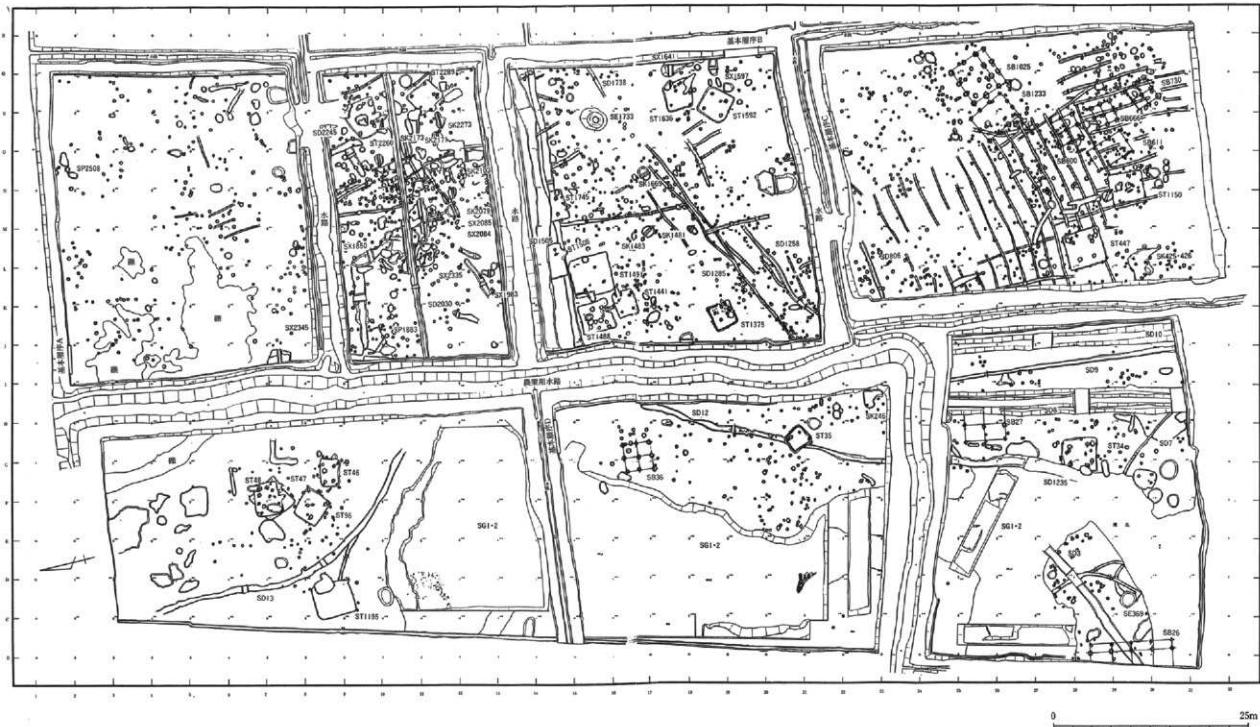
1 竪穴住居跡（第5～18図）

計19棟検出された。全般的には遺存状態は良くないが、一部に遺構内土壤や床面からまとまつた遺物の出土を見たものもある。

S T 47・48(第5図) F～G-7・8グリッドで検出した。2棟重複しており、前後関係はS T 47→S T 48である。S T 47をひとまわり小さなS T 48に立て替えられたものと考えられる。S T 47は長軸440cm、短軸410cmを測る隅丸方形の竪穴住居跡である。主軸方位はN-30°-Wである。遺存状態が悪く、カマドとその周辺部のみ精査できた。須恵器壺破片1点、土師器壺破片10点、黒色土器A類壺破片3点計14点が出土した。カマドは南壁東寄りにあり、焚き口部は床面よりやや掘り下げられたものと考えられる。出土遺物は33-1の1点図示した。土師器壺で底径10cmを測り、内面に横位のハケメが観察される。底部は木葉痕が残り二次加熱を受ける。S T 48は長軸420cm、短軸330cmを測る隅丸不整形の竪穴住居跡で、確認面から床面までの深さは14cm程を測る。S X 85に北辺が切られる。主軸方位は磁北にのる。覆土中及び床面から須恵器破片14点、土師器破片167点、黒色土器破片46点計227点が出土した。南辺中央に短い煙道を伴うカマドがあり、須恵器破片4点、土師器破片17点、黒色土器破片1点計22点が出土した。床面で付属する土壤1基、ピット14基が検出された。E K 15は長径196cm、短径96cmの不整形円形を呈し、床面からの深さは15cmを測る。須恵器壺破片2点、土師器壺破片・壺破片205点、黒色土器壺破片82点計289点出土した。ピットは深さが15cm前後のものと20cm前後のものに分かれる。出土遺物は33-2～34-3の22点図示した。E K 15から出土した33-10は、土師器壺で体部内外面にハケメが見られ、底部には網代痕が明瞭に残る。33-7は体部に縦のヘラケズリが施され、体部上部に沈線状のカキメが4条見られる土師器壺である。33-5は底部及び体部下半が手持ちヘラケズリされる土師器壺である。床面出土の34-3は短頸壺の蓋内面を硯に転用している。南辺壁際で出土した33-20は黒色土器B類(両面黒色処理)壺で漆が付着している。

S T 46(第6図) G-9・10グリッドで検出した。長軸360cm、短軸248cmを測る隅丸方形の竪穴住居跡で、確認面から床面までの深さは10cmを測る。主軸方位はN-81°-Wである。覆土中及び床面から土師器壺・壺破片26点、黒色土器壺破片7点計33点出土した。東辺北寄りに短い煙道を伴うカマドがある。床面で付属する土壤1基、ピット8基が検出された。E K 4は直径56cmのほぼ円形で、床面からの深さは10cmである。土師器壺・壺10点、黒色土器壺6点計16点出土した。ピットは深さが12cm前後で浅く、E P 3が28cmを測る。主柱穴はE P 3、E P 5、E P 6、E P 7と考えられる。出土遺物は34-4～34-6の3点図示した。E K 4出土で、34-5は貼付高台の赤焼土器である。34-6は底部手持ちヘラケズリの黒色土器A類壺である。

S T 35(第7図) H-21・22グリッドで検出した。長軸300cm、短軸270cmを測る隅丸方形の竪穴住居跡で周溝が巡る。S D 12に切られる。確認面から床面までの深さは12cmを測る。主軸方位は



第4図 造構配置図

N-30°-Wである。覆土中から須恵器壺破片1点、土師器壺・甕破片12点、黒色土器壺・甕破片13点計26点出土した。カマドは検出されない。床面で付属するピット4基が検出されたが、主柱穴は不明である。ピットは深さが6cm程度深い。出土遺物は34-7~34-9の3点図示した。34-7は丸底の黒色土器B類で体部中央に段を有し下部は手持ちヘラケズリである。34-8は34-9と重なって出土した土師器壺である。非クロロ成形で底部は手持ちヘラケズリである。口縁部はナデがあり内外面には赤彩の痕跡が残る。内面はヘラミガキ痕跡がある。関東系土器の可能性がある。

S T 1375 (第7図) K~L-19・20グリッドで検出した。長軸322cm、短軸320cmを測る隅丸方形の竪穴住居跡で、周溝が巡っている。確認面から床面までの深さは16cmを測る。主軸方位はN-70°-Eである。覆土中及び床面から土師器壺・甕破片が50点出土した。東辺南寄りに短い煙道を伴うカマドがあり、袖も残存していた。土師器甕破片が15点出土した。床面で付属する土壙2基、ピット3基検出されたが、主柱穴は不明である。E K 3は直径54cmの円形を呈し、床面からの深さは12cmを測る。土師器甕破片3点出土した。ピットの深さは16cm程度である。出土遺物は34-10の1点図示した。E K 3出土で体部外面は縦位、内面は横位のハケメが見られ、底部には木葉痕が残る。

S T 34(第8図) G~H-28・29グリッドで検出した。西辺はS D 1235に切られ、全形は不明である。長軸450cm、短軸382cm以上を測る隅丸方形の竪穴住居跡である。確認面から床面までの深さは10cmを測る。主軸方位はN-7°-Eである。覆土中及び床面から須恵器壺破片3点、土師器壺・甕破片37点、黒色土器A類壺・甕破片9点計49点出土した。カマドは検出されなかった。床面で付属する土壙2基、ピット8基検出された。須恵器壺破片3点、土師器壺・甕破片3点出土した。主柱穴はE P 1、E P 5、E P 7、E P 10と考えられる。ピットの深さは12cm~30cm程度である。出土した遺物は34-14の1点図示してある。E P 7出土で、体部内・外間にハケメの残る土師器甕の体部である。

S T 1195(第9図) D-9・10グリッドで検出した。東辺をS X 1199に切られ、S D 1198を切っている。長軸515cm、短軸450cmを測る隅丸方形の竪穴住居跡である。確認面から床面までの深さは18cmを測る。主軸方位はほぼ磁北による。覆土中及び床面から須恵器甕・甕破片7点、土師器壺・甕破片35点、黒色土器A類壺・甕破片54点計96点出土した。ピットは検出されなかった。カマドは南東隅にあり、左袖が僅かに残存していた。カマド石と考えられるものが焚き口に横位に置かれていた。須恵器甕破片1点、黒色土器壺破片が6点出土した。カマド周辺の床面には炭化物層が、また中央南寄りには焼土が見られ地床炉とも考えられる。炭化物は網代の可能性がある。出土遺物は34-11~34-13の3点図示した。34-11は床面、34-12はカマドから出土した黒色土器A類壺で、34-11は底部回転糸切りである。34-13は床面とカマドから出土した高台付の須恵器小壺で、頸部は欠損している。底部回転糸切りの痕跡を残す。

S T 1488(第10図) K~L-16・17で検出した。長軸440cm、短軸390cmを測る隅丸方形の竪穴住居跡である。確認面から床面までの深さは9cmを測る。主軸方位はN-11°-Wである。覆土中及び床面から須恵器破片13点、土師器破片196点、黒色土器破片21点計230点出土した。南辺やや東寄りに短い煙道を伴うカマドがあり、袖も残存していた。須恵器破片7点、壺完形1点、土師

器破片261点、黒色土器A類破片41点計310点出土した。床面で付属する土壙2基、ピット9基が検出された。E K 3は長径117cmの楕円形で、床面からの深さは16cmを測る。ピットの深さは10cmほどで浅い。主柱穴はE P 1、E P 4、E P 9、E P 10と考えられるがやや不規則である。出土した遺物は34-15~34-22の8点図示した。34-15、19~22はカマド、34-16はE K 3、他は床面から出土した。34-19、21は底部及び体部下半回転ヘラケズリの黒色土器A類の壺と壺である。34-20は底部手持ちヘラケズリの黒色土器A類壺で、輪積痕を残す。34-22はカマド袖付近から、やや傾いて出土したほぼ完形の須恵器短頸壺である。外面に二次加熱が見られる。34-16は土師器小壺で、頸部に沈線状の段が見られる。

S T 96(第11図) F~G-8・9グリッドで検出した。長軸400cm、短軸362cmを測る隅丸方形の竪穴住居跡である。確認面から床面までの深さは12cmを測る。主軸方位はN-44°-Wである。覆土中及び床面から土師器壺破片21点出土した。短い煙道を伴うカマドは東隅にあり、袖は検出されなかった。床面から25cm程掘り込んで焚き口としている。床面で付属するピット6基が検出されたが、主柱穴は不明である。ピットの深さは10cm~20cmを測る。出土した遺物は35-6・7の2点図示した。ともに床面からの出土で、35-6は口縁端部が玉縁で頸部に浅い段を有する土師器壺である。

S T 1636(第12図) P~Q-18・19グリッドで検出した。長軸385cm、短軸370cmを測るやや不整形な竪穴住居跡である。S K 1638とS K 2612により切られる。確認面から床面までの深さは12cmを測る。主軸方位はN-10°-Wである。覆土中及び床面から須恵器壺破片1点、土師器壺破片7点、黒色土器A類壺破片4点計12点出土した。カマドは検出されなかった。床面で付属するピットは7基検出されたが、主柱穴は不明である。ピットの深さは10cm~12cmを測る。S K 2612は、床面精査中に検出した不整長方形の土壙である。底面は平坦で薄い炭化物層が観察された。住居跡床面に付属する可能性も考えられる。遺物は出土していない。

S T 1506(第12図) L~M-15グリッドで検出した。北側をS D 1505に切られており、全形は不明である。長軸は445cmを測る。確認面から床面までの深さは18cmを測る。主軸方位はN-4°-Wである。覆土中及び床面から須恵器壺・蓋破片11点、土師器壺破片27点、黒色土器壺・壺破片17点計55点出土した。床面で付属するピットは2基検出が検出された。ピットの深さは10cm~12cmを測る。短い煙道を伴うカマドは南辺やや東寄りにあり、右袖が僅かに残存していた。須恵器壺・蓋破片4点、土師器壺破片47点計51点出土した。出土した遺物は35-1~3の3点図示した。35-1は覆土中から出土した黒色土器B類の壺体部である。内外面とも丁寧なヘラミガキが施されている。35-1・2の須恵器蓋はカマド内から出土した。

S T 1745(第2図) N-15グリッドで検出した。北側をS D 1505に切られており、全形は不明である。長軸は395cmを測る。主軸方位はN-6°-Wである。覆土中及び床面から須恵器壺・壺・蓋破片8点、土師器壺・壺破片81点、黒色土器A類壺12点、重なった状態の須恵器壺と黒色土器A類壺計103点出土した。床面で付属する土壙1基、ピット4基検出された。E K 3は長径76cmの楕円形を呈し、床面からの深さは13cmを測る。ピットは深さ12cmを測る。主柱穴はE P 1、E P 2と考えられる。短い煙道を伴うカマドは南辺やや西寄りにあり、袖が残存している。出土

した遺物は35-4・5の2点図示した。35-4は黒色土器A類の塊で、体部下半及び底部が回転ヘラケズリされる。35-5は須恵器甕塊で、体部下半を回転ヘラケズリし明瞭な稜を造る。35-5に35-4が入った状態で出土した。

S T1491(第13図) L～M-15・16グリッドで検出した。長軸545cm、短軸515cmを測る隅丸方形の竪穴住居跡である。確認面から床面までの深さは10cmを測る。主軸方位はN-90°-Eである。覆土中及び床面から須恵器坏破片2点、土師器甕破片27点、黒色土器A類坏8点計37点出土した。カマドは西辺やや北寄りにあり、短い煙道を伴う床面から16cm掘りこんで焚き口としている。土師器甕破片23点、黒色土器A類坏破片2点計25点出土した。床面から付属する土壤1基、ピット4基検出した。主柱穴は不明である。出土遺物は35-8の1点のみ図示した。口縁端部が玉縁で頸部に浅い段を有する土師器甕である。

S T1441(第13図) K～L-16・17グリッドで検出した。長軸335cm、短軸295cmを測る隅丸方形の竪穴住居跡である。確認面から床面までの深さは15cmを測る。主軸方位はN-101°-Wである。覆土中及び床面から須恵器坏破片1点、ほぼ完形の坏1点、土師器甕破片10点、黒色土器坏・塊2点計14点出土した。煙道を伴うカマドは東辺やや北寄りにあり、袖も残存している。床面から付属するピット5基を検出した。主柱穴はE P 1、E P 2、E P 4、E P 5と考えられる。出土遺物は35-9・10の2点図示した。35-9は、深身の黒色土器B類塊で、内外面ヘラミガキされ内弯している。外面には全面に回転ヘラケズリの痕跡が残る。

S T2260(第14図) P～Q-10グリッドで検出した。長軸部分はS X2262と搅乱により不明である。短軸は505cmを測る。確認面から床面までの深さは14cmを測る。主軸方位はN-6°-Wである。覆土中及び床面から須恵器坏・甕・蓋破片6点、土師器甕破片98点、黒色土器A類坏破片42点計146点出土した。短い煙道を伴うカマドは南辺中央にあり、左袖が残存している。床面に付属する土壤1基、ピット5基等を検出した。須恵器蓋破片1点、土師器甕破片7点計8点出土した。主柱穴は不明である。E X 2・3は炭化物層と焼土からなり地床炉の可能性がある。出土遺物は35-11～17の7点図示した。35-14は非ロクロ成形の輪積で底部に木葉痕が残る黒色土器A類坏である。35-15・16は底部回転ヘラケズリの黒色土器A類坏である。

S T1592(第15図) P～Q-19・20グリッドで検出した。長軸392cm、短軸390cmを測る隅丸方形の竪穴住居跡である。確認面から床面までの深さは16cmを測る。主軸方位はN-42°-Eである。覆土中及び床面から須恵器坏破片1点、土師器甕破片92点、黒色土器坏破片9点計106点出土した。カマドは検出されなかった。床面に付属するピット5基を検出した。ピットの深さは7cm～14cmを測る。主柱穴はE P 1、E P 2、E P 4、E P 5と考えられる。出土遺物は35-18～36-3の7点を図示した。35-20・21は頸部に一条の沈線状を呈する段を有する土師器甕である。35-20は南北壁際で逆位の状態で検出した。36-2は土師器小甕で、口縁部にナデがあり端部は玉縁を呈する。栗圓式後期に並行すると考えられる。36-3は丸底の黒色土器B類坏である。緩やかに内弯しながら立ち上がり、口縁端部が直立しナデが見られる。

S T2289(第16図) P～Q-11・12グリッドで検出した。北辺をS K2267により僅かに切られる。長軸388cm、短軸322cmを測る隅丸長方形の竪穴住居跡である。確認面から床面までの深さは

20cmを測り、中央部がやや深くなる。西辺に半径55cmほどの張り出し部が見られる。主軸方位はN-31°-Wである。覆土中及び床面から須恵器壊・蓋・甕破片31点、土師器壊・甕破片197点、黒色土器A類壊・甕破片46点計274点出土した。カマドは検出されなかった。床面に付属するピット7基を検出した。ピットの深さは8cm~12cmを測る。主柱穴はE P 1、E P 2、E P 3、E P 4と考えられる。出土遺物は36-4・5の2点図示した。36-4は内面に漆と考えられる有機物が付着している土師器小甕である。体部中央に最大径が有りハケメが残る。口縁部は外反しナデが見られる。36-5は焼成不良の須恵器甕底部である。

S T1150(第17図) N~O-29・30グリッドで検出した。S D810とS D811に南北に、北辺中央をS K477に切られる。長軸444cm、短軸437cmを測る隅丸方形の竪穴住居跡である。確認面から床面までの深さは10cmを測る。主軸方位は磁北にのる。覆土中及び床面から須恵器甕破片1点、土師器壊・甕破片26点、黒色土器A類壊5点計32点出土した。カマドは検出されなかった。床面に付属する土壙3基、ピット12基、落ち込み1基を検出した。主柱穴は不明である。E K 4は長径97cmを測り不整円形を呈する。E K 5に切られる。確認面からの深さは17cmを測る。須恵器高台付壊底部1点、壊破片2点、土師器甕破片6点、黒色土器壊4点計13点出土した。出土遺物は36-6~9の4点図示した。36-7は輪積による成形で、底部は手持ちヘラケズリが施され、中央部が窪んでいる。体部上半はヘラケズリが見られる黒色土器A類の塊である。36-8は内外面ヘラミガキが施された黒色土器B類壊で、丸底と考えられる。36-9は底部回転ヘラケズリの須恵器高台付壊である。いずれもE K 4から出土した。

S T447(第18図) M-28・29グリッドで検出した。長軸493cm、短軸475cmを測る隅丸方形の竪穴住居跡で、周溝が巡ると考えられる。確認面から床面までの深さは7cmを測る。主軸方位はN-4°-Wである。覆土中及び床面から須恵器高台付壊1点、甕破片1点、土師器甕破片26点、黒色土器A類壊破片5点計33点出土した。カマドは検出されなかった。床面に付属する土壙1基、ピット8基を検出した。E K 4は長径100cmを測る不整形の土壙で、確認面からの深さは10cmを測る。ピットの深さは22cm~43cmを測る。主柱穴はE P 1、E P 3、E P 6、E P 9と考えられる。出土遺物は36-10・11の2点図示した。36-10は黒色土器A類壊で器高が低く、底部と体部下半が回転ヘラケズリされる。36-11は底部回転ヘラケズリの須恵器高台付壊である。

2 捩立柱建物跡(第19~第22図)

9棟検出された。本文中では、通常柱間の多い部分の辺を「桁行」(原則として長軸)とし、通常柱間の少ない部分の辺を「梁行」(原則として短軸)とするが、単に「長軸」「短軸」と記述する場合もある。庇を持つ建物の柱間の数は庇を含める。庇以外の部分を「身舎」とする。建物の方向は長軸の方向で示す。また、換算尺は唐尺(0.29635m)を用いたが、近似値を採用した場合もある。

S B26(第19図) C-29・31グリッドで検出した。S D 3をE B18が切っている。西側は調査区外のために全容は不明である。桁行4間の擗立柱建物跡で南北棟である。桁行全長は東側軒面で1,090cmを測る。柱間は桁行約270cm(9尺)を測り、大型の建物である。東側に庇がつく。庇部は約90cm(3尺)幅である。主軸方向はN-9°-Wである。柱穴掘方は径46cm~60cmの円形を呈

し、確認面からの深さは50cm前後となる。庇の柱穴掘方は径38cm前後の円形を呈し、確認面からの深さは約20cmである。柱根、遺物は出土しない。

S B27(第19図) H-26・27グリッドで検出した。東側でS D 8を切っていたと考えられるが、S D 8精査の際に削平され、全容は不明である。2間×2間の総柱の掘立柱建物跡であった可能性がある。桁行全長は西側軒面で540cmを測る。柱間は桁行約270cm(9尺)、梁行約94cm(3尺)を測る。主軸方向はN-10°-Eである。柱穴掘方は30cm～34cmの円形を呈し、確認面からの深さは約26cmである。E B32のアタリ部分から、口径108mm、底径60mm、器高25mmを測る底部回転糸切りの赤焼土器皿(36-13)が1点出土した。2間×2間の総柱の建物跡ということから倉庫跡と考えられる。柱根は出土しない。

S B611(第20図) O～P-29・30グリッドで検出した。桁行3間、梁行2間の掘立柱建物跡で南北棟である。桁行全長は西側軒面で514cm、梁行全長は南側軒面で336cmを測る。柱間は桁行で平均で175cm(6尺)、梁行は168cm(5.7尺)を測る。主軸方位はN-19°-Wである。柱穴の配置はやや不規則である。柱穴掘方は28cm～33cmの円形を呈し、確認面からの深さは12cm～30cmほどである。柱根、遺物は出土しない。

S B36(第20図) G～H-17・18グリッドで検出した。2間×2間の総柱の掘立柱建物跡である。桁行全長は西側軒面で360cm、梁行全長は南側軒面で360cmを測る。柱間は桁行180cm(6尺)、梁行180cm(6尺)を測る。主軸方位はN-4°-Wである。柱穴掘方は長径50cm～60cm、短径45cm～60cmを測る隅丸方形を呈し、確認面からの深さは22cm～30cmである。E B42から須恵器破片20点、甕破片1点、土師器壺破片3点計4点出土した。36-12は黒色土器A類の壺で、底部回転ヘラケズリされる。44-17は須恵器縫燒である。底部が丸底傾向で体部下半に回転ヘラミガキが施され、明瞭な稜が見られる。体部上半は外反しながら立ち上がる。半分が掘方覆土から、もう一方がSG 1・2 T 3から出土している。規模の大きな柱穴で、2間×2間の総柱の建物跡ということから倉庫跡と考えられる。柱根は出土しない。

S B600(第21図) P-28・29グリッドで検出した。暗渠により柱穴が北側の6本が切られる。2間×2間の総柱の掘立柱建物跡である。桁行全長は西側軒面で366cm、梁行全長は南側軒面で364cmを測る。柱間は桁行180cm(6尺)、梁行180cm(6尺)を測る。主軸方位はN-13°-Wである。柱穴掘方は50cm～60cmの円形を呈し、確認面からの深さは40cm～45cmである。規模の大きな柱穴を持ち、2間×2間の総柱の建物跡ということから倉庫跡と考えられる。

S B666(第21図) P～Q-29・30グリッドで検出した。S B600の南側に位置する2間×2間の総柱の掘立柱建物跡である。暗渠により中央の3本の柱穴が切られる。桁行全長は西側軒面で300cm、梁行全長は南側軒面で300cmを測る。柱間は桁行150cm(5尺)、梁行150cm(5尺)を測る。主軸方位はN-10°-Wである。柱穴掘方は径50cm～60cmの円形を呈し、確認面からの深さは50cm～60cmと深い。S B600に比してやや小振りであるが、規模の大きな柱穴を持ち、2間×2間の総柱の建物跡ということから倉庫跡と考えられる。柱根、遺物は出土していない。

S B730(第21図) P～Q-30・31グリッドで検出した。S B666の南側に位置する2間×2間の総柱の掘立柱建物跡である。暗渠により北東部の柱穴3本が切られる。桁行全長は西側軒面

で320cm、梁行全長は南側軒面で360cmを測る。柱間は桁行160cm(5.4尺)、梁行180cm(6尺)を測る。主軸方位はN-63°-Eである。柱穴掘方は径50cm~70cmの円形を呈し、確認面からの深さは58cm~75cmとかなり深い。規模の大きな柱穴を持ち、2間×2間の総柱の建物跡ということから倉庫跡と考えられる。柱根、遺物は出土しない。

S B1025(第22図) Q~R-25・26・27グリッドで検出した。桁行3間、梁行3間の掘立柱建物跡である。南側に庇が付く。身舎は3間×2間の東西棟である。桁行全長は北側軒面で、540cm、梁行全長は510cmを測る。柱間は桁行180cm(6尺)、梁行210cm(7尺)を測る。庇幅は90cm(3尺)である。主軸方位はN-22°-Wである。柱穴掘方は長径60cm~72cm、短径50cm~60cmの隅丸方形を呈し、確認面からの深さは40cm~54cmと深い。E B1044から黒色土器A類坏破片1点出土している。柱根は出土しない。南側に庇を持ち南面する建物であること、柱穴掘方の規模が最大であることなどから、西町田下遺跡の中心施設と考えられ、西側に3棟配置された倉庫群と何らかの関連を持つものと思われる。

S B1233(第22図) P~Q-26・27グリッドで検出した。基本的には桁行3間、梁行2間の掘立柱建物跡と考えられるが、南側梁行は柱が4本存在し3間となる。桁行全長は西側軒面で540cm、北側軒面で360cmを測る。柱間は桁行180cm(6尺)、北側梁行180cm(6尺)、南側は西から135cm(4.5尺)、90cm(3尺)、135cm(4.5尺)を測る。主軸方位はN-27°-Wである。柱穴掘方は径30cm~44cmの円形を呈し、確認面からの深さは35cm~45cmである。柱根、遺物は出土しない。S B1025と近接するため同時期に存在していたとは考えられない。

以上、個々の建物跡について概略を述べた。分布状況は、削平が激しい東側北部分を除いて全域に広がる。また調査区西側を大きく蛇行しながら北流するSG 1・2河川跡右岸の自然堤防上に建物跡が存在することがわかる。さらに傾向として、堅穴住居跡は自然堤防上のやや高い部分に、掘立柱建物跡はその東側でやや低くなっている地域に分布する様相が看取出来る。また、堅穴建物跡は調査区の北及び東部分に、掘立柱建物跡は南側に分布している。

堅穴住居跡は、出土遺物・主軸方位や周溝の有無・カマドの有無とその位置・規模等によりグループ化し帰属する年代区分を行うことが可能であると考え、分類と年代区分を試みた。周溝があり、規模の小さいST 35・1375、および周溝はないが出土遺物の特徴などから同時期と考えられるST 1592をA群、規模が大きく主軸方位がほぼ磁北にのるST 34・47・447・1150・1491をB群、中規模で南辺にカマドを有し、磁北からの振れが±10°に収まるST 48・1488・1506・1745・2260をC群、東ないし南東隅にカマドを有するST 96・1195をD群、隅丸長方形で東辺にカマドを有するST 46をE群、東辺にカマドを有するST 1441をF群とする。A群は7世紀末から8世紀初頭、B群がそれに続き8世紀前半と位置づけ、C群を8世紀後半としてまとめるがST 1488はその中でも早い段階の8世紀中葉としたい。次いでE群が8世紀後半から9世紀初頭とする。D群はC群に並行し、F群はB群の後半に並行すると考えられる。

掘立柱建物跡は、出土遺物・主軸方位・庇の有無とその位置・柱穴掘方の規模とその形状などによりグループ化し帰属する年代区分を行うことが可能であると考え、分類と年代区分を試みた。柱穴掘方が隅丸方形を呈し規模の大きいSB 36・1025をA群、柱穴掘方が円形を呈し、径

60cm内外の規模の大きな総柱建物のS B600・666・730をB群、柱穴掘方がB群と同様で底を持つS B26をC群、S B1233をD群、その他をE群とする。A群はS B36の柱穴E B42のアタリから底部回転ヘラケズリの内面黒色処理された坏と、底部及び体部下半に回転ヘラケズリが施され体部下半に明瞭な稜を持つ須恵器破壊が出土している。これらは8世紀後半を下らないと判断される。よってA群は8世紀中葉もしくはそれ以前とすることが出来る。B群はA群にほぼ並行し、C群はB群に統くと考えられる。E群はS B27の柱穴E B32から底部回転糸切りの赤焼土器皿が出土している。よってE群は9世紀後半を下らないものと理解される。D群はE群に先行するものと考えられ、8世紀末～9世紀初頭としたい。

掘立柱建物跡の配置については、S B1025とS B600など3棟の倉庫群を中心にして考えなければならない。南側に底を有し南面する東西棟で、隣接して倉庫群が南北に連なる様相は、「配置の規格性」が窺われる。したがって、何らかの官衙あるいは官衙関連施設の可能性が強いものと考えることができるのである。

奈良時代を通して、地方官衙及び官衙関連施設には「郡衙」や「駅家」等があり、「郷衙」の存在も指摘されつつある。本遺跡では、S B1025を正殿とすれば、脇殿となるべき建物跡が検出されない。S B1025の南西側に柱穴の集中する区域があるが、暗渠と考えられる溝による攪乱や、調査区南端ということもあり、脇殿と考えられる建物跡を確認することは出来なかった。一般に、郡衙の建物配置は武藏国都筑郡衙（神奈川県青葉区長者原遺跡）に見られるように、大型掘立柱建物の正殿が南面し両脇に東西の脇殿があり、その外側に倉庫群が南北に連なり、周囲に厨家や居館などが、「コ」の字型に計画的に配置されている。そうした「郡衙」の諸要件に照らすと、本遺跡は「郡衙」と断定することは難しいと言わざるを得ないのである。

しかし、このことで本遺跡が官衙あるいは官衙関連施設であるということが否定されると言うことではないのである。10個体におよぶ円面鏡の出土や道路遺構の存在、大きな河川に隣接することなど、駅家や水駅などの官衙的施設、あるいは郡衙の付属施設や出先機関などの官衙関連施設、郡司や官吏の居住施設などの可能性が指摘されよう。

3 井戸跡（第23図）

S E 1733 O～R-16グリッドに位置する。掘方は長径368cm、295cmを測る不整梢円形で、深さは確認面から約150cmである。当初は土壌として登録し精査に入ったが、井戸のアタリが認められたので井戸跡とした。井戸眼として使用されたと見られる削り物が出土した。長径90cm、短径78cm、最大8cmを測る梢円形で、高さは45cm程度残存している。樹種はクリ材と思われる。削り物は丸太を縦に半分にした後に削り貫き、接合した可能性も考えられる。断面観察から、確認面から60cm付近まで井戸眼があったものと考えられる。井戸眼覆土からは遺物は出土していない。遺物は、須恵器坏・壺・甕破片27点、円面鏡1点、土師器坏・甕破片43点、黒色土器A類坏破片66点計137点出土した。比較的上層の2～3層、特に3層で多く出土している。出土遺物は36-14～37-6の10点図示した。36-14・15は黒色土器A類の坏で、36-15は底部回転糸切である。36-16は須恵器坏で底部回転糸切である。2層からの出土である。37-2は須恵器高台付坏で、底部及び体部下半は回転ヘラケズリされ、重焼き痕跡が残る。37-5は須恵器円面鏡である。詳細は

後述するが、観面径108mmを測る。圓脚部が破損しており全形は不明である。

出土遺物と断面観察などから、S E1733は8世紀の早い段階で機能を終えて埋められて覆地となり、8世紀中葉頃より捨て場にされたと推測される。

S E369 C-29グリッドに位置する。掘方は長径217cm、短径195cmを測り不整梢円形を呈する。深さは確認面から約100cmである。井戸枠・井戸眼等の施設は認められないが、掘方の傾斜が急であることなどから、井戸跡とした。遺物は出土していない。

4 溝跡（第24～26図）

溝跡は、調査区全域で規模・方向・新旧など多彩な状況で検出されている。

以下、個々について概述する。

S D12(第24図) G-23～I-17グリッド、S G 1・2の東側で検出した。S T35を切って北流すると考えられる。幅70cm～100cm、深さ12cm前後を測る。覆土中から、須恵器坏・蓋・壺破片21点、土師器坏・壺破片59点、黒色土器A類坏・壺破片22点計102点出土した。

S D1235(第24図) G-28～H-24グリッド、S G 1・2の東側で検出された。S T34を切って北流すると考えられる。幅90cm～150cm、深さ24cmを測る。遺物の出土はなかった。

S D13(第24図) H-11～D-4グリッド、S G 1・2の北側で検出した。幅60cm～100cm、深さ12cmを測る。覆土中から、須恵器坏破片4点、土師器壺破片13点計17点出土した。

S D12・1235・13は、道構配図や断面観察により同一の溝の可能性が高い。S G 1・2を取り巻いていることから、増水などによる冠水防止、あるいは集落の境界などの機能を考えられる。時期は出土遺物などから、8世紀後半から9世紀初めと考えられる。

S D806(第24図) K-23～L-24グリッドで検出した。幅44cm～56cm、深さ約22cmを測る。ほぼ東西に真っ直ぐに延びている。両端は農業用水路により切られており全容は知り得ない。遺物は出土していない。

S D 9(第25図) J-31～J-24グリッドで検出した。幅40cm～50cm、深さ約16cmを測る。ほぼ南北に真っ直ぐに延びている。北端は農業用水路により切られ、南端は調査区外に延びている。覆土中から、須恵器坏・壺破片2点、土師器坏・壺破片4点計6点出土した。

S D806とS D 9は、覆土に若干の相違があるが規模などに共通するものがある。また、直交すると考えられることから、何らかの区画施設である可能性も指摘することができる。S B1025とS B600等の倉庫群との関わりについて、十分な検討が必要である。

S D1285(第25図) K-21～O-17グリッドで検出した。幅30cm～40cm、深さ約18cmを測る。覆土中から、土師器坏・壺破片3点出土している。

S D1258(第25図) K-22～M-20グリッドで検出した。幅50cm～60cm、深さ約20cmを測る。覆土中から、須恵器坏・壺破片6点、土師器壺破片3点、黒色土器A類坏破片1点計10点出土し、52-22の1点を示した。口径210mmの須恵器壺の口縁部で、灰被りが見られる。

S D 3(第25図) A-29～D-27グリッドで検出した。S B26 E B18に切られる。東側はS G 1・2を切ると考えられるが確認できなかった。西側は調査区外に延びており不明である。幅100cm～120cm、深さ約20cmを測る。調査区内でも規模の大きな溝である。覆土中から、須恵器坏・

蓋・壺破片8点、土師器壺10点、黒色処理A類壺2点計20点出土した。直線的に延びることなどから、何らかの区画施設の可能性がある。

S D2220(第26図) O-10グリッドで検出した。東側をS D2245に切られ、全容は不明である。幅80cm~115cm、深さ約22cmを測る。覆土中から、須恵器壺破片3点、完形1点、土師器壺・壺破片43点、黒色土器A類壺2点計49点出土した。出土遺物は、37-7-8の2点図示した。37-7の土師器壺の中にはベンガラに類似した物質が確認され、理化学分析を委託した。詳細については、付編に譲る。

S D2030(第26図) J-12~Q-11グリッドで検出した。6°傾くが直線に東西に延びる。幅80cm~100cm、深さ40cmを測る。掘方はV字型を呈し、東側中央部分の全ての遺構を切る。覆土中から、須恵器壺・蓋・壺破片64点、土師器壺・壺破片278点、黒色土器A類壺32点計374点出土した。何らかの区画施設と考えられる。

S D1505(第26図) K-15~Q-14グリッドで検出した。S T1506・S T1745を切っている。幅100cm~200cm、深さ30cmを測る。覆土中から、須恵器壺・蓋・壺破片191点、土師器壺・壺破片570点、黒色土器A類壺破片81点計842点出土した。切っている2棟の竪穴住居跡に所属する遺物がかなり含まれると考えられる。出土遺物は37-9~12の4点図示した。

S D2324(第26図) O-10~N-9グリッドで検出した。幅50cm~70cm、深さ15cmを測る。遺物は出土していない。

S D2245(第26図) O-9~P-10グリッドで検出した。幅105cm、深さ19cmを測る。覆土中から、土師器壺破片3点出土した。

S D2006(第26図) N-9~N-10グリッドで検出した。幅50cm、深さ13cmを測る。遺物は出土していない。

5 道路遺構(第27図)

調査区の南側H~J-30~24グリッドで、南北に並行する2条の溝を確認した。西側のS D8は幅300cm、深さ60cm~80cmを測り、東側のS D10は幅200cm、深さ62cmを測る。S D8は、H-24グリッドで農業用水路に切られ、さらには場整備による削平を受け痕跡を残さない。基本層序D(第3図)に僅かに底部の一部を残す。S D10は、J-24グリッドで農業用水路に切られ痕跡を残さないが、農業用水路はS D10の延長線上に連なる。主軸方位はそれぞれN-11°-Eを測り、ほぼ真北に真っ直ぐ延びている。両溝の心々距離は、平均して836cm(28尺)を測る。S D8覆土中から、須恵器壺破片4点、土師器壺・壺6点、黒色土器A類壺1点計11点、S D10覆土からは、須恵器壺・壺破片7点、土師器壺・壺破片2点、黒色土器A類壺1点計10点出土している。出土遺物から両溝は同時期に存在していたことが推測される。

明治初期作成(大正年間焼失のため複製)の地籍図と字切図及び昭和40年代後半に撮影された空中写真(山形県立博物館所蔵)を詳細に観察した結果、以下の点に注目した。

- ① 西町田下遺跡で検出した2条の並行する溝を、北に延長した地点に大道端東・大道端西の小字名が存在すること。
- ② さらに北には延長線上に連なるように水路が直線に延びるのが確認できる。

- ③ 南の延長線上の荒川集落の北端に、約10m幅の窪地があり細長い水田となっている。
- ④ 両溝とその南北延長線の東側に、条里方格地割が残存していると考えられる、畦及び水路で方形に区画された部分があること。

これらのことから、SD8・SD10は道路側溝であり、両溝に挟まれた部分が古代道路遺構であると判断した。山形県内で検出された道路遺構は、酒田市手蔵田遺跡などがあるが確認例は多くない。

今回検出された道路遺構の性格については、駅路あるいは伝路が考えられる。駅路とすれば東山道となるが、東山道の駅は陸奥国柴田駅から笛谷峠を越え、出羽国に入り秋田駅に向かう。置賜を通るコースをとらないのである。したがって、西町田下遺跡で検出された道路遺構は、郡家間を結ぶ伝路などの可能性が指摘できる。養老律令や「令集解」・「延喜式」等には、伝路では、郡毎に伝馬が五疋置かれ使用の際伝符の提示を要し、伝馬は国司の赴任または罪人の護送に用いるとある。

本遺跡で検出した道路が機能していた時期であるが、SD8を切ると考えられるSB27掘立柱建物跡の柱穴掘方から、底部回転糸切の赤焼土器が出土していることから、9世紀初めには機能しなくなり、埋没したと考えられる。

今後県内においても、道路遺構の発掘例が集成されることにより、さらに検討が必要になる。

6 土壌（第27～30図）

土壤は、調査区全域から多数検出されている。比較的新しい時期の耕作に伴うと考えられるものも多い。また、性格不明の遺構についても併せて概述する。

SK1481・SK1483(第27図) L-16グリッドで検出した。須恵器壺・甕、土師器甕、黒色土器A類壺など破片で出土した。

SK2273(第27図) O-11グリッドで検出した。長径135cm、短径110cmの楕円形を呈し、深さは27cmを測る。須恵器壺破片8点、土師器甕破片68点、黒色土器A類壺破片10点計86点出土した。

SX2345(第28図) I-7グリッドで検出した。西側を農業用水路に切られ、全形は不明である。長軸300cmで、深さは7cmを測る。底面は平坦であり、竪穴住居跡の可能性も考えられる。遺物は出土していない。

SK246(第28図) H-22グリッドで検出した。東側を農業用水路に切られる。長軸260cm、深さは34cmを測る。出土遺物は、37-13の1点のみ出土した。弥生土器の高壺である。脚部下部に3条の沈線が見られる。

SK2103(第28図) M-11グリッドで検出した。長径150cm、短径110cmの不整楕円形を呈し、深さは35cmを測る。須恵器壺・蓋・甕破片18点、土師器壺・甕破片47点、黒色土器A類壺・甕破片2点計67点出土した。出土遺物は37-14、51-14の2点を図示した。37-14は底部回転糸切の須恵器高台付壺で底部に墨書きされている。51-14は須恵器甕の体部である。

SK2508(第28図) N-1グリッドで検出した。径60cmの円形を呈す。深さは10cmを測る。調査区北端にあり、ほ場整備による削平で残りが悪い。覆土中から土師器甕破片が出土した。

S K 1883(第28図) J-10グリッドで検出した。長径97cm、短径66cmの不整楕円形を呈し、深さは23cmを測る。出土遺物は38-1の1点図示した。黒色土器A類の壺で体部中央に沈線状の段を有し、底部は丸底で手持ちヘラケズリされる。

S K 2079・S X 2084(第29図) M-11グリッドで検出した。S K 2079を精査中に、西側壁面で遺物を確認、S K 2079西側に2m四方のトレンチを設定しS X 2084として登録した。S K 2079は長径190cm、短径160cmの不整楕円形を呈し、深さは28cmを測る。須恵器壺・円面鏡破片9点、円面鏡1点、土師器壺・甕破片360点、黒色土器A類壺・甕33点計403点出土した。S X 2084は2m四方を約5cm掘り下げたところ、遺物の散布が確認された。須恵器壺・蓋・甕破片6点、土師器壺・甕破片307点、黒色土器A類壺・甕破片27点計340点出土した。出土遺物は38-2~39-17の31点図示した。38-2は外面ヘラミガキの土師器甕である。38-5は底部に木葉痕を残す土師器小甕で、口縁部は強いナデがあり口縁端部は玉縁を呈する。38-10・11は黒色土器A類の壺である。非クロロで底部は手持ちヘラケズリである。38-11は丸底で体部中央に沈線状の段を有し、口唇部はやや外反する。栗圓式後期と並行すると考えられる。38-12~14は須恵器円面鏡である。詳細は後述するが、38-12・14は中空円面鏡である。38-12は高台付壺を硯面で遮蔽した形態の壺皿型と呼ばれるものである。38-14は甕を扁平にし硯面で遮蔽をした形態で手付有孔中空円面鏡とする。体部中央と肩部に横描波状文が巡る。38-13は大型の円面鏡である。圈脚部は破損しており全形は不明である。39-17は小型の円面鏡である。上下に2条の沈線が巡り、その間に縦位の沈線があり、透かし孔が5個配される。主体となす土師器甕の特徴は、頸部に沈線状の段を有し口唇部が玉縁を呈すことである。宮城県の7~8世紀初頭の遺跡から多く出土している。39-7は手づくねの甕である。古墳時代の可能性もある。

S X 1850(第30図) L-9グリッドで検出した。長軸600cm、短軸120cmの不整形を呈し、深さは30cmを測る。須恵器壺・蓋・甕破片29点、円面鏡1点、土師器壺・甕破片145点、黒色土器A類壺破片18点計193点出土した。出土遺物は39-21~40-3の5点図示した。40-3は須恵器円面鏡で硯面径約20cmを測る。大阪府陶邑TG64出土品に類似し、7世紀前半の可能性がある。

S X 2335(第30図) L-11グリッドで検出した。長軸300cm、短軸260cmの不整方形で、深さは17cmを測る。S D 2030やS K 1968等に切られ全形は不明である。底面は平坦である。須恵器壺・蓋・甕破片10点、土師器甕破片78点、黒色土器A類壺・甕破片10点計98点出土した。出土遺物は39-18~20の3点図示した。39-18は黒色土器B類矮甕である。福島県塙内遺跡など8世紀前半の遺跡と類似する。39-19は丸底叩き出し技法の土師器甕で、体部は外面叩き、内面アテ痕が残る。7世紀末頃の北陸系の甕で、置賜地方では初出である。

S K 1669(第30図) N-16グリッドで検出した。長軸186cm、短軸130cmの不整楕円形で、深さは16cmを測る。須恵器壺・蓋破片32点、土師器甕破片75点、黒色土器A類壺破片22点計129点出土した。出土遺物は40-5を図示した。須恵器蓋で回転ヘラケズリされている。転用甕である。

S K 2214(第30図) N-9グリッドで検出した。長軸156cm、短軸107cmの楕円形で、深さは21cmを測る。須恵器壺・甕破片4点、土師器壺・甕破片92点、黒色土器壺破片6点計102点出土した。出土遺物は40-4を図示した。黒色土器B類盤である。底部手持ちヘラケズリされている。

7 河川跡（第31・32図）

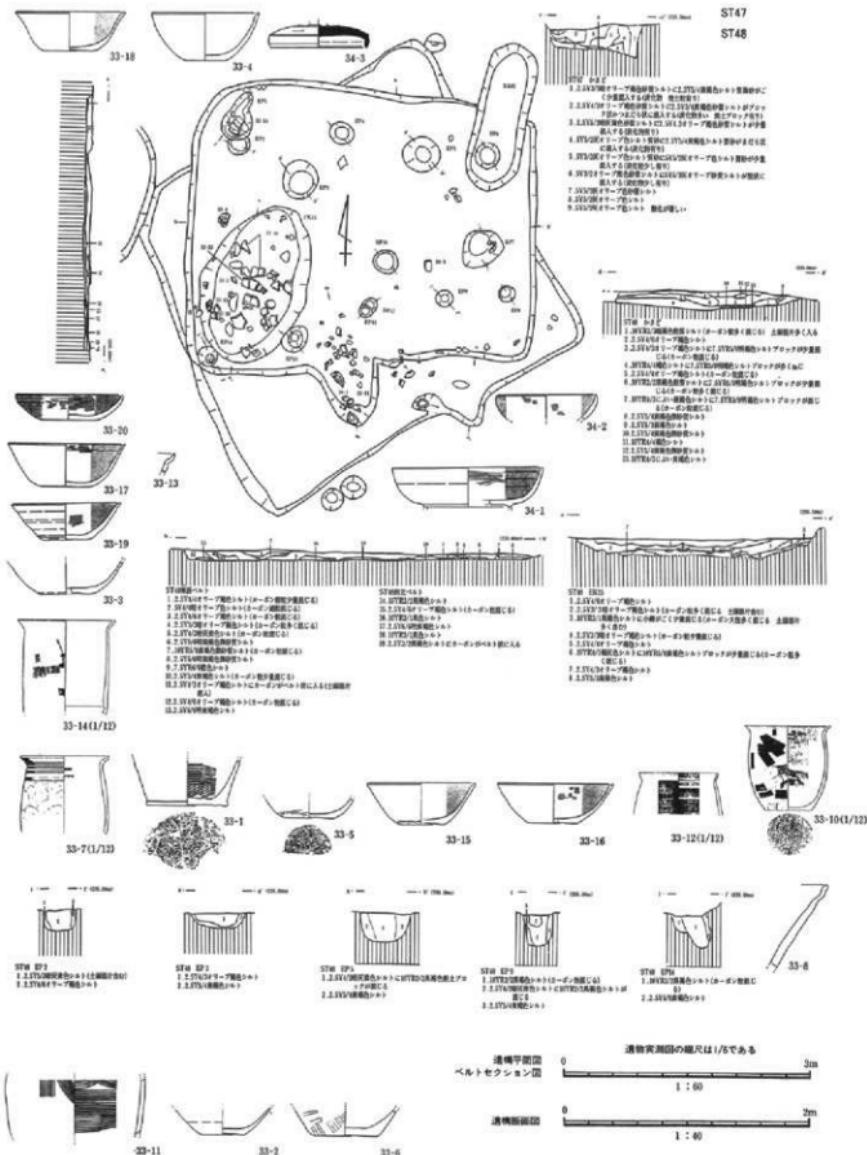
S G 1・2は調査区西側、A～G-28～10グリッドで検出した。大きく蛇行しながら北流し、入り江状を呈する。西側は調査区外のため川幅等全容は不明である。川幅の広いS G 1が長い期間流路を変えながら流れ、埋没後S G 2がほぼ同じ流路を幅を狭めて流れたことが、断面観察により理解される。

S G 1は幅20m以上、深さは100cm～140cmを測る。底面は概ね平坦であるが、一部に窪地状になる部分や緩い起伏が付く部分もある。D～F-27～16グリッドまでの川岸は川底からの立ち上がりが急角度である。洪水などにより抉り取られた可能性がある。B～G-10～11グリッドまでの川岸は川底からの立ち上がりは緩やかである。S G 2は幅250cm～450cm、深さ60cmを測り、断面形は舟底型を呈する。S G 1下層は人頭大の礫を含む粗砂及び細砂層であり、中層は粘土層にシルト層と砂層が交互に混じり、上層はシルト層である。かなりの水量を保ち、流れも早かったものと考えられる。東側調査区内の遺構を覆うシルトは、洪水などの河川活動によるもののが可能性がある。S G 2上層は粘土質シルトである。下層は粘土で有機物を多く含み、緩やかな流れであったと考えられる。遺物の出土は、南側S G 1・2 T 2(第32図上)では5層と22～24層、41層下部から出土する。5層はS G 2の下層にあたると考えられる。北側S G 1・2 T 3(第32図下)では川岸に近い63層下部とその下の礫層中から出土する。下駄・漆器椀などの木製品計4点はS G 2から出土している。

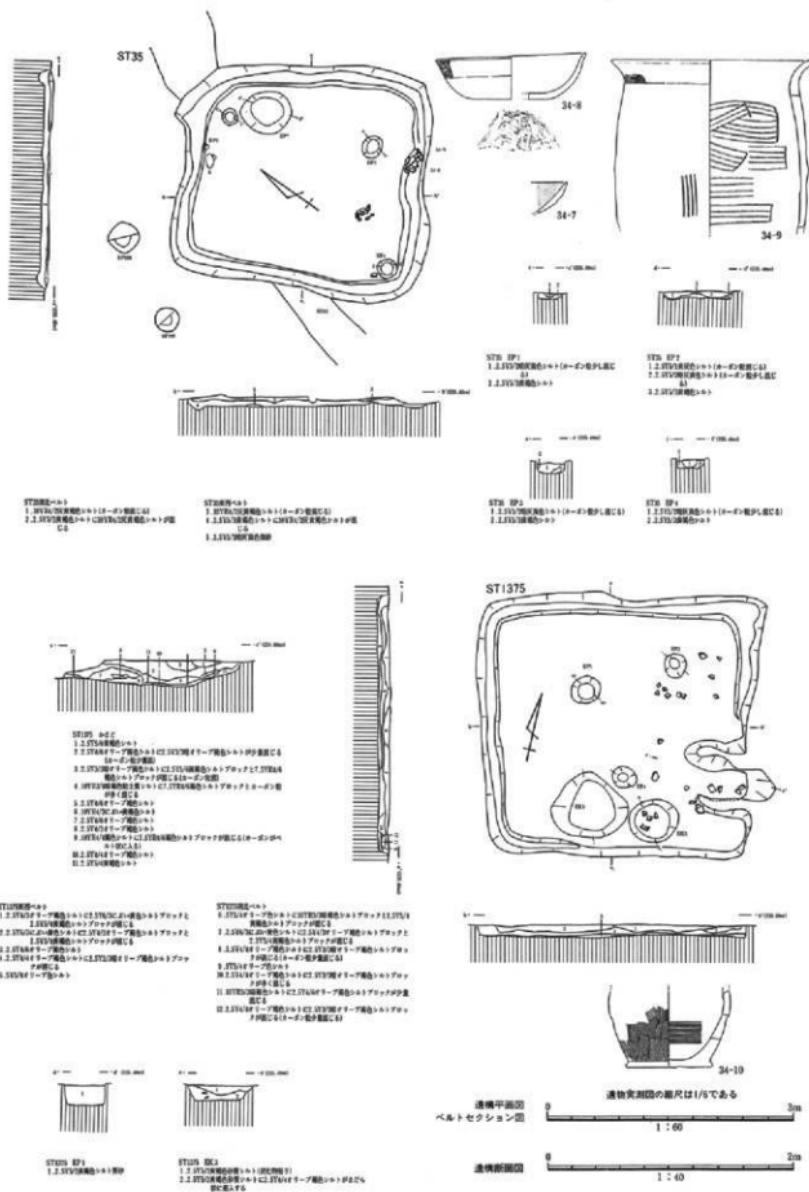
遺物は、弥生土器甕破片3点、須恵器坏・蓋・甕・壺破片2873点、土師器坏・甕破片1909点、黒色土器坏・蓋・甕破片1022点計5813点出土した。土師器坏の中には、赤焼土器坏も若干含まれる。これは西町田下遺跡の全出土量の25.2%を占める。特に、C～G-10～12グリッドからの出土が90%以上であり突出している。第31図はこの部分の遺物出土状況である。大きめのドットは登録して取り上げた遺物を、小さいドットはその他の遺物を示す。C～D-11グリッドを中心とする区域で須恵器甕などの貯蔵形態が主体となり、F-12～13グリッドを中心とする区域では供膳形態が主体をなしている。

出土遺物は、40-6～50-13の180点図示した。実測した遺物389点の46.3%を占める。出土土器の特徴は、須恵器坏では口径に比して底径が大きく、底部回転ヘラ切りの後回転ヘラケズリを施すものが主体となり、底部手持ちヘラケズリの一群が見られる。高台付坏では体部中央に稜を持つ複旋窓がある。甕では大振りな口縁部に櫛描波状文が巡るものが主体となる。黒色土器では口径に比して底径が大きく器高が低い須恵器坏写の黒色土器A類坏と器高の高い甕が主体となる。底部切り離しは回転ヘラ切りであるが一部糸切りも見られる。いずれも底部及び体部が回転ヘラケズリされる。丸底や丸底で体部中央に段を有する一群も少量存在する。赤焼土器坏はS G 1・2 T 222～24層で出土した。白色の胎土を持ち何らかの祭祀を想起される。また、北陸系の製塙土器片も出土している。

本河川は旧宮井村と旧塙野村の村境として長期間機能していたことが、字切図から理解され、昭和40年代後半までS G 2は存在していたことが前出空中写真により観察される。

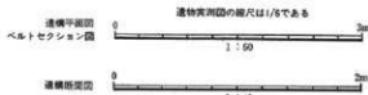
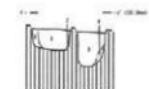
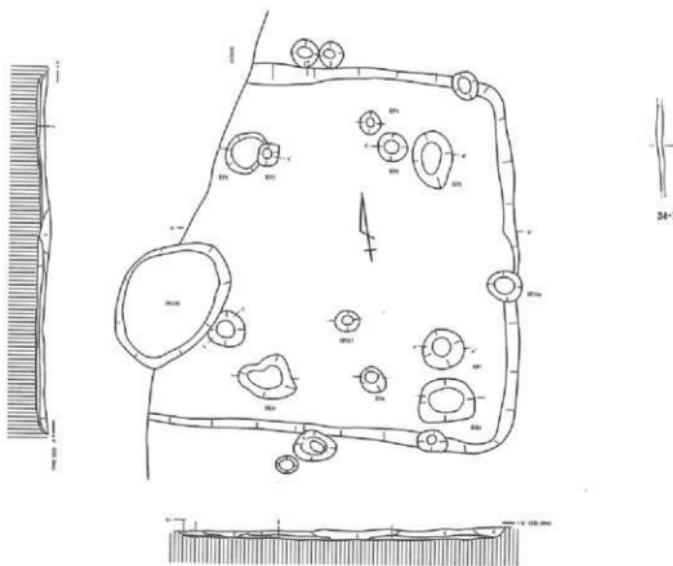


第5図 遺構実測図(1)

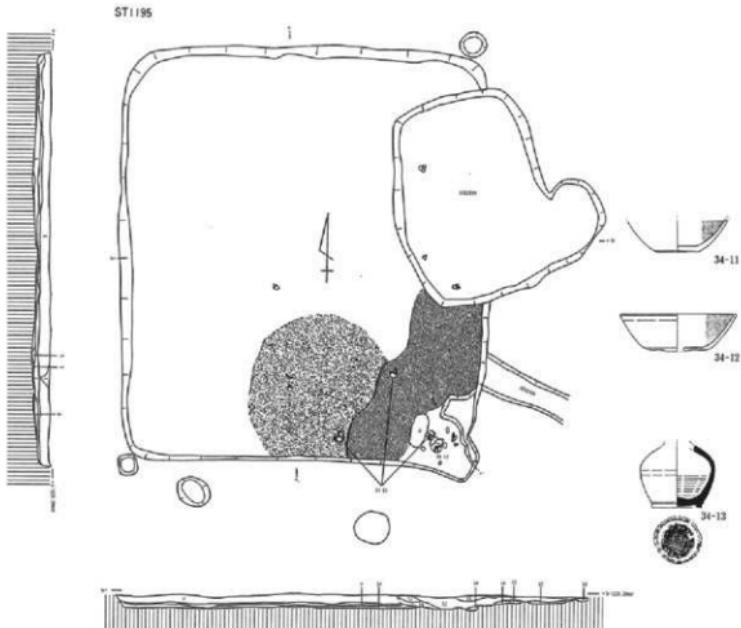


第7図 遺横実測図(3)

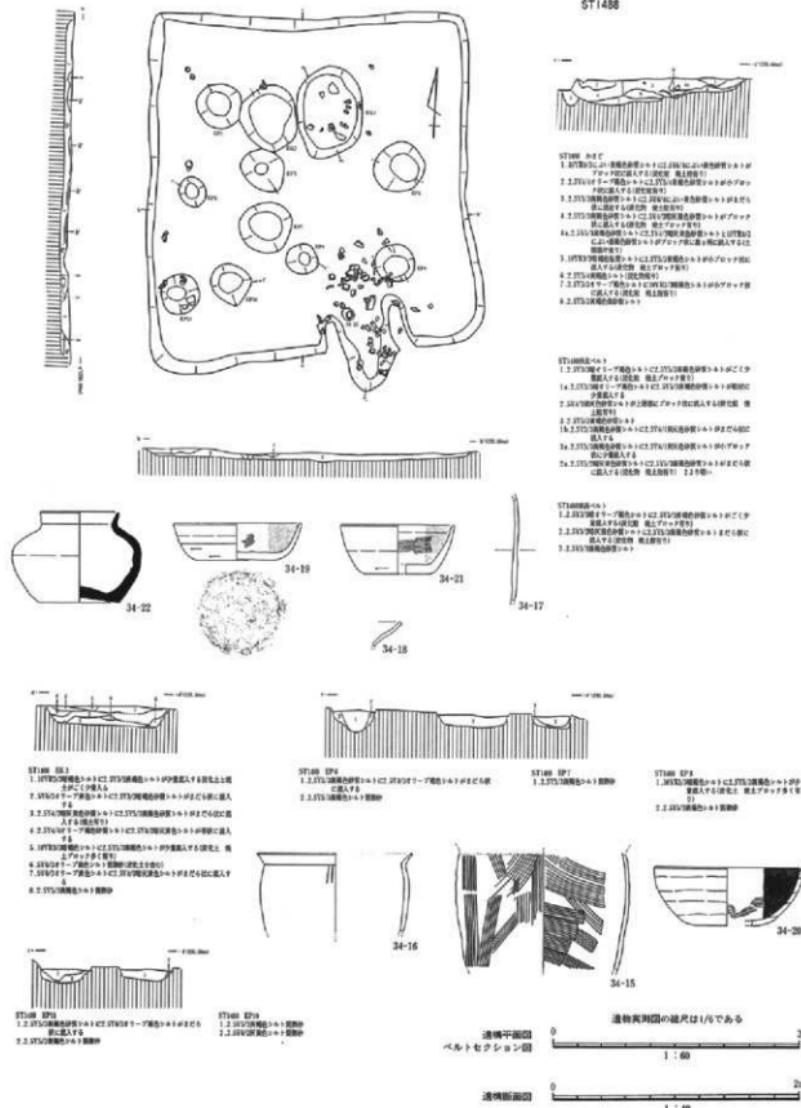
ST34



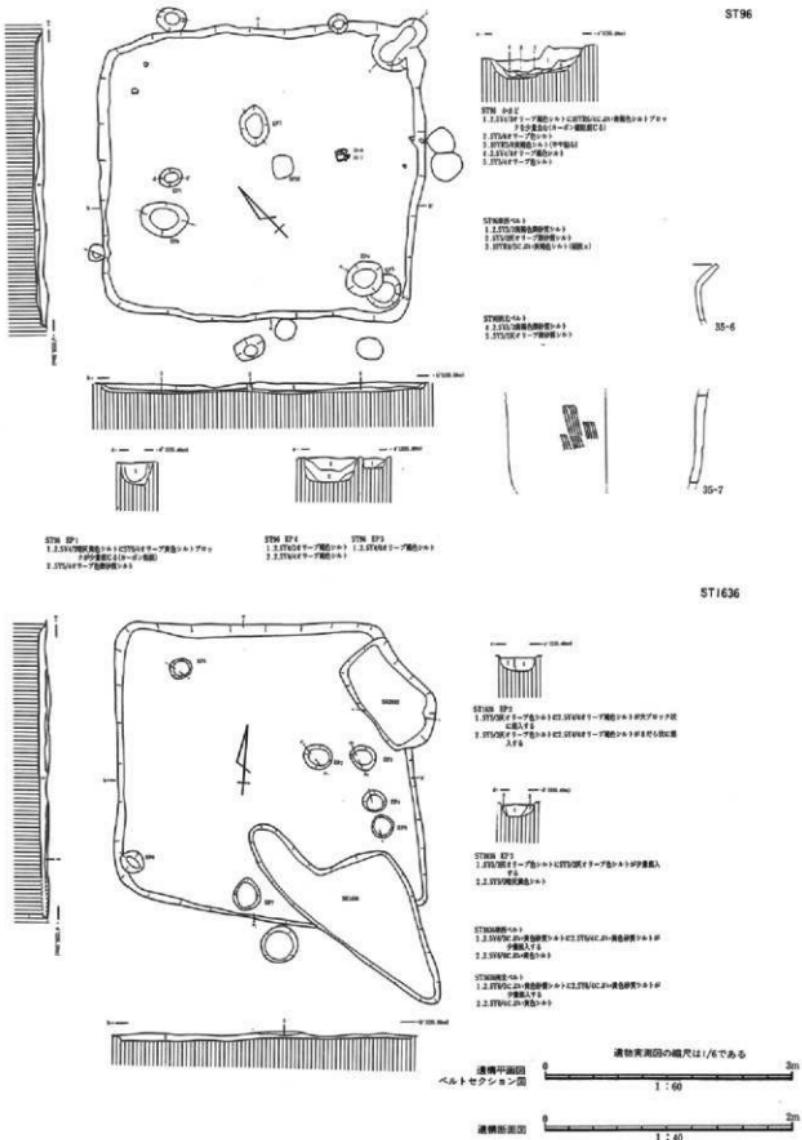
第8図 遺構実測図(4)



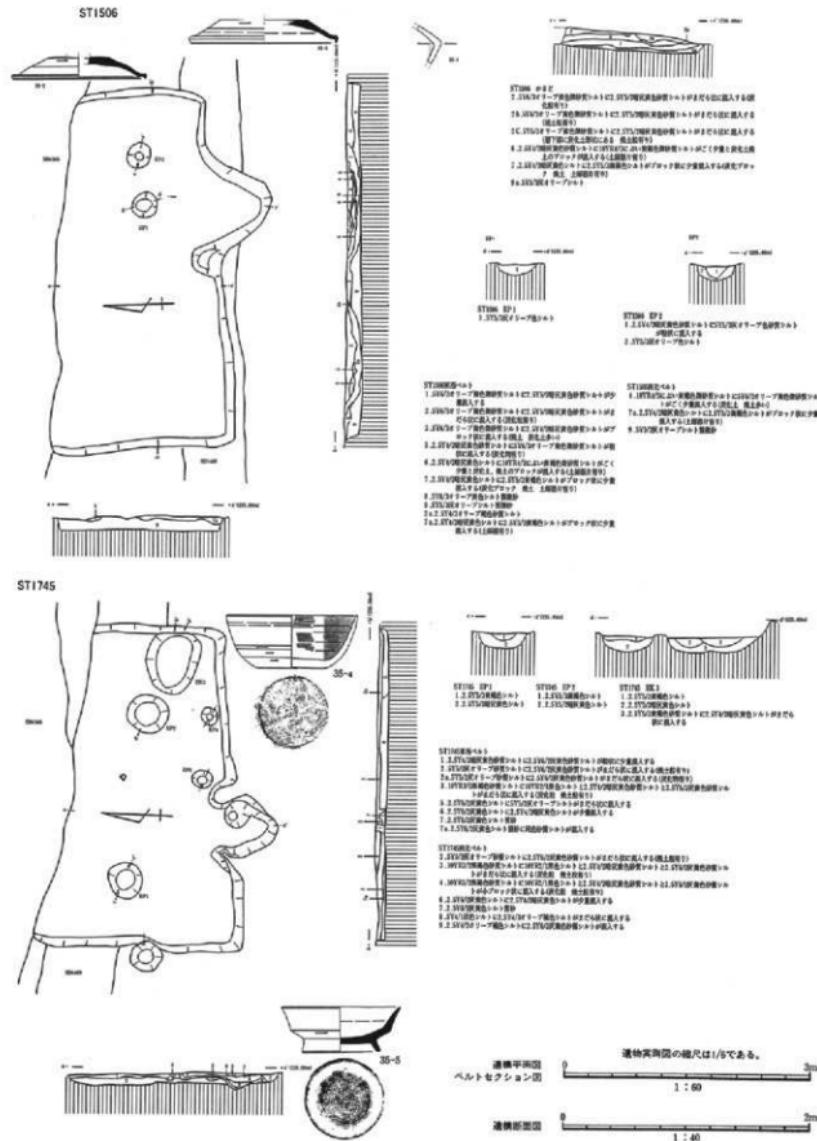
第9図 遺構実測図(5)



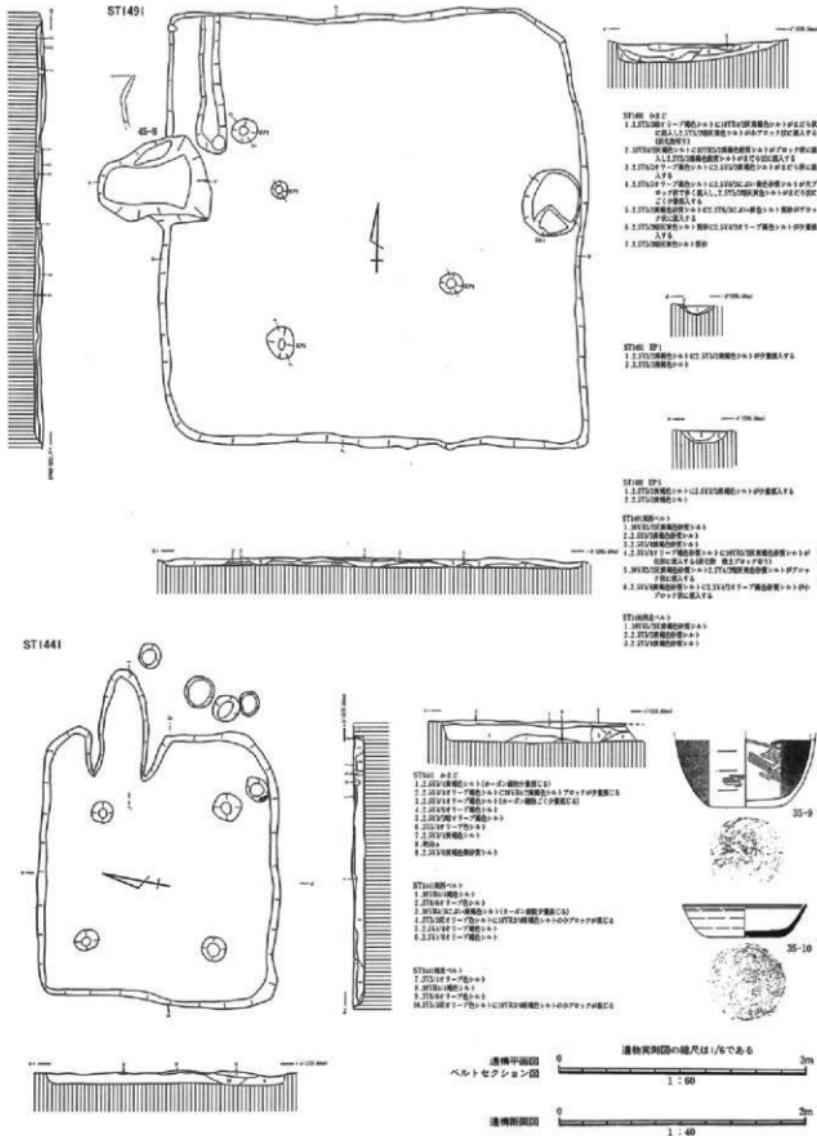
第10回 遺構実測図(6)



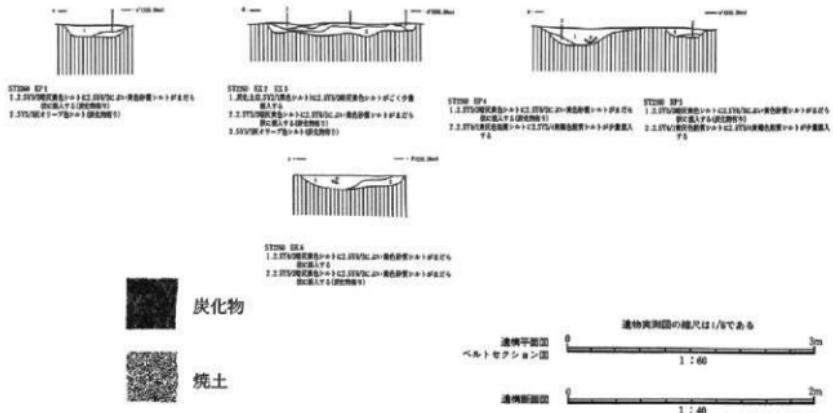
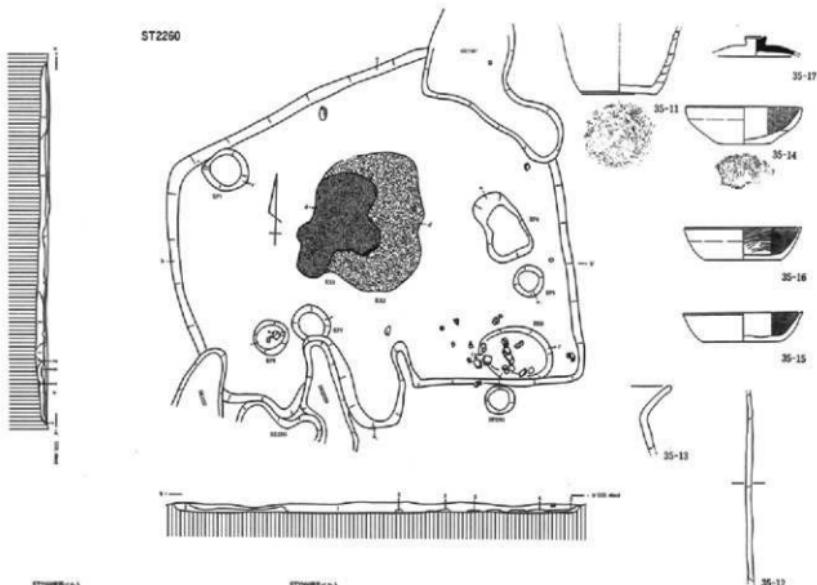
第11図 遺構実測図(7)



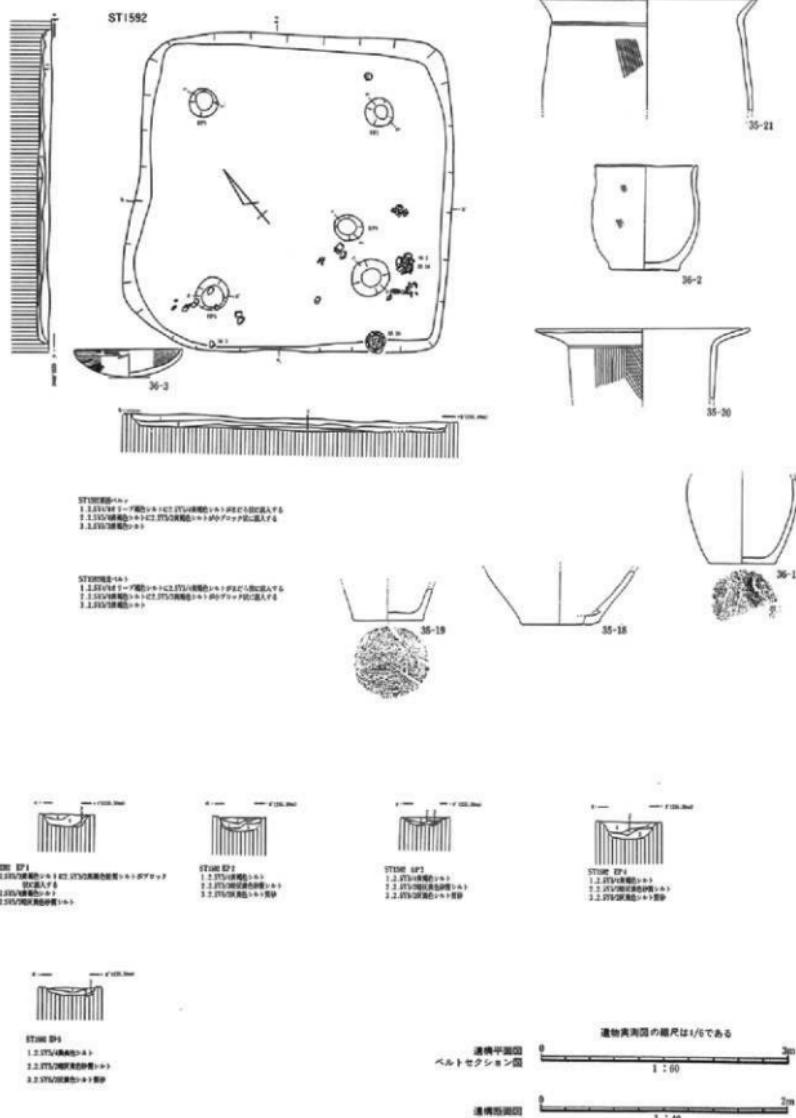
第12図 清構実測図(8)



第13図 遺構実測図(9)



第14図 遺構実測図(10)





ST2289



STUDIO 101
1.2. STUDIO 101 動画を共有するには、以下の操作を行ってください。



STORM EPI
1.2.511.14.9-7990



STORY 873



STAMM BPA
1.3.560007-7



STUDIO GP5
1.2. STUDIO用純色切换键に、STUDIO切换键が追加される
に追加する
2.2. STUDIO切换键を



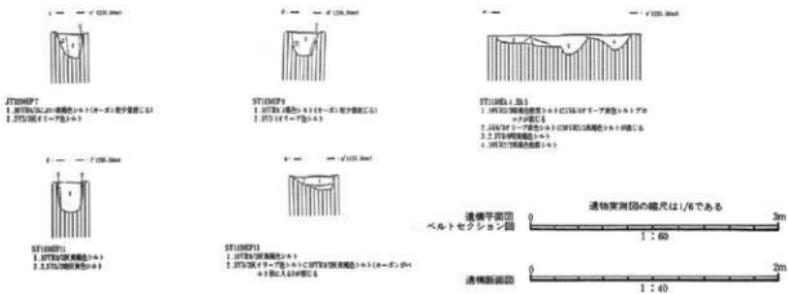
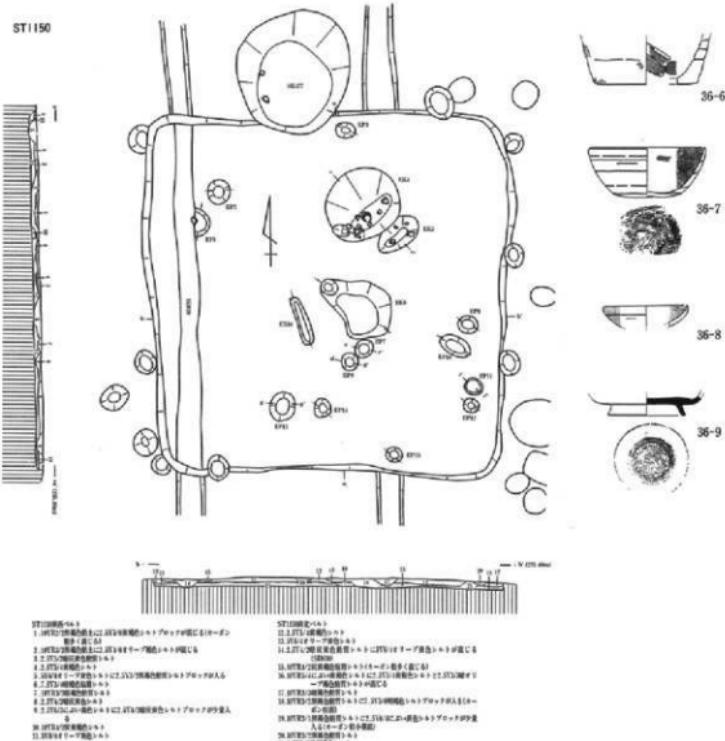
ST7000 RF
1.2.3W 2W白色以上に1.3W 2W以上青色以上がまだ少しに遅
入力4.6W以上 電源電流1.5A
2.2.3W 2W白色1~7秒間



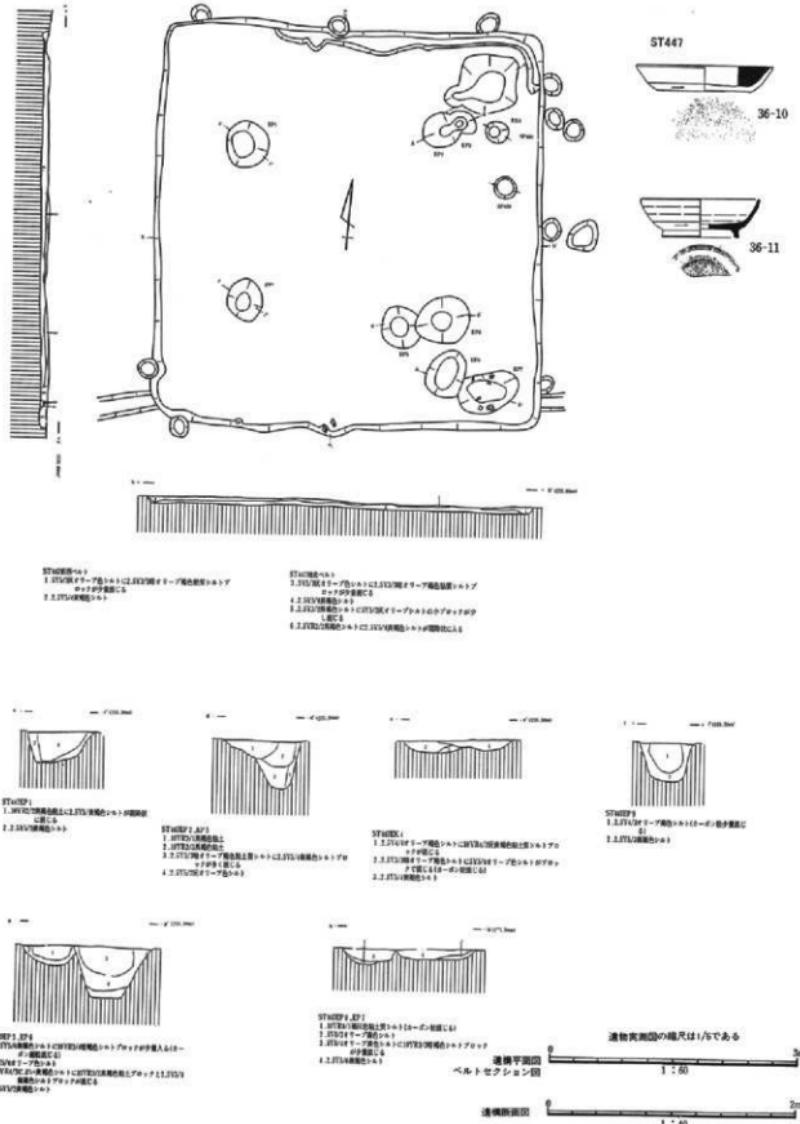
ST7000 EP1
1.25V/5Vアラート(2.5V12Vアラート監視機能)トボル電源に
組み、シングル電源に組みする
1.25V/5Vアラート



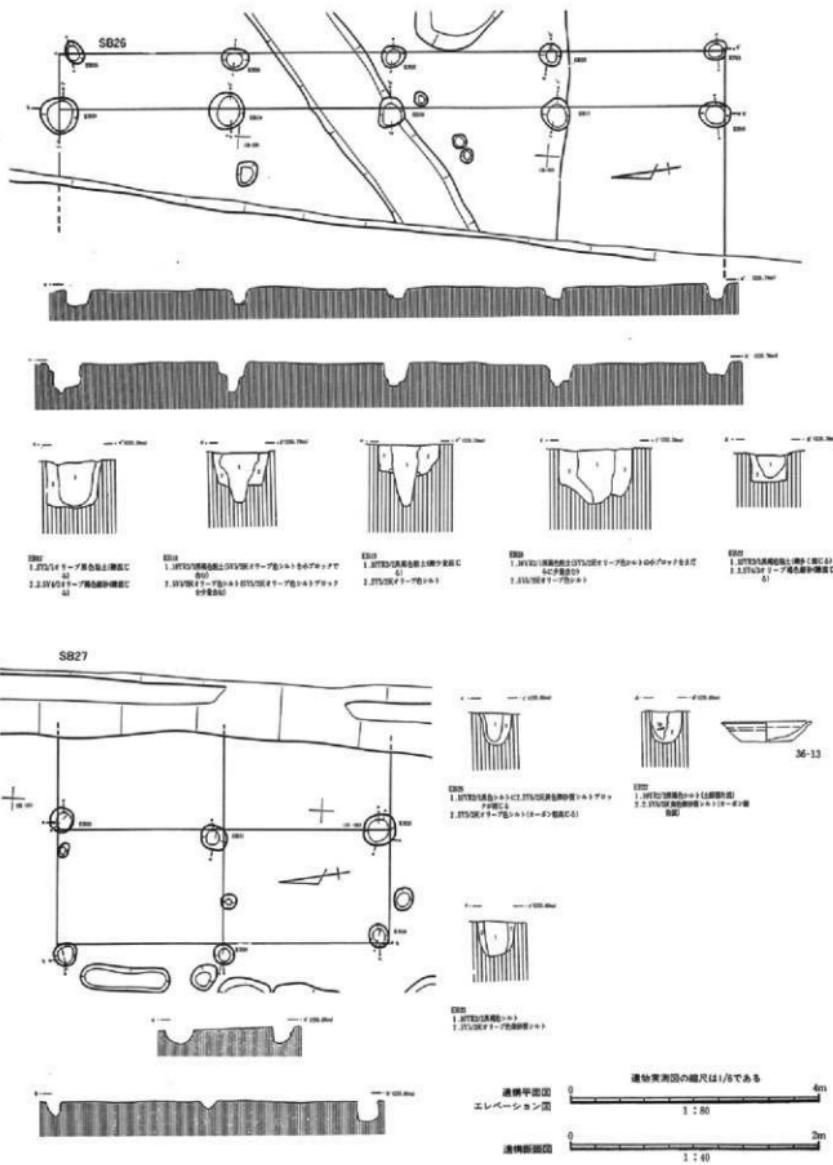
第16図 遺構実測図(12)



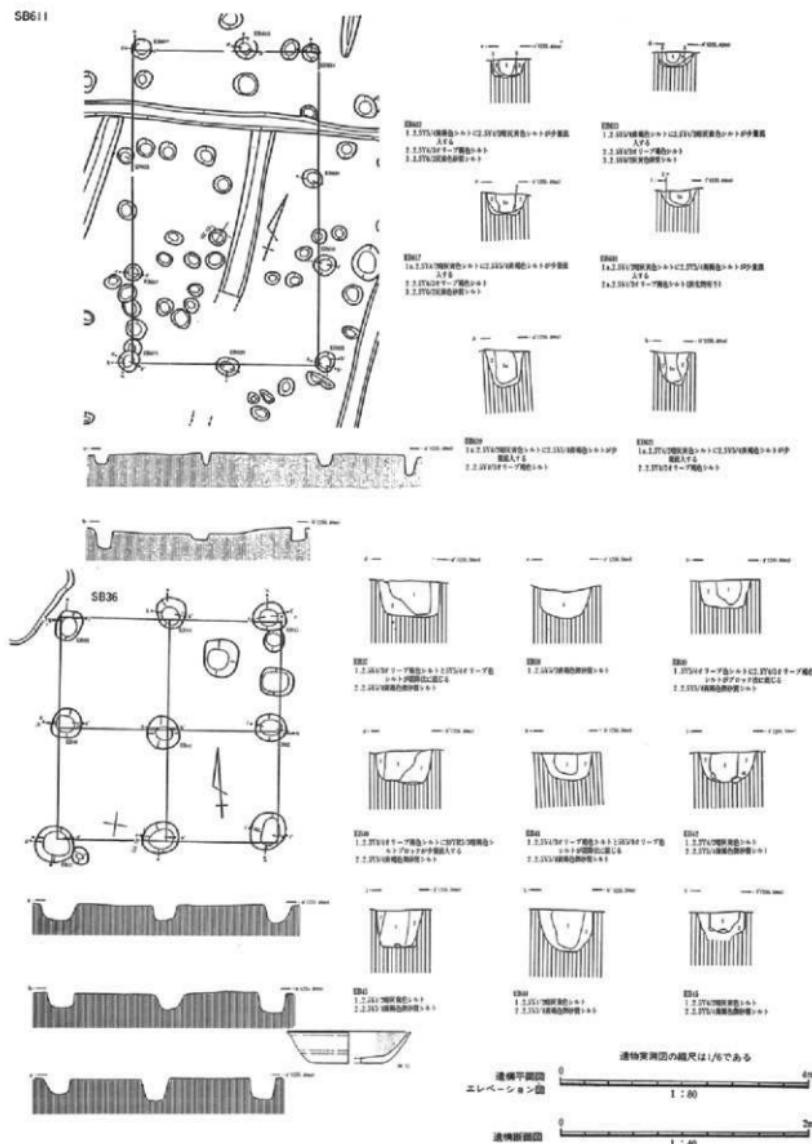
第17図 遺構実測図(13)



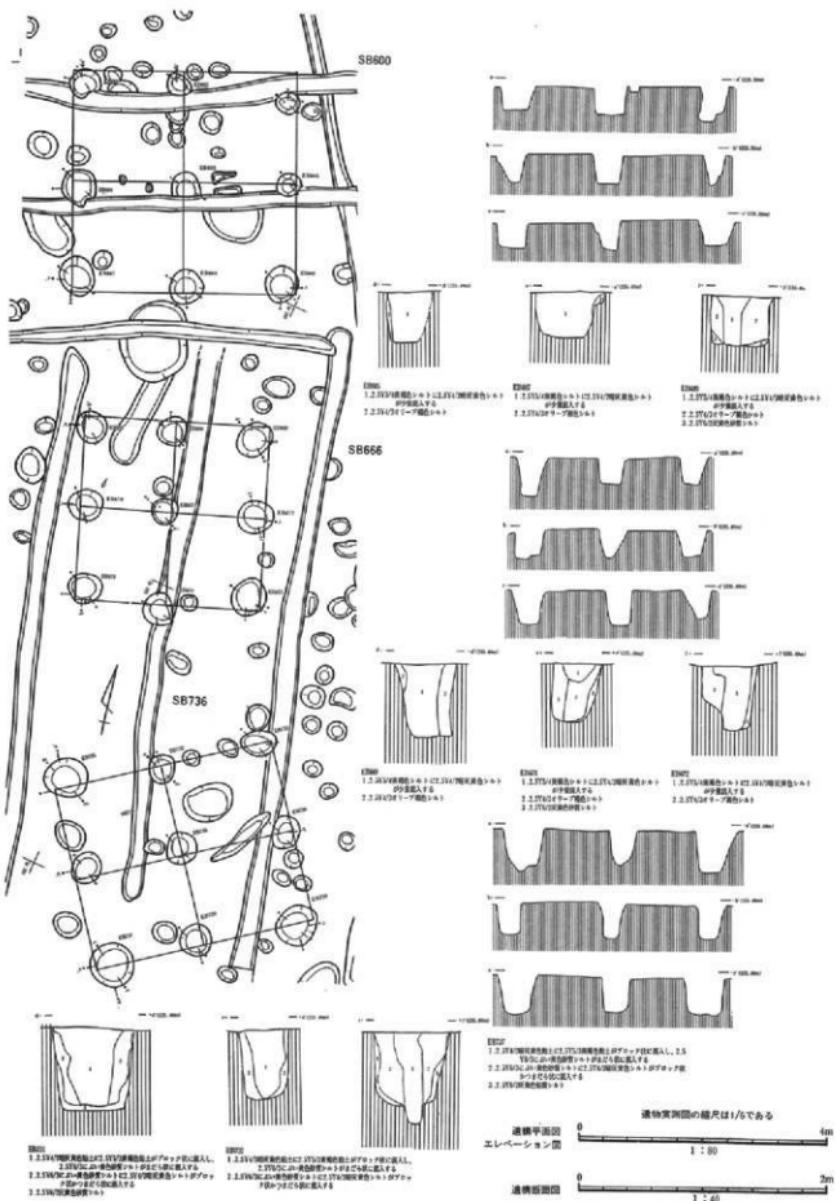
第18図 遺構実測図(14)



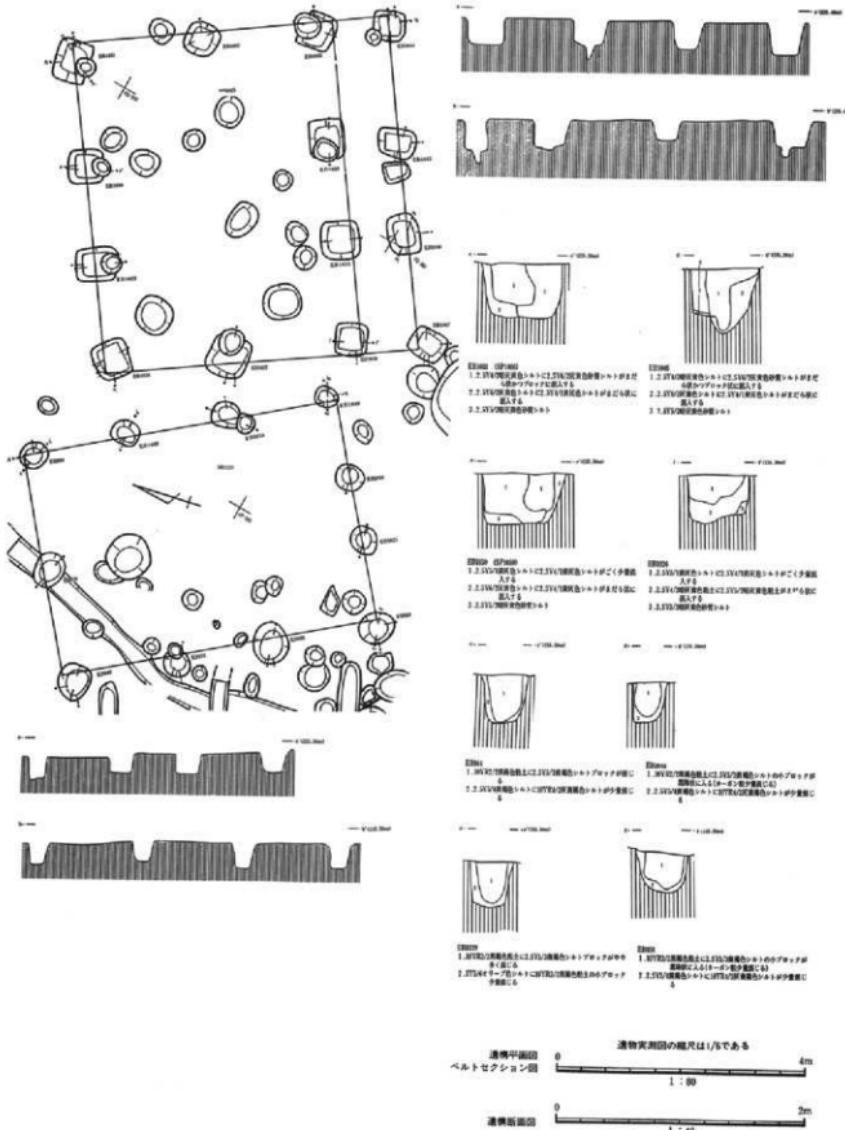
第19図 遺構実測図(15)



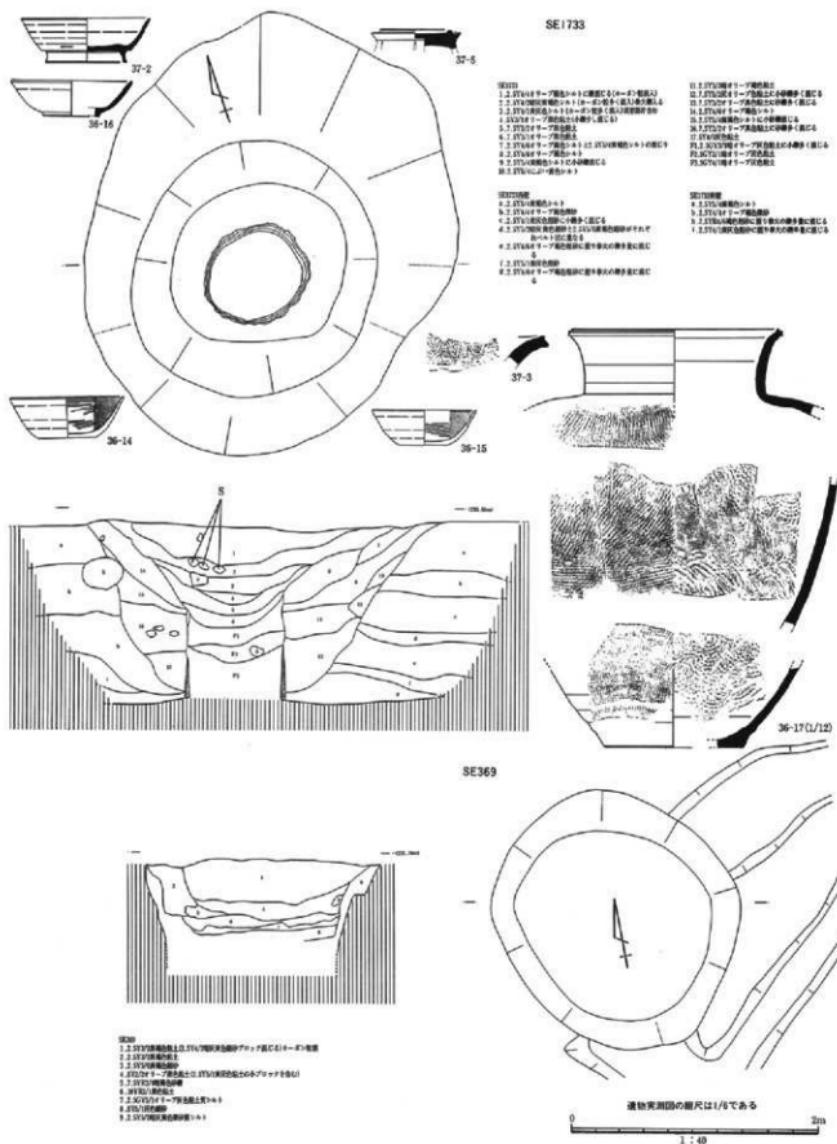
第20図 遺構実測図(16)



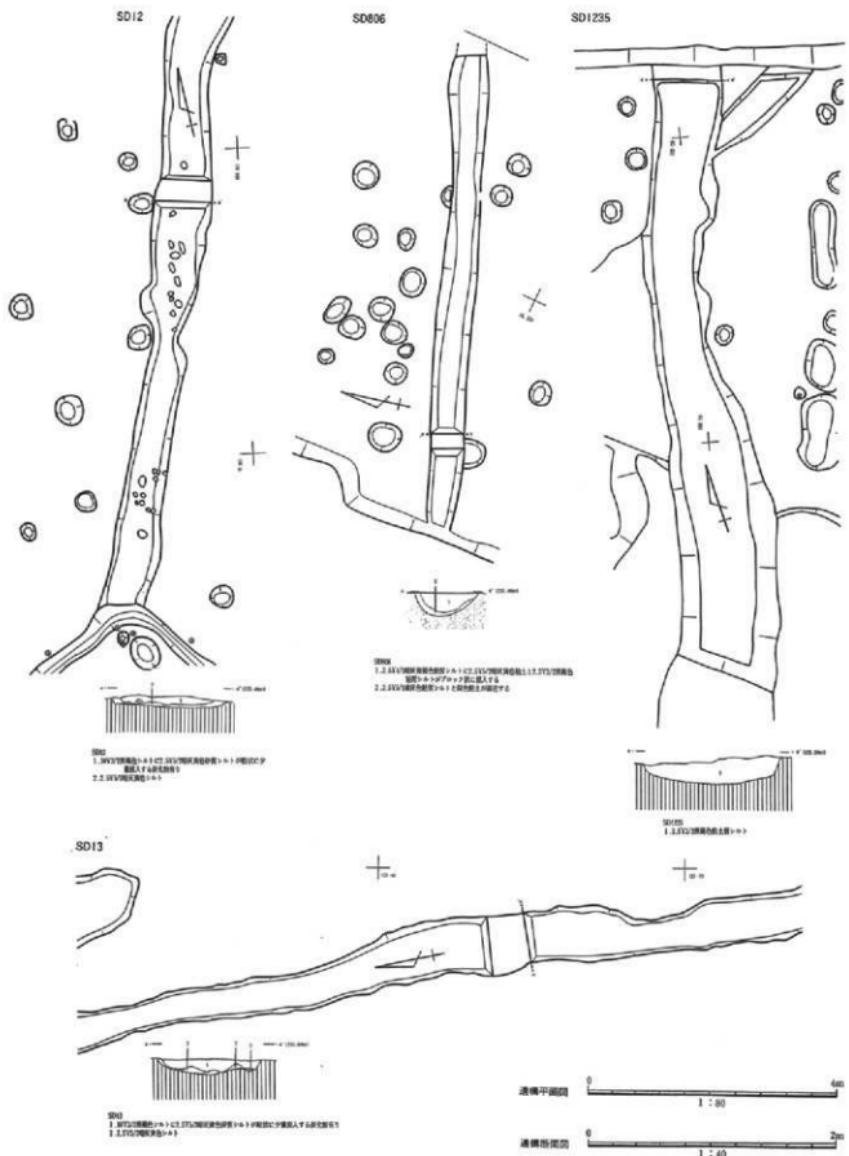
第21図 遺構実測図(17)



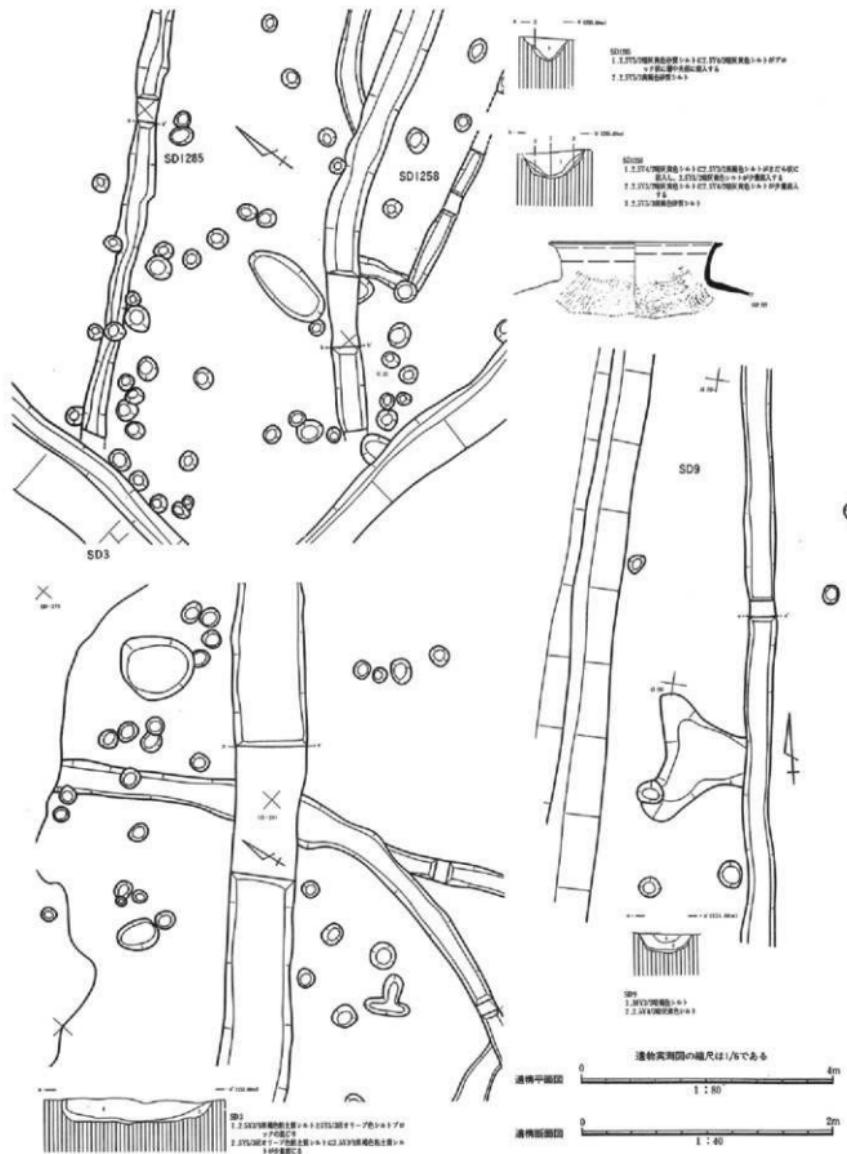
第22回 遺構寒測図(18)



第23図 遺構実測図(19)



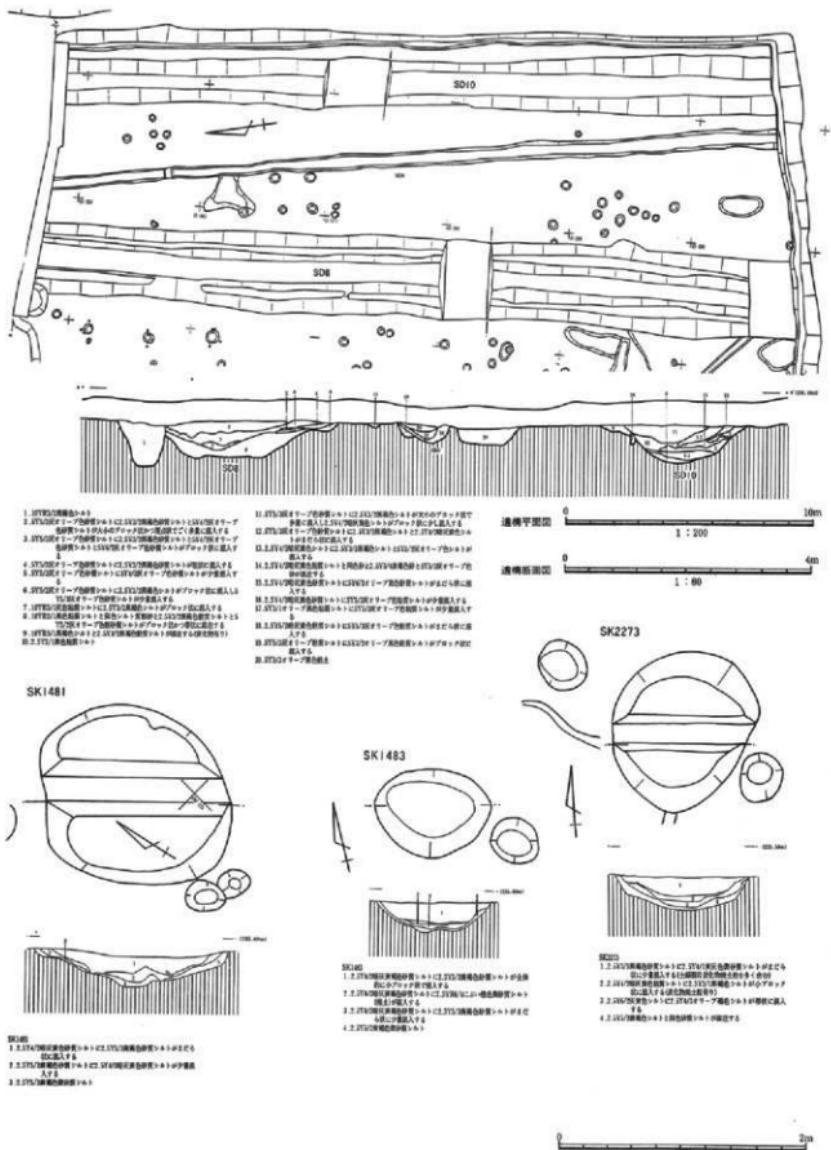
第24図 遺構実測図(20)



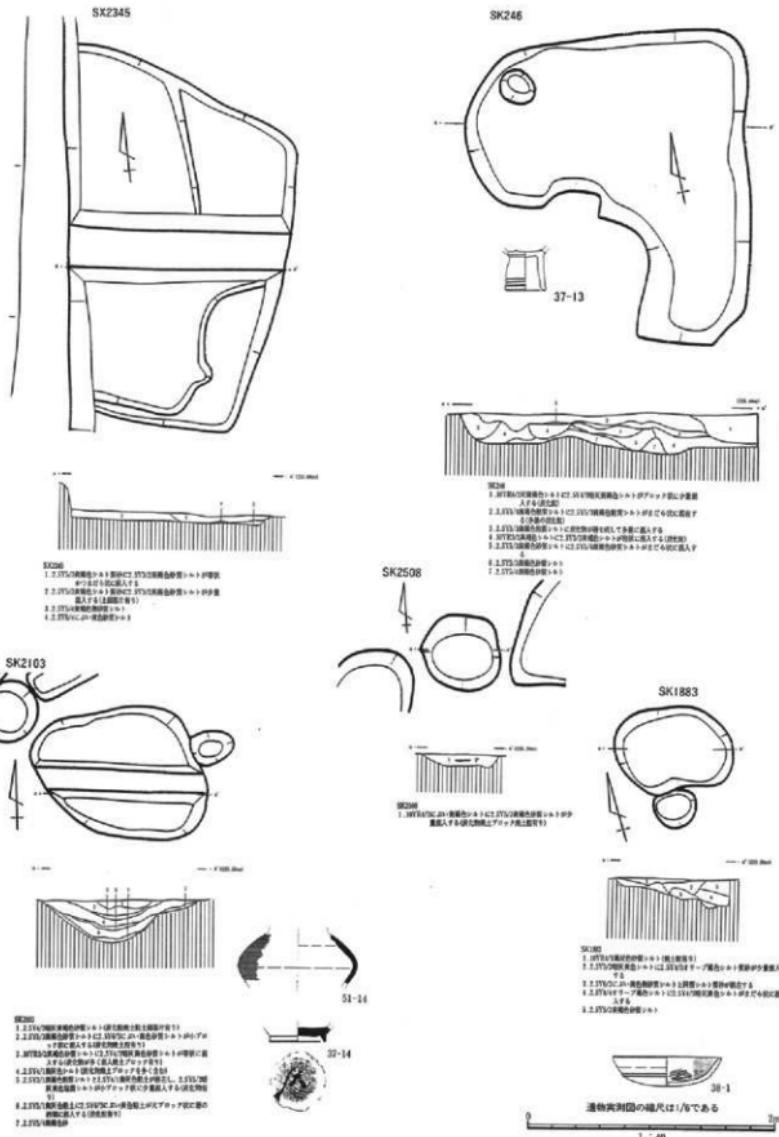
第25図 遺構実測図(21)



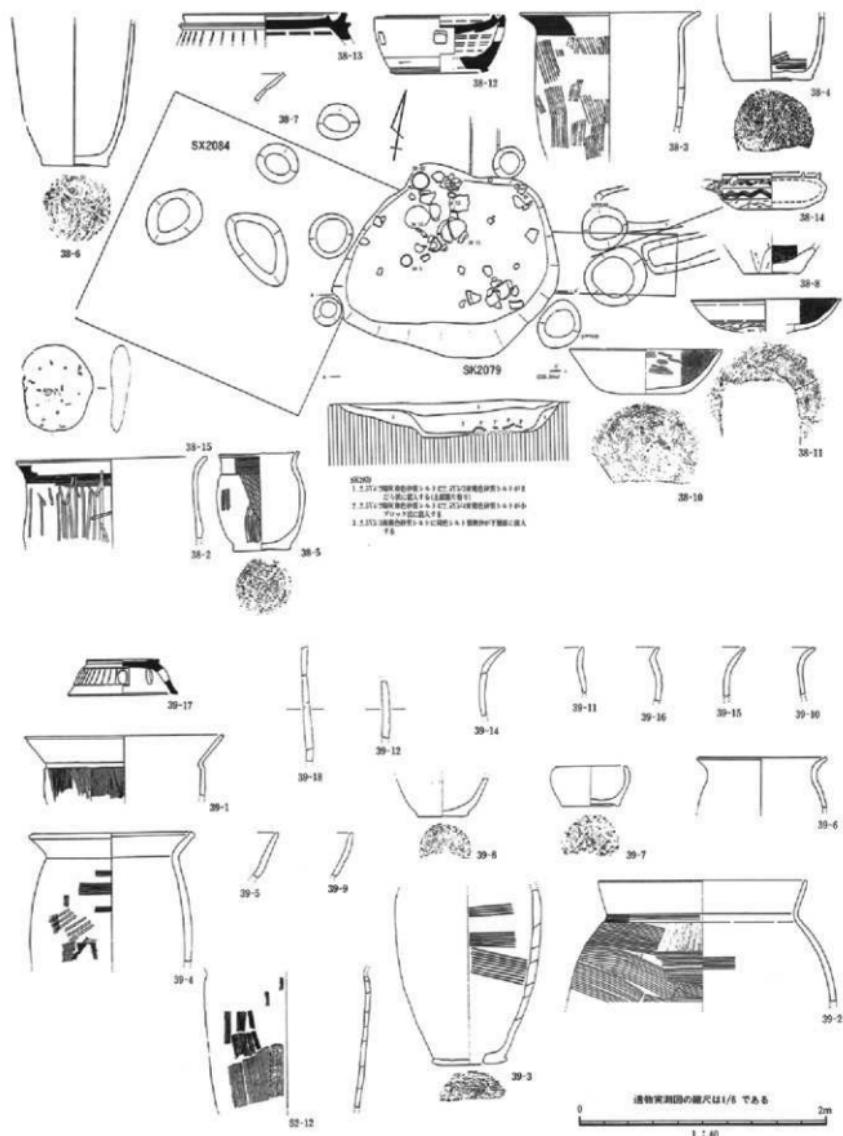
第26図 遺構実測図(22)



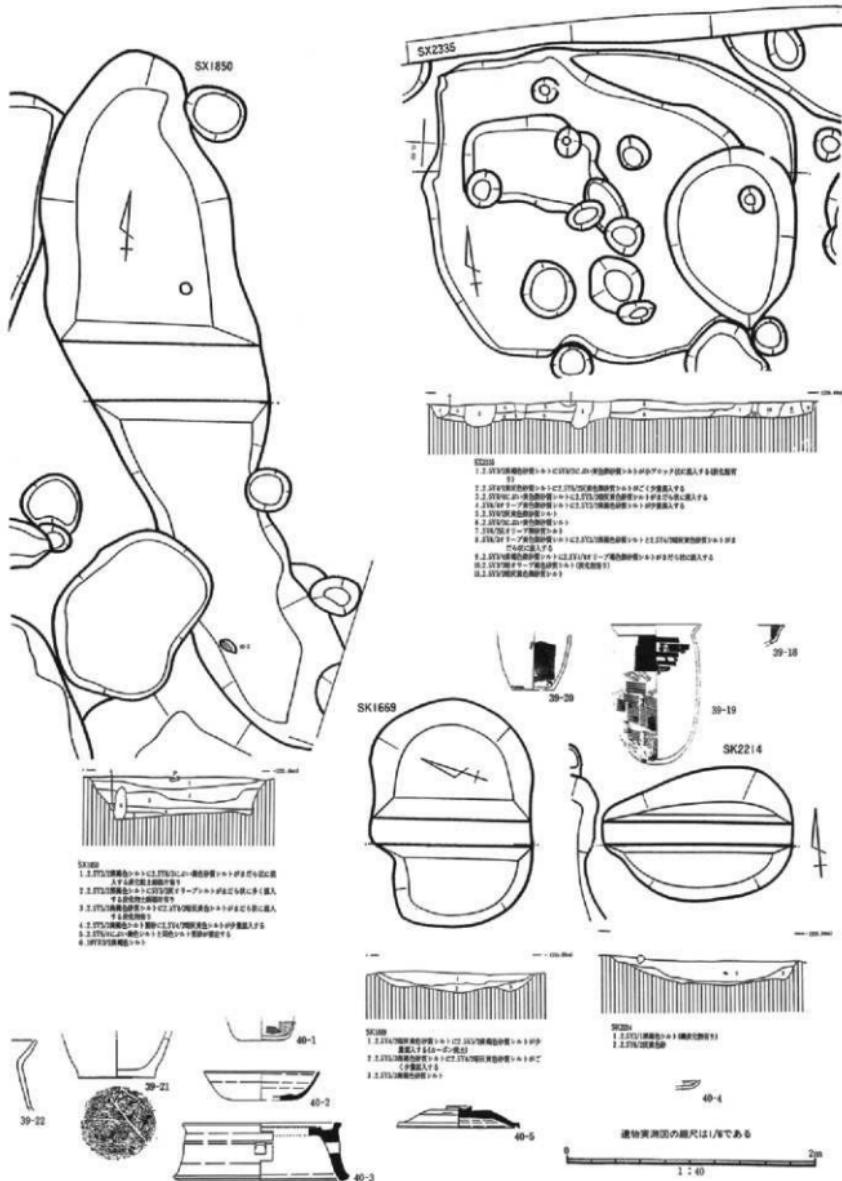
第27図 遺構実測図(23)



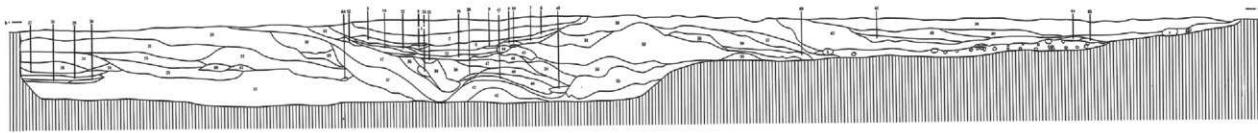
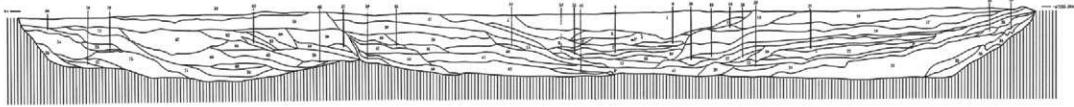
第28図 遺構実測図(24)



第29図 遺構実測図(25)

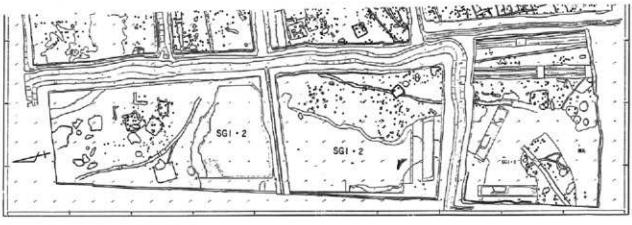


第30図 遺構実測図(26)



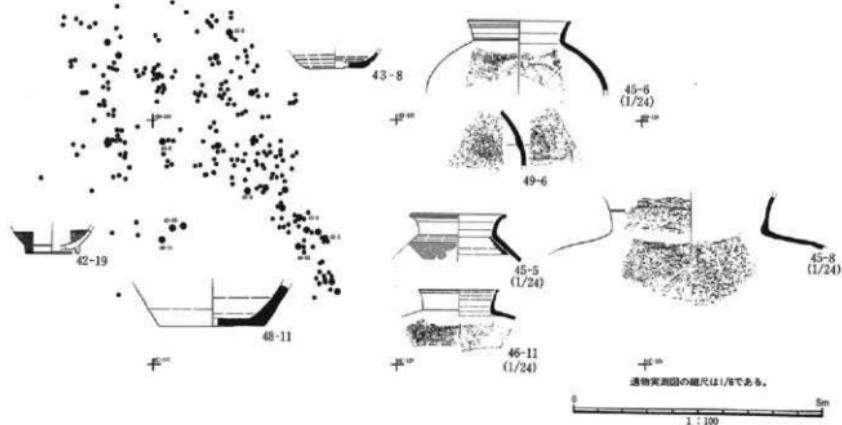
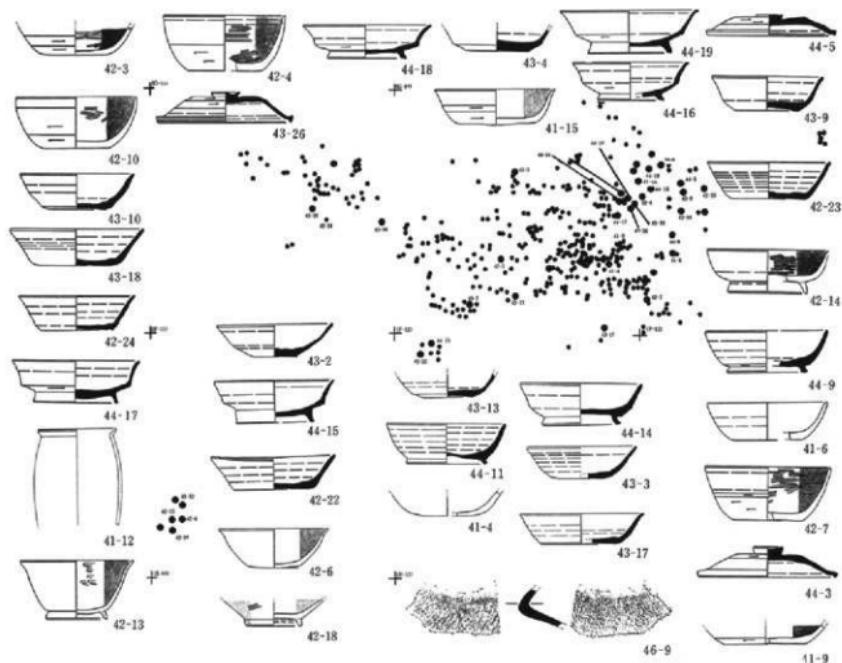
SGI-173

- 1. 10/19Z 2m層の暖帯はシーフード層である
- 2. 10/19Z 3m層は暖帯に特徴的
- 3. 10/19Z 3m層は暖帯に特徴的
- 4. 10/19Z 黒褐色層は暖帯に特徴的
- 5. 10/19Z 黒褐色層は暖帯に特徴的
- 6. 10/19Z 黒褐色層は暖帯に特徴的
- 7. 10/19Z 黒褐色層は暖帯に特徴的
- 8. 10/19Z 黒褐色層は暖帯に特徴的
- 9. 10/19Z 黒褐色層は暖帯に特徴的
- 10. 10/19Z 黒褐色層は暖帯に特徴的
- 11. 10/19Z 黒褐色層は暖帯に特徴的
- 12. 10/19Z 黒褐色層は暖帯に特徴的
- 13. 10/19Z 黒褐色層はシーフード層である
- 14. 10/19Z 黒褐色層は暖帯に特徴的
- 15. 10/19Z 黒褐色層は暖帯に特徴的
- 16. 10/19Z 黒褐色層は暖帯に特徴的
- 17. 10/19Z グリーン色層は暖帯
- 18. 10/19Z ブラック色層は暖帯
- 19. 10/19Z 黑褐色層は暖帯
- 20. 10/19Z 黑褐色層は暖帯
- 21. 10/19Z 黑褐色層は暖帯
- 22. 10/19Z 黑褐色層は暖帯
- 23. 10/19Z 黑褐色層は暖帯
- 24. 10/19Z 黑褐色層は暖帯



清音母的音程

Scale bar = 3 m



第32図 遺構実測図(28)

V 出土した遺物

出土した遺物はコンテナ53箱、点数にして23,000点余りを数える。その内389点を図示した。出土遺物は土師器・黒色土器・須恵器等土器類が最も多く、全体の99.9%を占め、貯蔵・煮沸形態の甕が63.3%で主体となる。以下、種別毎に概括する。

1 土師器・黒色土器

土師器は全出土量の65%を占め全域で出土するが、堅穴住居跡及びその周辺の遺構からの出土が多い。器種は壺・甕等である。主体をなす貯蔵・煮沸形態の甕は82.9%を占めている。内外面ハケメ調整が施され底部に木葉痕が残り、最大径を持つ口縁部にヨコナデがあるものが主となる。一部に体部をハケメ調整後ヘラケズリを施し、底部に網代痕を残すもの(33-10, 41-9)や体部のほぼ全面にヘラケズリを施し体部上部にカキメを4条巡らすもの(33-7)、体部中央に最大径を持つ球胴型で頸部に沈線状の段を有するもの(39-2)、体部外面にヘラミガキが施されるもの(35-2)等がある。

また口縁部が外反し頸部に明瞭な段を有する一群(34-15, 35-6・20・21, 38-3, 39-1・14, 51-12等)があり、口唇部が玉縁状を呈するものもある。さらにS T1592とS K2079から出土した口縁部が僅かに外反しヨコナデが施され、口唇部が玉縁状を呈する小甕(36-2, 38-5)がある。これらは栗田式の範疇に含まれると考えられ、7世紀後半から8世紀初頭としたい。

丸底叩き出し技法の長胴甕(39-19)がS X2335から出土している。隣接するS K2079から出土した長胴甕(39-4)も同じ技法である。北陸型長胴甕の古いタイプであり7世紀末から8世紀初頭と考えられる。

壺には、非ロクロ成形で底部が手持ちヘラケズリ調整され内面にヘラミガキが施され体部上半にナデがあり内外面赤彩されるもの(34-8)や体部中央に段を有するもの(39-9)と小振りで底部及び体部下半がヘラケズリされるもの(33-3~5, 41-4, 49-9)がある。34-8と39-9は関東系の可能性がある。他は鶴岡市西谷地遺跡第3次調査で出土した8世紀中葉の酸化焰土器(仮称)に類似するものである。

黒色土器は全出土量の13%を占める。河川跡からの出土が多く、次いで堅穴住居跡から出土する。主体となるのは壺などの供膳形態で89%を占める。

主体をなす黒色土器A類(内面黒色処理)の壺は無高台と高台付に分かれ、内面はヘラミガキが施される。無高台には①非ロクロ成形で丸底になるもの、②非ロクロ成形で丸底で体部中央に段を有するもの、③口径に比して底径が大きく体部が直線的に立ち上がり底部及び体部下半が回転ヘラケズリされるもの、④⑤に似るが体部の立ち上がりが緩やかなもの、⑤⑥に似るが底部回転糸切のもの、⑥口径に比して底径が小さく器高がやや高く底部回転糸切のもの、⑦⑧に似るが底部回転ヘラ切りのもの、⑨輪積で口径に比して底径が小さいものに分類することが出来る。高台付には、①口径に比して底径が大きく体部が緩やかに立ち上がるもの、②③に似るが体部が直線的に立ち上がるものがある。無高台の②は栗田式の範疇に収まると考えられ7世紀後半から8世紀初頭とすることが出来る。

塊は無高台と高台付に分かれ、内面はヘラミガキされる。無高台には①輪積で底部がやや小さく手持ちヘラケズリされるもの、②口径に比して底径が大きく体部が直線的に立ち上がり、体部及び底部が回転ヘラケズリされるもの、③②に似るが回転糸切で底部外縁部から体部上半部にかけて回転ヘラケズリを施し、体部が内弯して立ち上がるものの、④③に似るが底部全面回転ヘラケズリされるものがある。高台付には①口径に比して底径が小さく口縁部がやや外反するものがある。無高台の②③④は福島県本宮町山王川原遺跡や郡山市広網遺跡出土品に類似し、8世紀前半と考えられる。他に鉢や壺、双耳坏摘みなどがある。

黒色土器B類(両面黑色処理)の坏は無高台と高台付に分かれ、内外面ともヘラミガキが施される。無高台には①丸底で体部が緩やかに内弯し口縁端部が直立するもの、②丸底で体部が緩やかに内弯し口縁端部は直立しないもの、③丸底で体部中央に段を有し底部に手持ちヘラケズリが施されるもの、④平底で口径に比して底径がやや大きく体部が緩やかに立ち上がり口縁端部が直立しナデが施されるものがある。高台付には①口径に比して底径が小さく体部が直線的に立ち上がり、口縁部がやや外反し貼付高台のもの、②①に似るが摘み出し高台のもの、③稜塊がある。体部中央に稜を有するもので須恵器稜塊写である。米沢市笹原遺跡や福島県小野町塙内遺跡、郡山市広網遺跡に類似がある。黒色土器A類の稜塊は県内では鶴岡市西谷地遺跡第3次調査でまとまって出土するが関連性が注目される。

さらに鉢が1点(35-9)ある。口径に比して底径が大きく体部が緩やかに内弯しながら立ち上がり口縁端部が内傾し、体部外面はヘラミガキの後回転ヘラケズリが施される。福島県郡山市柿内戸遺跡39号住居跡出土品に類似する。8世紀初頭と考えられる。

また、黒色土器A類の双耳坏体部破片や摘み、壺も少量出土している。B類で体部上半部に変換部のある壺の破片もある。

2 須恵器

全出土量の21.7%を占め全域から出土しているが、57.6%が河川跡からの出土である。坏では底部回転ヘラ切りが73.1%を占める。器種は坏・高台付坏・稜塊・壺・蓋・壺などがある。

主体をなす底部回転ヘラ切りの坏には、①口径に比して底径が大きく体部が緩やかに立ち上がり、丸底風になるもの、②口径に比して底径が大きく底部全面や体部下端等がヘラケズリを施されるもの、③底部に回転ヘラケズリが施され体部下半に稜を持つもの、④口径に比して底部がやや小さく外傾度が大きいもの、⑤小振りで体部下半と底部に回転ヘラケズリが施され、器高が高いもの、⑥底部と体部の境界部が明瞭で体部が直線的に立ち上がるもの等に類別でき、口縁部の外反度・法量・器高等で細分が可能である。回転糸切の坏には、①口径に比して底部がやや大きいもの、②体部と底部の境界が明瞭で体部が直線的に立ち上がり外傾度が大きいもの、③口径に比して底部が小さく体部がやや内弯しながら立ち上がるものの、④体部に輪積痕を残し丸底風になるもの等に類別され、口縁部の外反度・法量・器高等で細分が可能である。

高台付坏には、①大振りで口径と底径の差が少ないもの、②口径に比して底径がやや小さく体部が内弯しながら立ち上がり体部下半に回転ヘラケズリが施されるもの、③②に似るが底部が丸底のもの、④②に似るが体部が直線的に立ち上がるもの、⑤小振りで器高が高く底部が回

転糸切のもの等に類別される。高台形状・高台位置等で細分できる。

稜塊は河川跡を中心にまとめて出土している。仏具の佐波理鏡を須恵器で写したものである。①体部下半に回転ヘラケズリを施すことにより明瞭な稜を形成し体部上半は外反しつつ立ち上がり、底部は丸底を呈し深身で金銅製佐波理鏡に似るもの、②①に似るがやや浅くなるもの、③②に似るが底部に回転ヘラケズリを施し平底とするもの、④③に似るが体部上半が直線的に立ち上がるものの、⑤体部下半にナデにより緩やかな稜を形成し平底で回転糸切痕を明瞭に残すものに類別される。口縁端部の形状・高台形状・高台位置等により細分される。①の佐波理鏡に似る深身のものが最も古く、次いで丸底形態から平底形態へ移行し、稜が退化し回転糸切痕を残すものが新しいと考えられる。8世紀中葉を中心とする。

須恵器稜塊は福島県大戸窯跡、新潟県山三賀II遺跡、県内では米沢市大神窯跡・荒川2遺跡、川西町壇山窯跡、高畠町合津窯跡・大在家遺跡、河北町不動木遺跡、寒河江市三条遺跡、鶴岡市西谷地遺跡等で出土する。今後、生産遺跡と消費遺跡との関連性を明らかにしなければならない。

蓋は、大振りなものと小振りなものに大別され、それぞれ①ドーム状を呈するもの、②天井部に回転ヘラケズリを施し、口縁部との間に明瞭な変換部を形成するもの、③変換部が明瞭でなくなりて肩なもの、④比較的直線的に口縁部まで伸びるもの、⑤肩平なもの等に類型化される。また、摘み部の形状には宝珠型・擬宝珠型・鉋型・円筒型等が見られ、組み合せにより多様性を持っている。さらに、口径210mmを測る短頸壺の蓋や小振りの短頸壺の蓋が出土している。

甕は須恵器全体の36.7%を占め、60%は河川跡からの出土である。破片での出土のため全形を知りうるものは極めて少ない。大型品が多く見られることが特徴である。底部形状は平底が主体となるが、丸底も見られる。口縁部には櫛描波状文が巡るものが多い傾向が窺われる。一部に漆が付着するものが見られた。

壺は長頸壺と短頸壺に大別され、それぞれ大型品と小型品がある。破片のため全形を知りうるものはないが、短頸壺が多い傾向が窺われる。体部調整はタタキの後ヘラケズリを施すもの、タタキの後平行カキメを施すもの、タタキ無調整などがみられる。底部は無高台と高台付があり、高台付には回転糸切痕を残す小壺がある。

また、双耳杯の体部破片や摘み、1点のみの出土であるが鉄鉢形土器と考えられるものの口縁部が出土している。横瓶体部閉塞部の破片もある。

3 円面甕

須恵器円面甕が10個体出土した。単一の遺跡からの出土としては県内で最多であり、県内出土数の20%を占める。中に中空円面甕が2点含まれる。円面甕は、東北地方では多賀城跡、秋田城跡、仙台市郡山遺跡など奈良時代の中心的な官衙遺跡から多く出土しており、一般集落からは余り出土数は多くない。

以下、個別に概括する。

①37-5はS E1733から出土した圓脚円面甕である。口径108mmを測る。内堤と外堤を有するタイプで内堤が高く外堤はやや外反し海部は浅く狭い。甕面形態は凸型で長期間使用された為か使

用痕が顕著である。圈脚部は破損しており全形は知り得ないが、やや開く形態をしていると推測される。範描きの縦位沈線が巡る。②38-12は坏皿型の中空円面硯である。硯面がS K2079から、体部がS D1505、S E1733、S G1・2から出土している。口径155mm、底径105mm、器高69mmを測る。内堤と外堤を有するタイプで内堤がやや高く海部は狭い。硯面形態は凹型で長期間使用された為か使用痕は顕著である。高台付坏の口縁部に硯面を貼ることにより遮断し、内部を中空にする形態をしている。圈脚部には不整方形の透かし孔が4単位穿たれ、体部下半は回転ヘラケズリされている。坏皿型硯の一類型で、東北では初出となる。栗囲式の小壺などと共にすることから7世紀後半から8世紀初頭と考えられる。③38-13はS K2079から出土した圈脚円面硯である。口径200mmを測る。内堤と外堤を有するタイプで内堤が低く海部は広くやや深い。突帯が巡っている。硯面形態は凸型で長期間使用された為か使用痕は顕著で、中央部がやや窪んでいる。圈脚部は破損しており全形は知り得ないが開く形態と考えられ、範描きの縦位沈線が巡る。造りの丁寧な大型品で県内最大級である。大阪府陶邑KM51や平城京、仙台市郡山遺跡などに類例があり、共伴遺物などから7世紀後半から8世紀初頭と考えられる。④38-14はS K2079拡張トレンチから出土した手付有孔中空円面硯である。口径118mm、底径86mm、器高44mmを測る。内堤と外堤を有するタイプで内堤がやや高く海部は広い。硯面形態は平面型で使用痕はほとんどない。底を扁平にしてその口縁部を硯面で遮蔽し、内部を中空にする形態をしている。体部肩部及び中央部に柳描波状文が巡る。体部肩部に直径15mmの円孔が1つ穿たれている。体部中央に摘みが1つ付属し提げひも用と思われる直徑5mmの小孔が穿たれている。底部は手持ちヘラケズリ調整が施され、焼成も堅敏で丁寧な造りである。坏皿型硯の一類型とも考えることもできるが、独自の形態と考えたい。日本初出である。7世紀中葉あるいは前半の可能性もあり、朝鮮半島製も考えられる。⑤39-17はS X2084及びS K2273から出土した圈脚円面硯である。口径85mm、底径133mm、器高42mmを測る。外堤のみを有するタイプである。硯面形態は平面型である。圈脚部には縦横円形の透かし孔が5単位穿たれ、範描きで圈脚部上下に巡る横位沈線とそれに挟まれた縦位沈線が巡る。焼成は不良である。秋田城跡に類例がある。8世紀後半と考えられる。⑥40-3はS X1850から出土した圈脚円面硯である。口径195mm、底径215mm、器高70mmを測る。内堤と外堤を有するタイプで内堤は低く海部は広くやや深い。硯面形態は凸型で使用痕は不明である。圈脚部には方形の透かし孔が4単位穿たれる。大型で焼成も堅敏で造りの丁寧な優品である。大阪府陶邑TG64出土のものに類似し、7世紀前半の可能性もある。

⑦40-9はS G1・2から出土した圈脚円面硯である。圈脚部破片のみの出土であり、硯面形態は不明である。底径212mmを測る。透かし孔の有無、沈線の有無等は不明である。⑧43-23はS G1・2で出土した圈脚円面硯である。圈脚部の小破片のため硯面形態、透かし孔の有無などは不明である。圈脚部に範描きで縦位沈線がある。⑨51-8はS X1973から出土した圈脚円面硯である。口径194mmを測る。外堤のみを有するタイプで、硯面から一段低くなつてやや浅い海部がある。圈脚部は破損しており全形は知り得ないがやや開く形態をしていると推測される。硯面形態は凸型で使用痕は不明である。圈脚部には円孔が数単位穿たれると推測され、範描きで縦位沈線が巡る。⑩52-2はP-14グリッドで出土した圈脚円面硯である。圈脚部破片のみの出土で硯面形態

は不明である。底径166mmを測る。圓脚部に縦長方形の透かし孔が穿たれた痕跡がある。範描きで圓脚部下部に巡る2条の横位沈線と縱位沈線が巡る。秋田城跡出土のものに類似する。

円面鏡は、当該時期の一般集落内においてはさほど必要性を持たない物である。したがって円面鏡が複数個体出土するということは、西町田下遺跡が官衙あるいは官衙に密接な関連性を持っていることを示している。また、多様なタイプの円面鏡が出土していることから、それら円面鏡を使用していた官人の出自の解明に役立つ可能性がある。円面鏡は通常オーダーメードによる少量多品種が生産されていたと考えられ、同一器種は極めてまれである。さらに地域的な特徴も見られる場合があり、円面鏡の流通並びに官人層の異動などについて示唆を与えてくれる可能性を持っているのである。

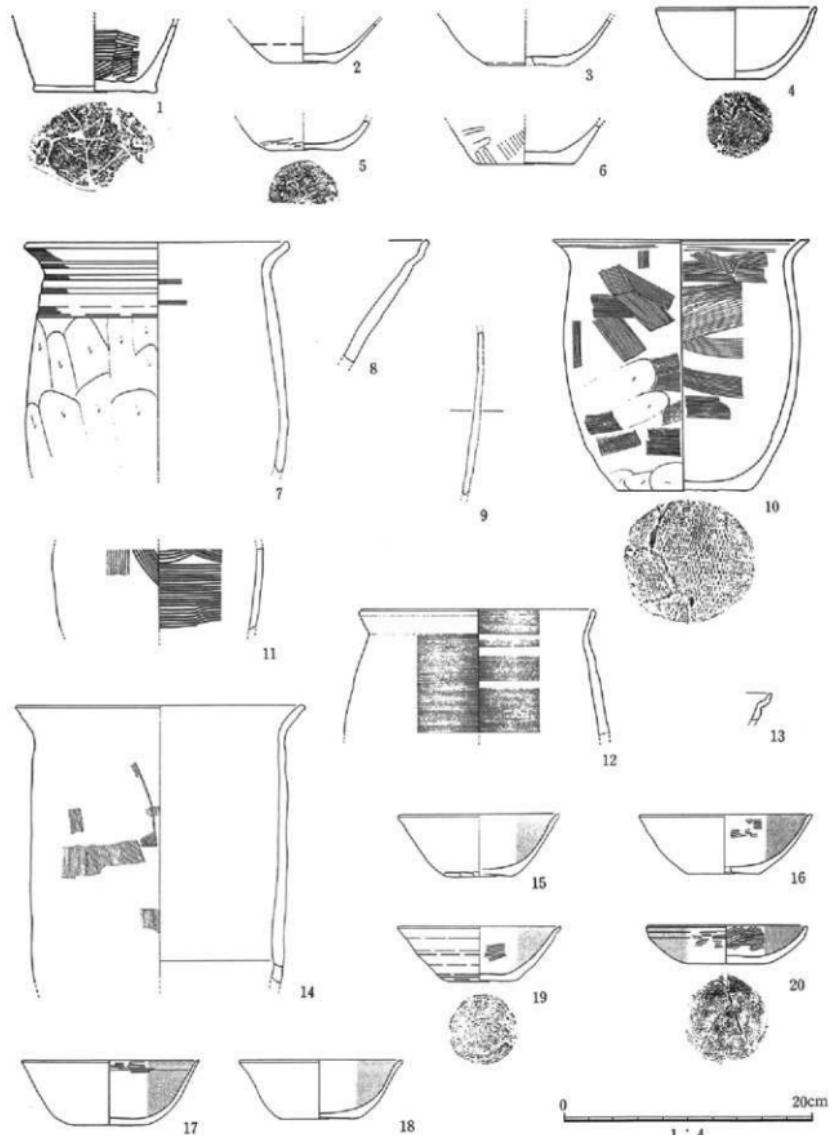
4 その他の遺物

明確に中世に属すると思われる遺物はかわらけがある。2点図示した。いずれも底部回転糸切りである。

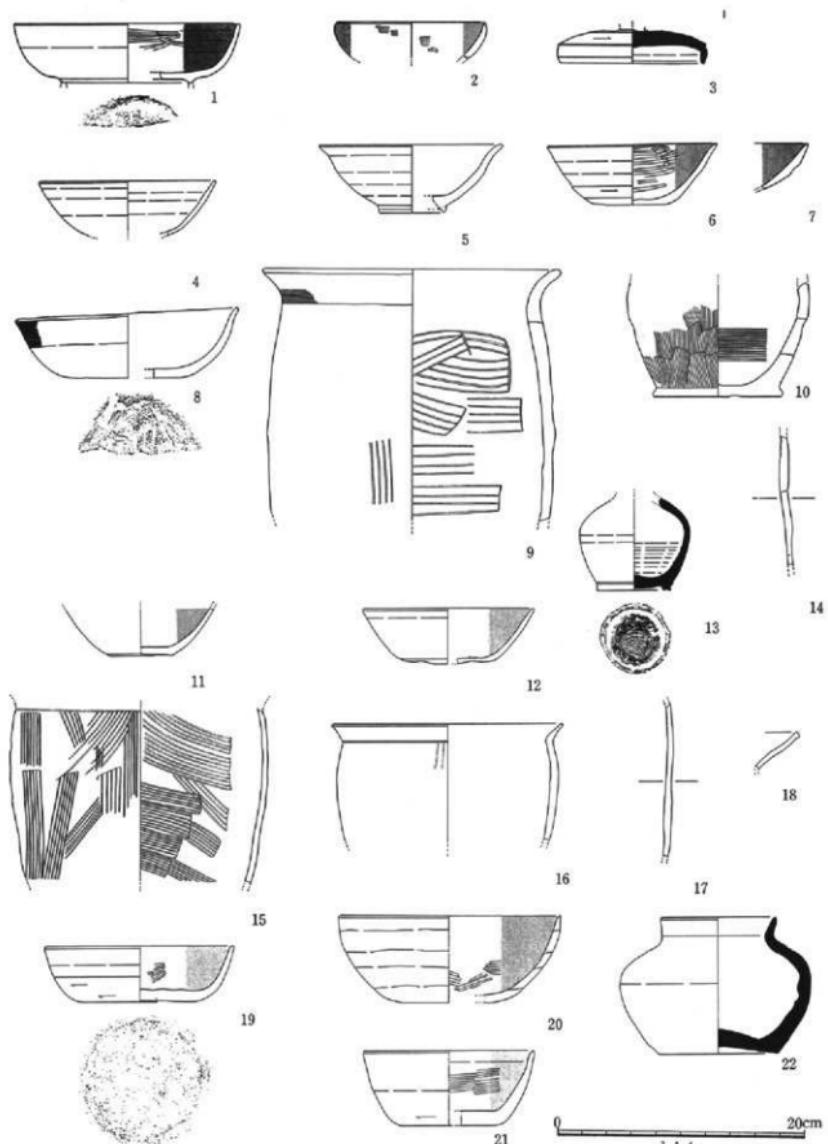
赤焼土器は出土量が極めて少なく16点図示したのみである。ほとんどがS G1・2河川跡から出土している。河川跡から出土した赤焼土器の胎土は概ねにぶい乳白色を呈している。何らかの祭祀に使用された可能性がある。

土製品では、製塙土器が2点あり特筆される。いずれもS G1・2河川跡からの出土である。厚手で外面に粘土ひも積み上げ痕跡が明瞭に残り、口径に比して底径が小さく外傾度が大きい。底径を知りうるものは120mmを測る小型の平底製塙土器である。北陸に類例を求めることが出来、丸底叩き出し技法による長甕の出土と合わせ、興味深い。

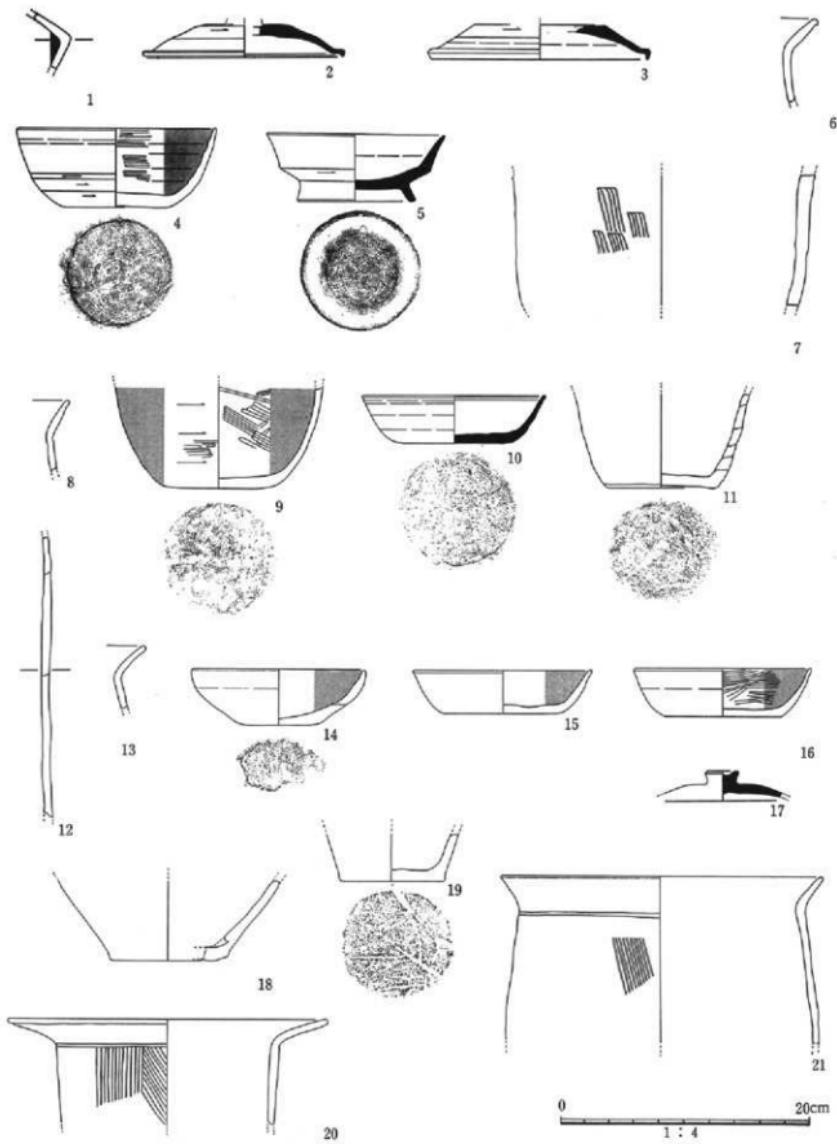
木製品には、漆器椀2点、下駄1点、井戸眼1点などがある。漆器椀と下駄はS G 2下層から出土している。漆器椀2点はいずれも黒漆が塗布され高台が付く。体部は底部から内湾しながら立ち上がる。1点は低い削り出し高台を持ち、他は剥離している。井戸眼はS E1733から出土した。長径900mm、短径780mmを測り、高さ450mm程残存していた。クリ材と考えられる丸太を削り貫いているが、あらかじめ縦に二分割して内部を削り貫き接合した可能性もある。削り物の井戸眼としては県内最大級である。



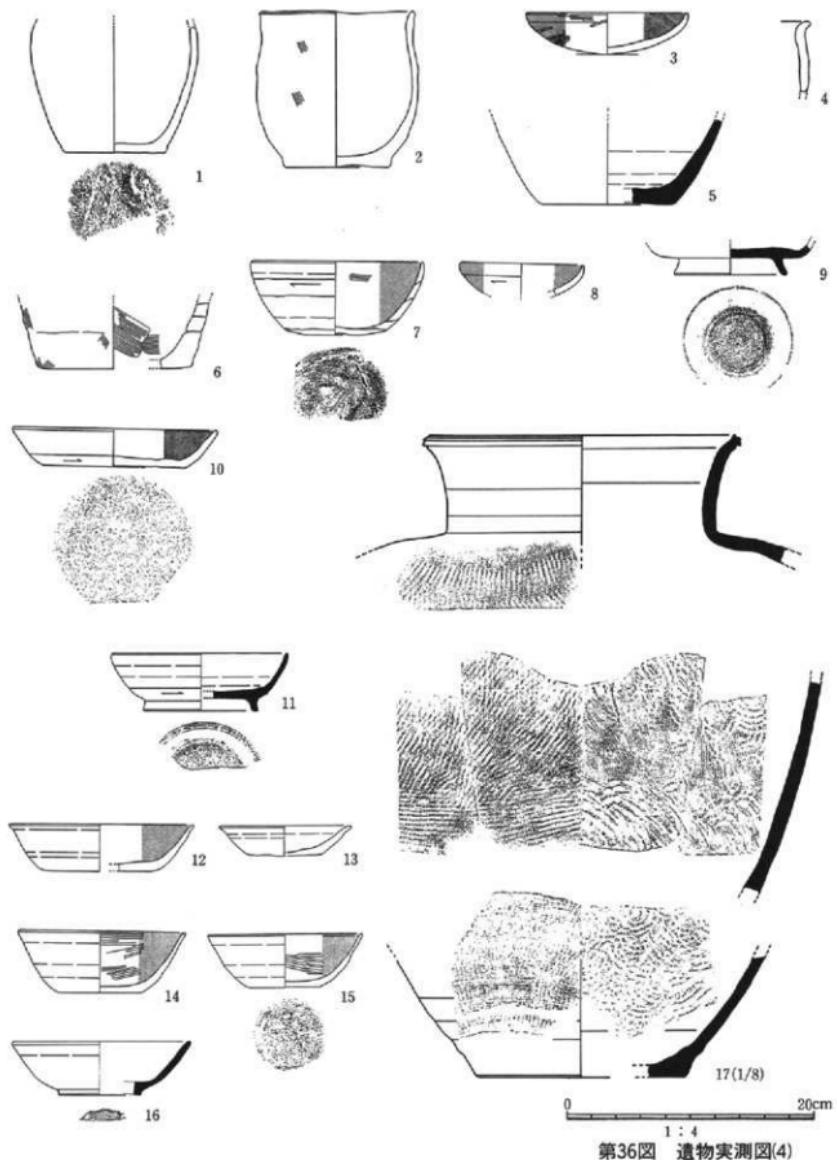
第33図 遺物実測図(1)



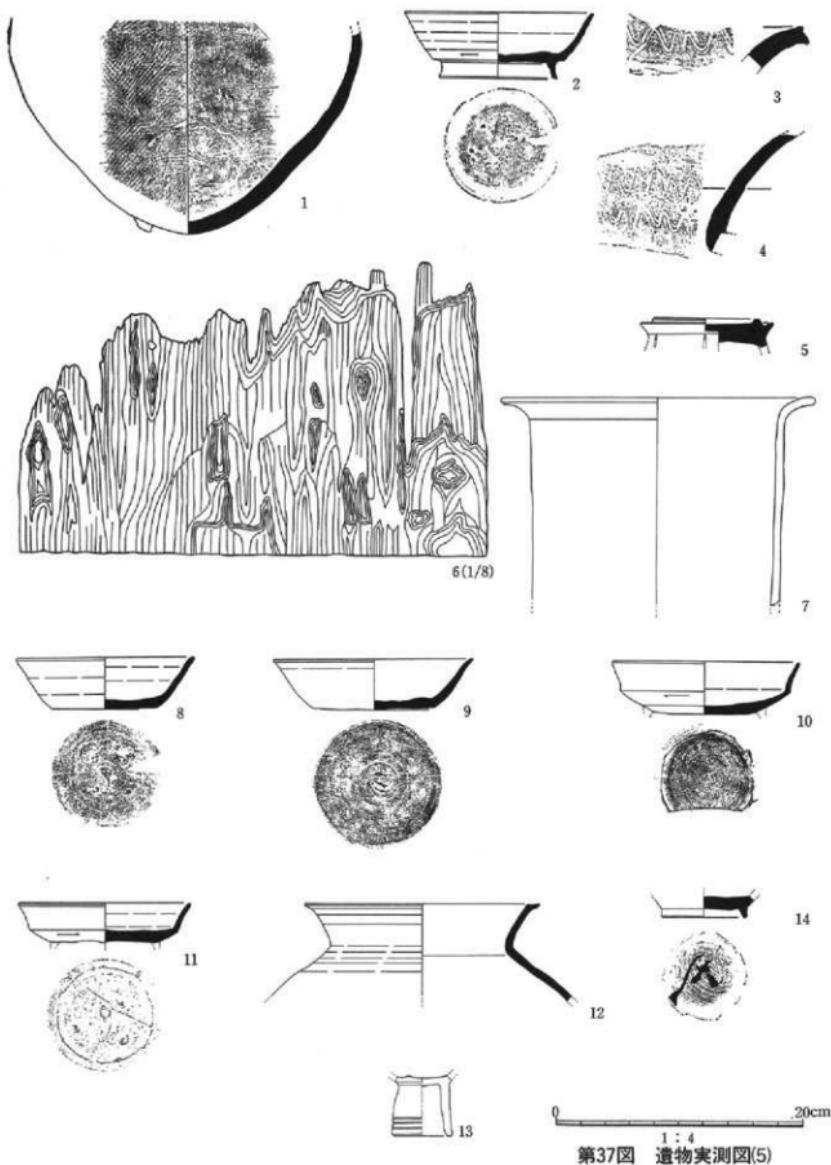
第34図 遺物実測図(2)



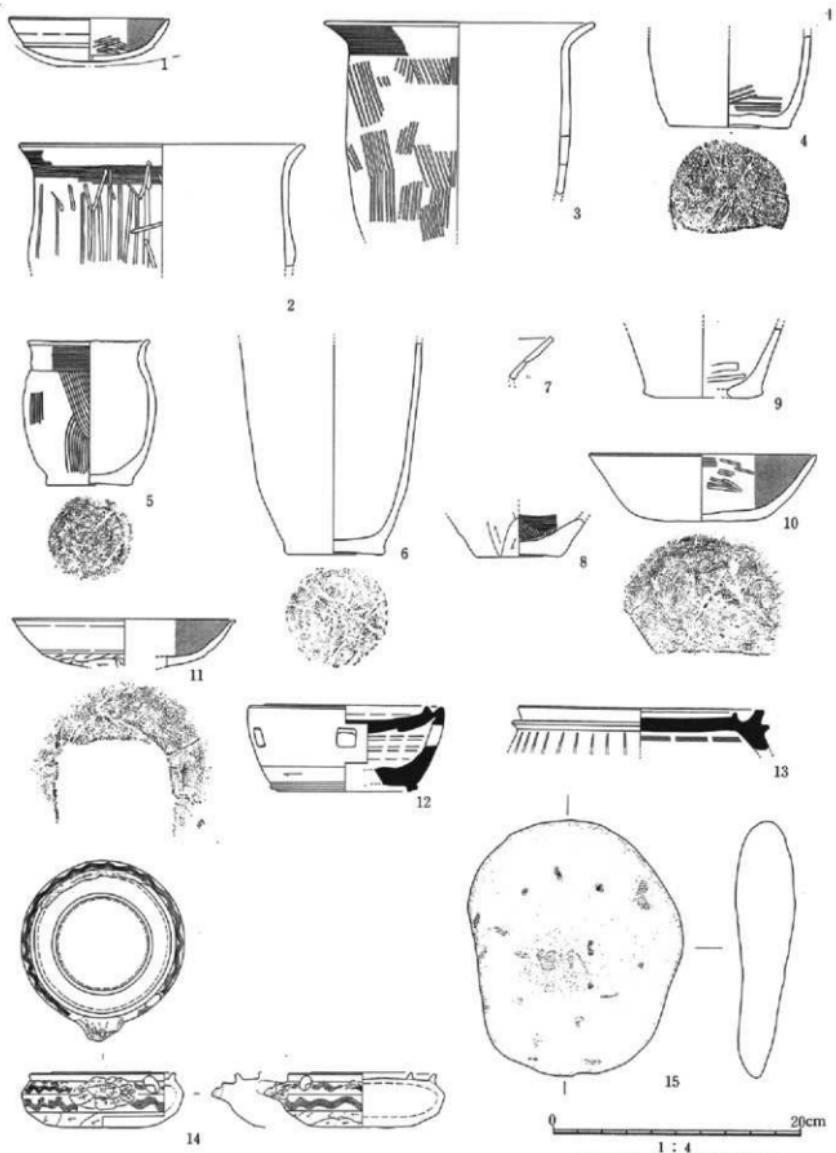
第35図 遺物実測図(3)



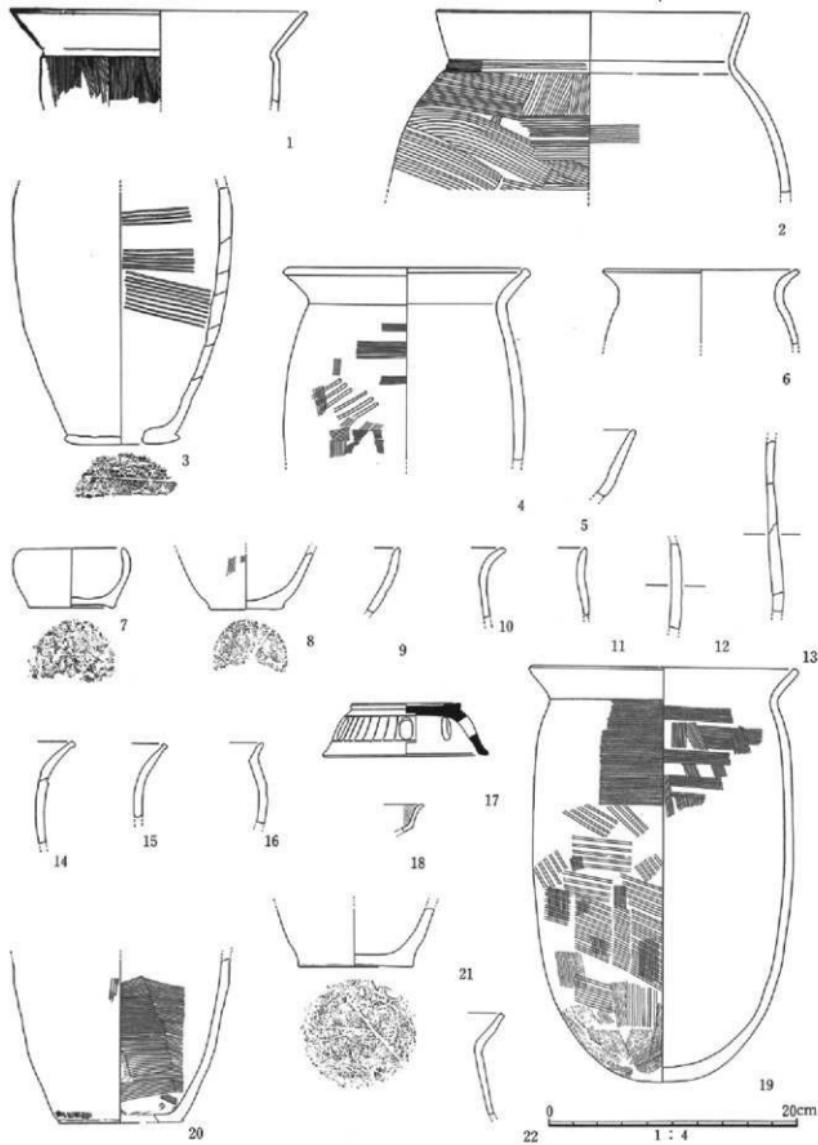
第36図 遺物実測図(4)



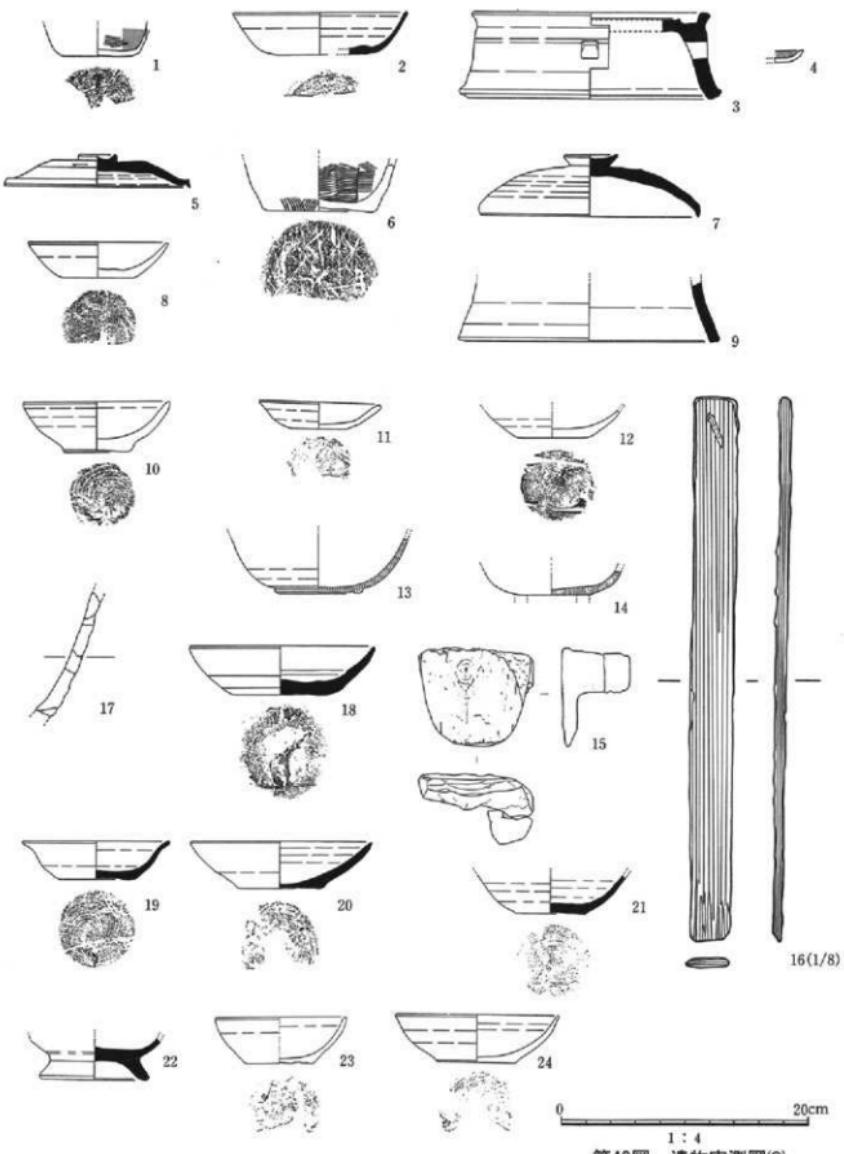
第37図 遺物実測図(5)



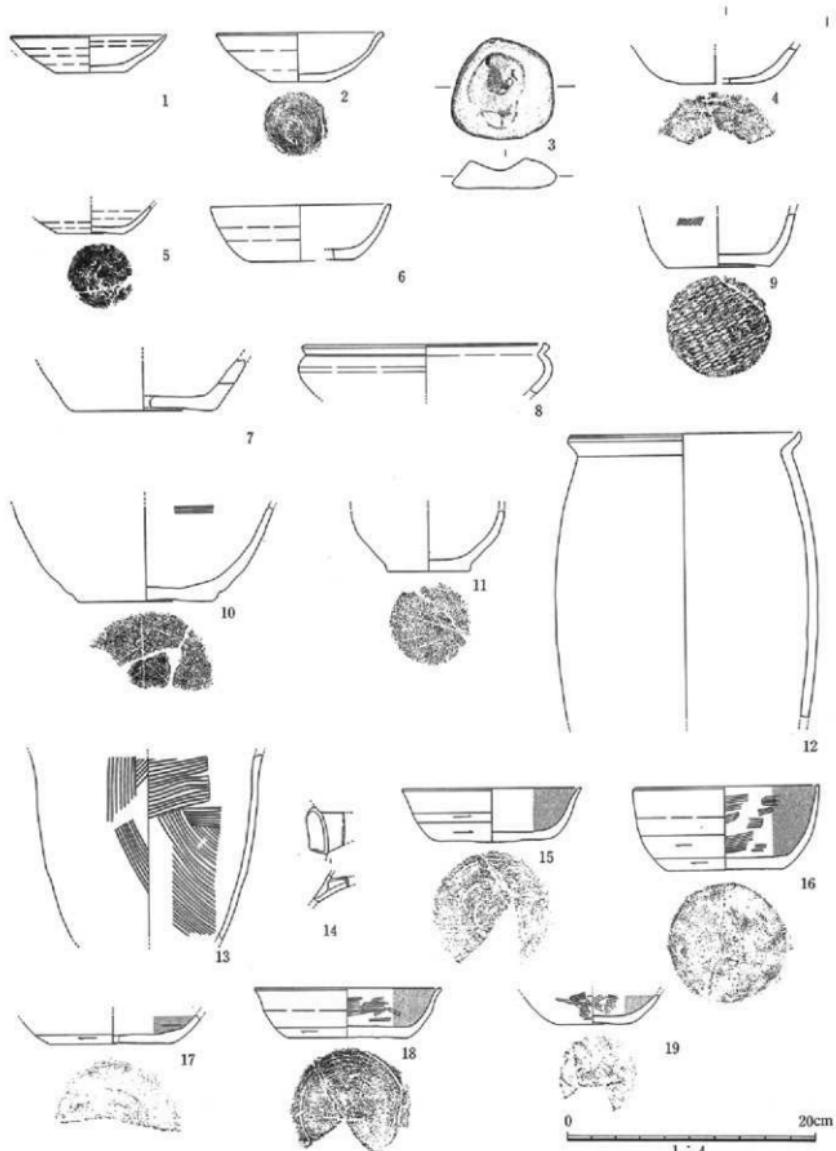
第38図 遺物実測図(6)



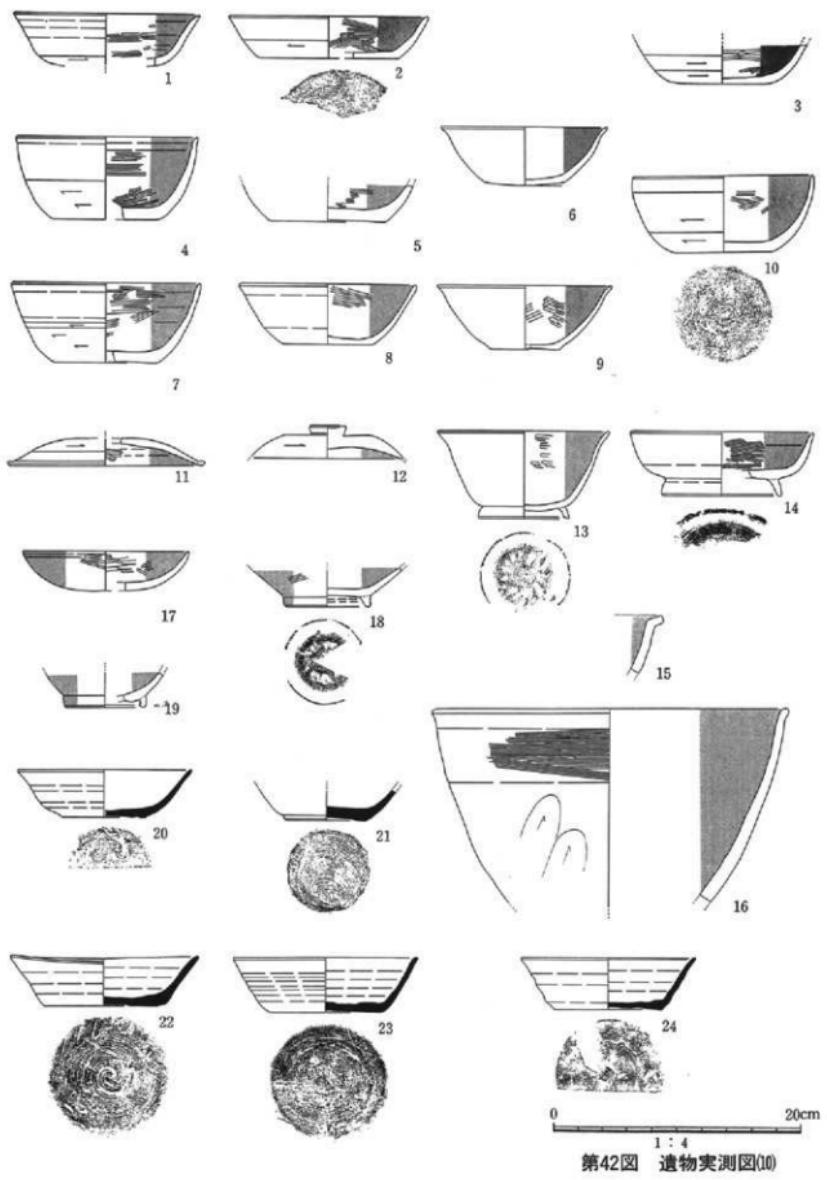
第39図 遺物実測図(7)



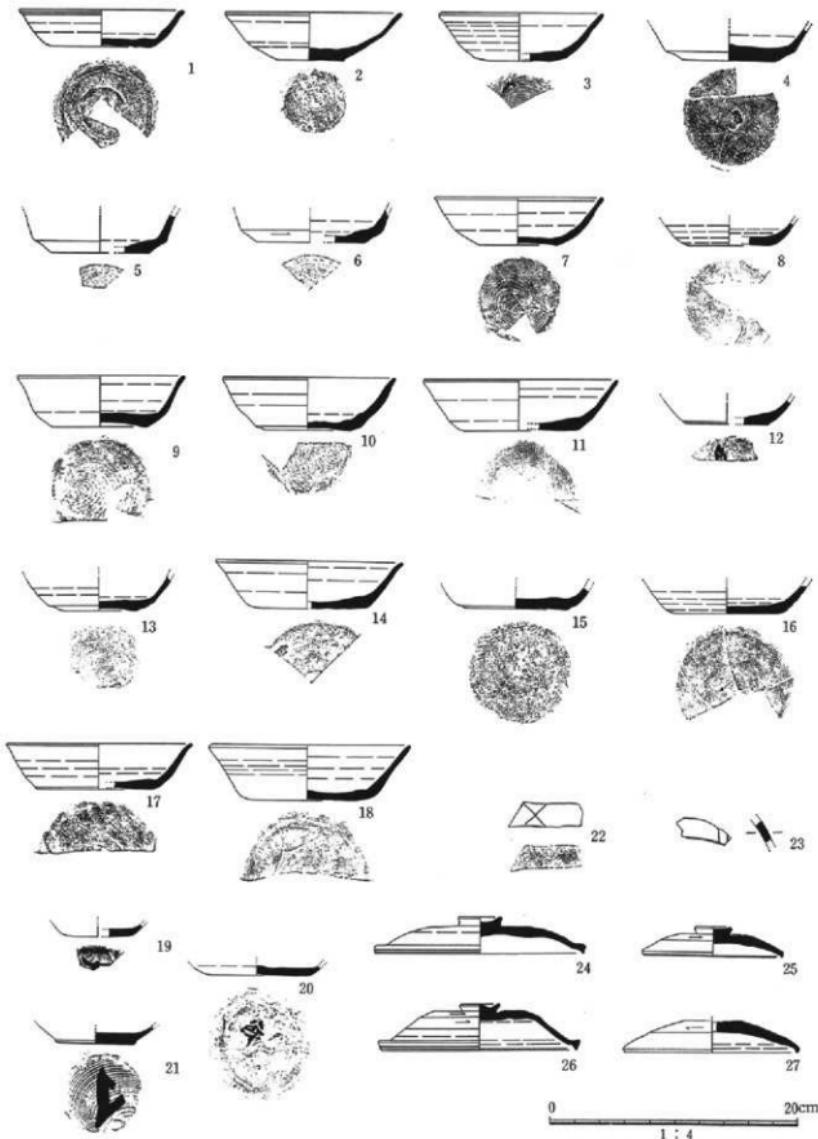
第40図 遺物実測図(8)



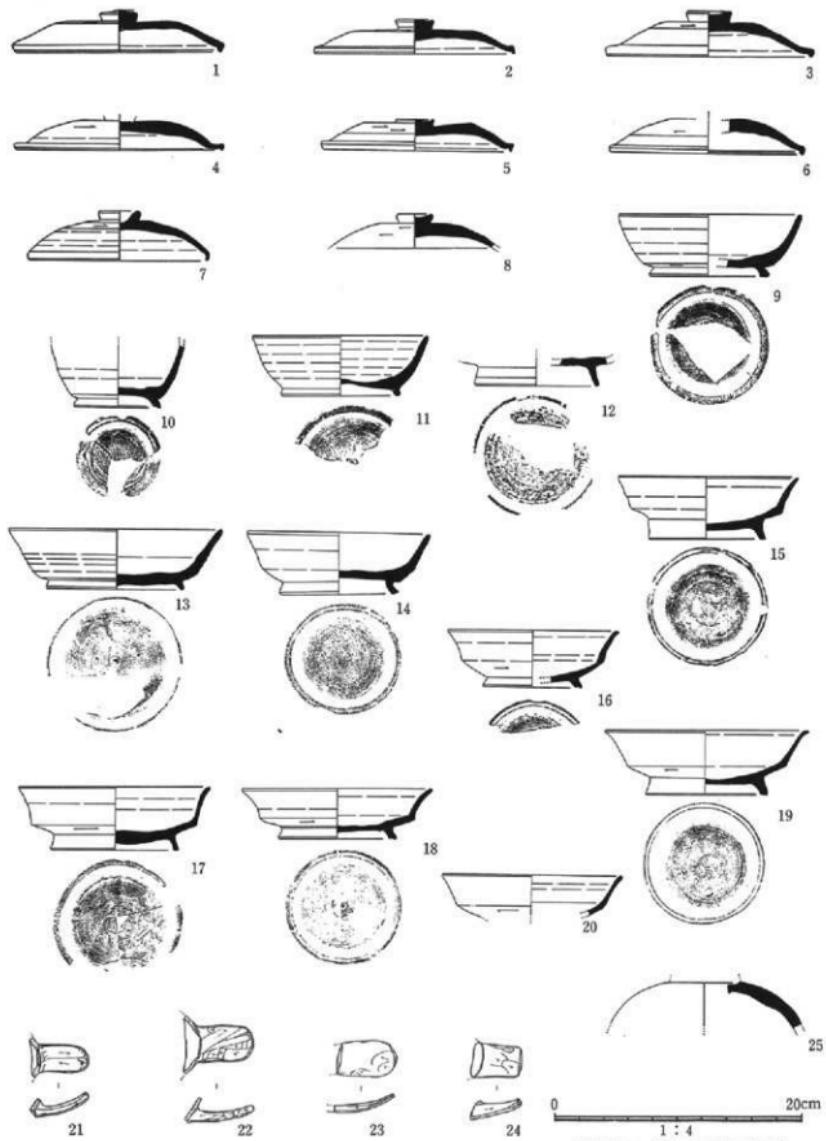
第41図 遺物実測図(9)



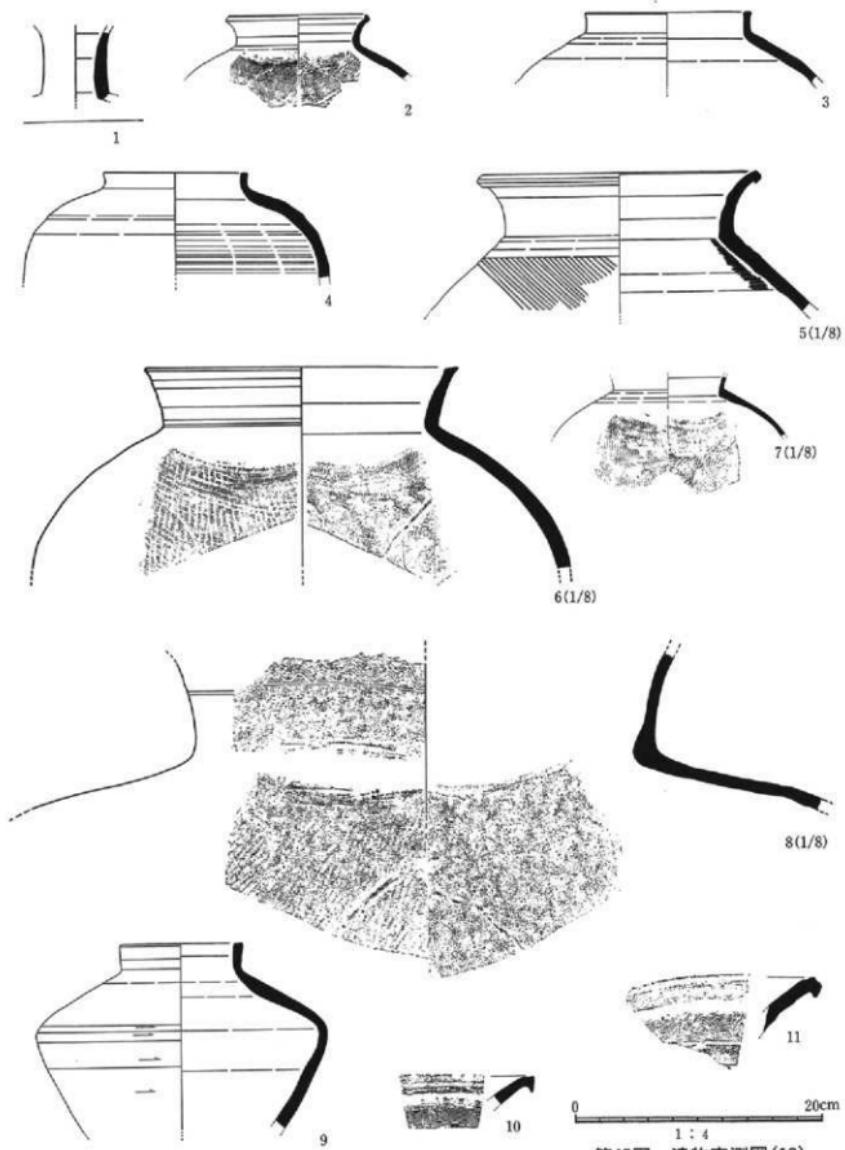
第42図 遺物実測図(10)



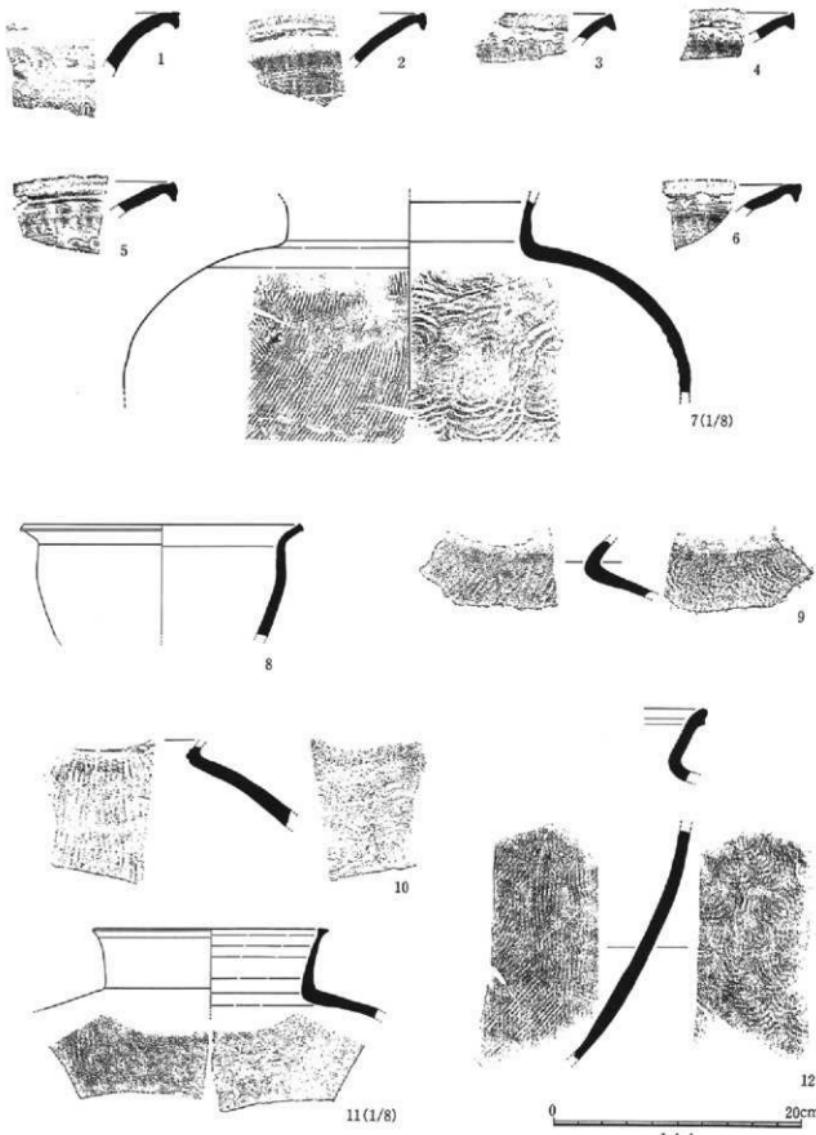
第43図 遺物実測図(11)



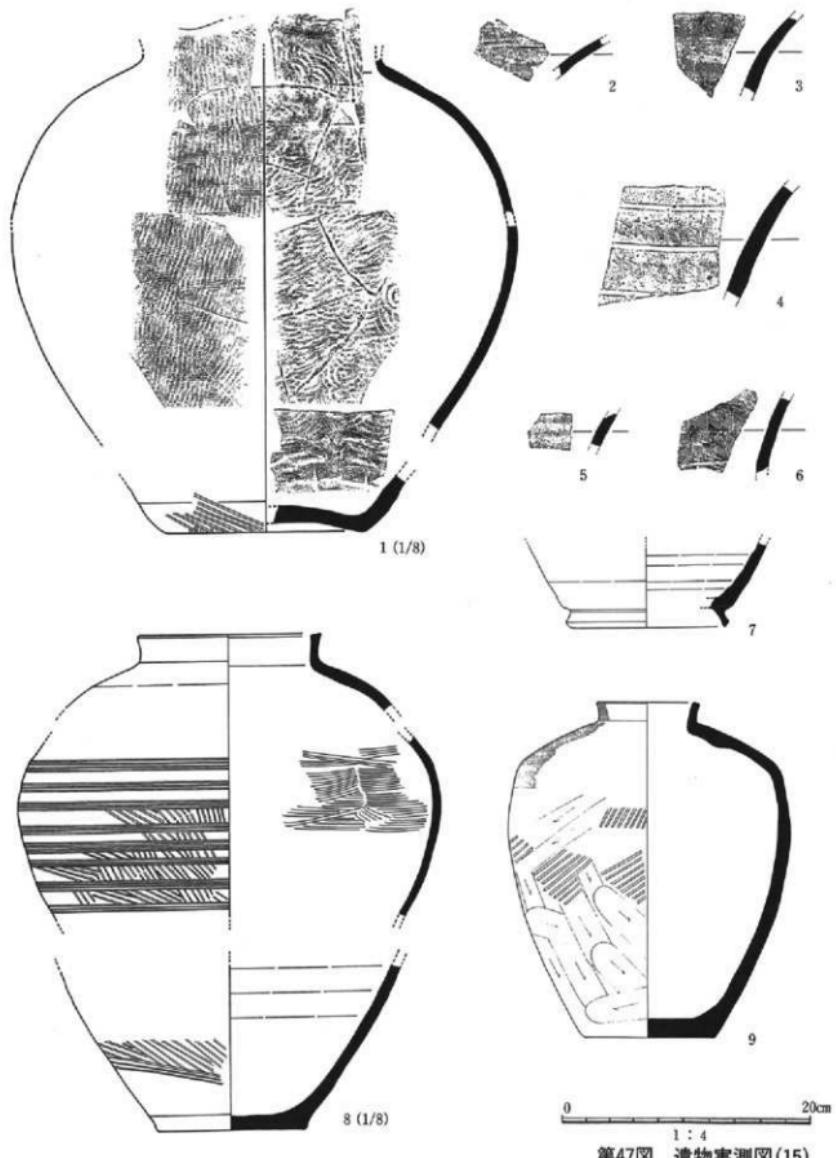
第44図 遺物実測図(12)



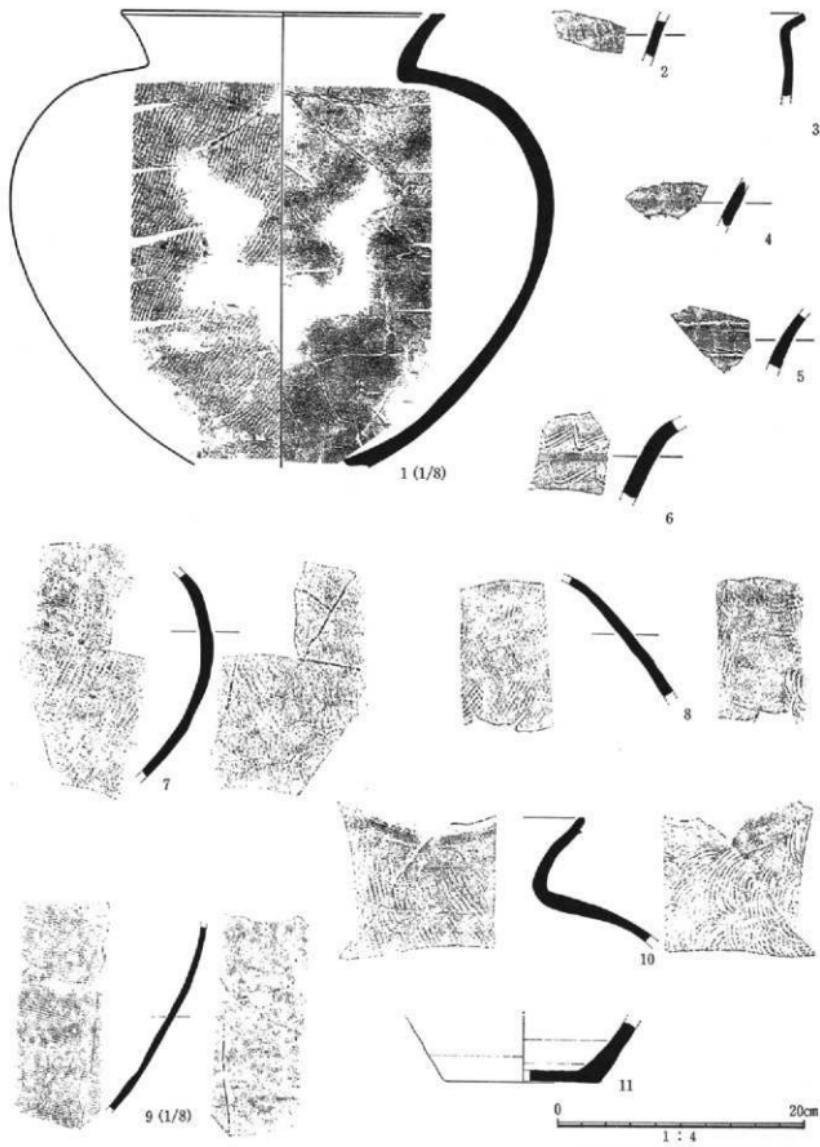
第45図 遺物実測図(13)



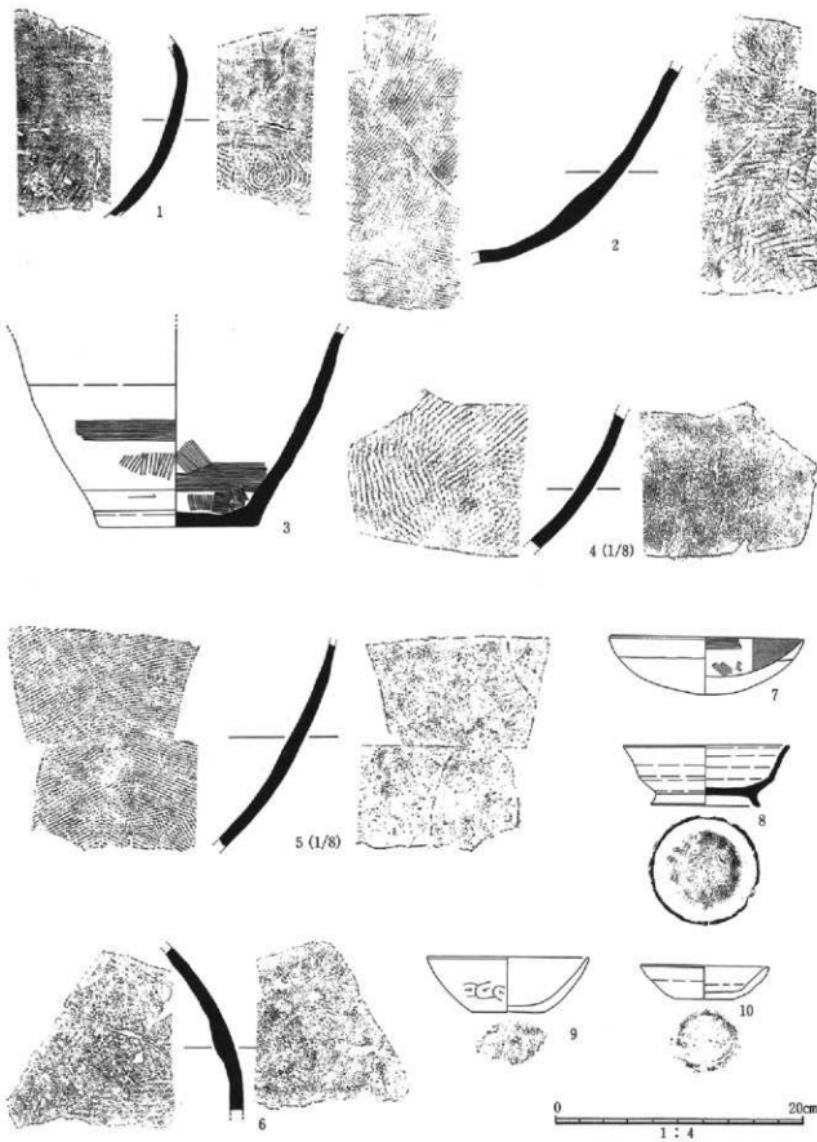
第46図 遺物実測図(14)



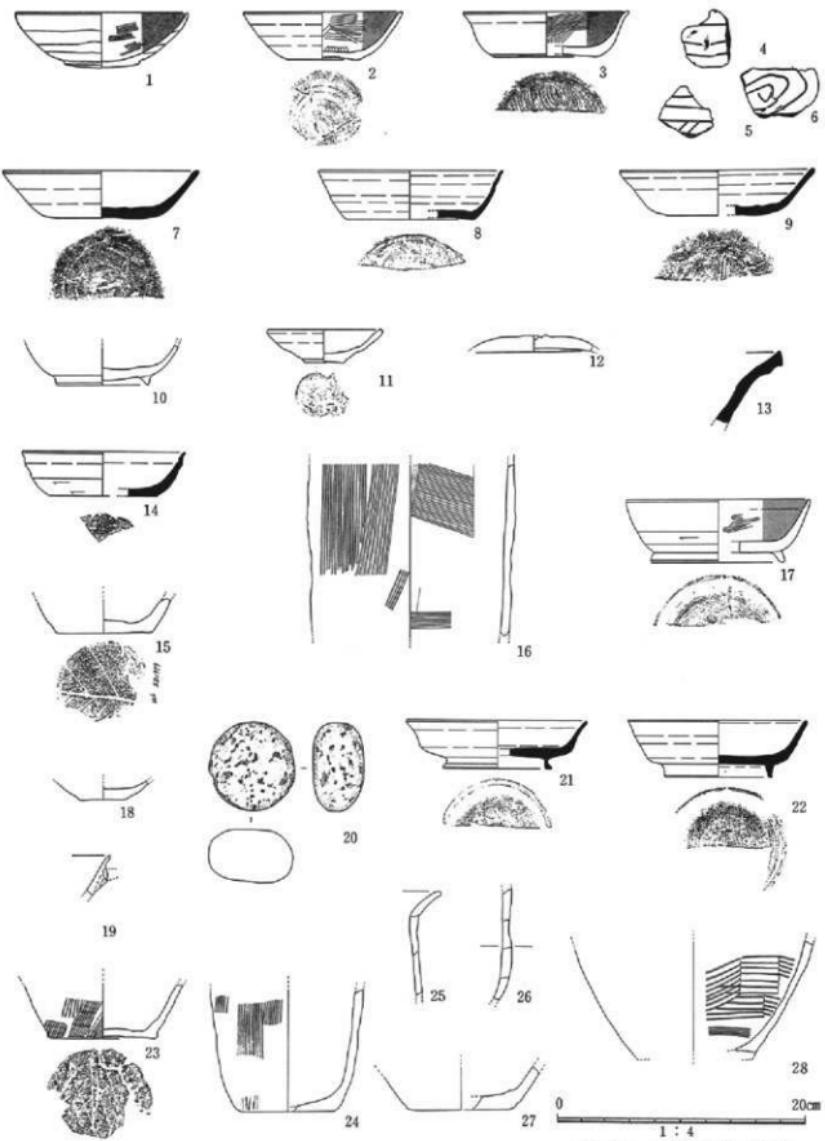
第47図 遺物実測図(15)



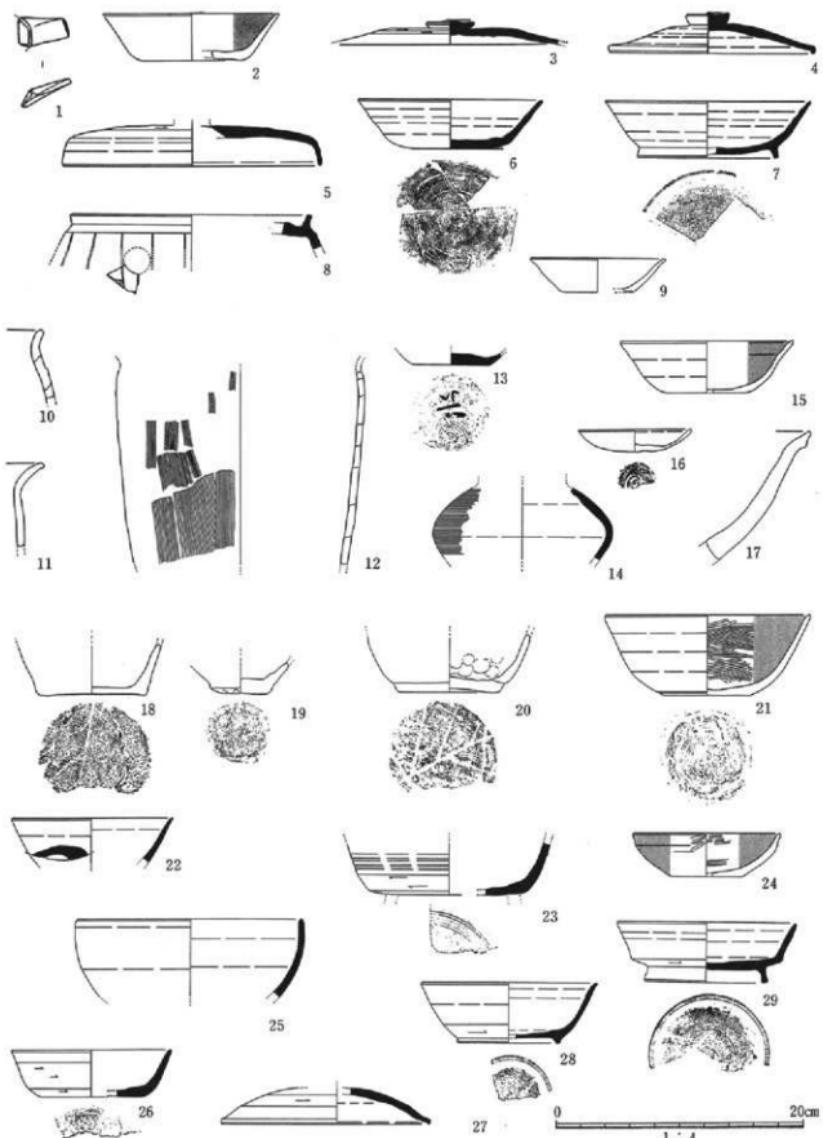
第48図 遺物実測図(16)



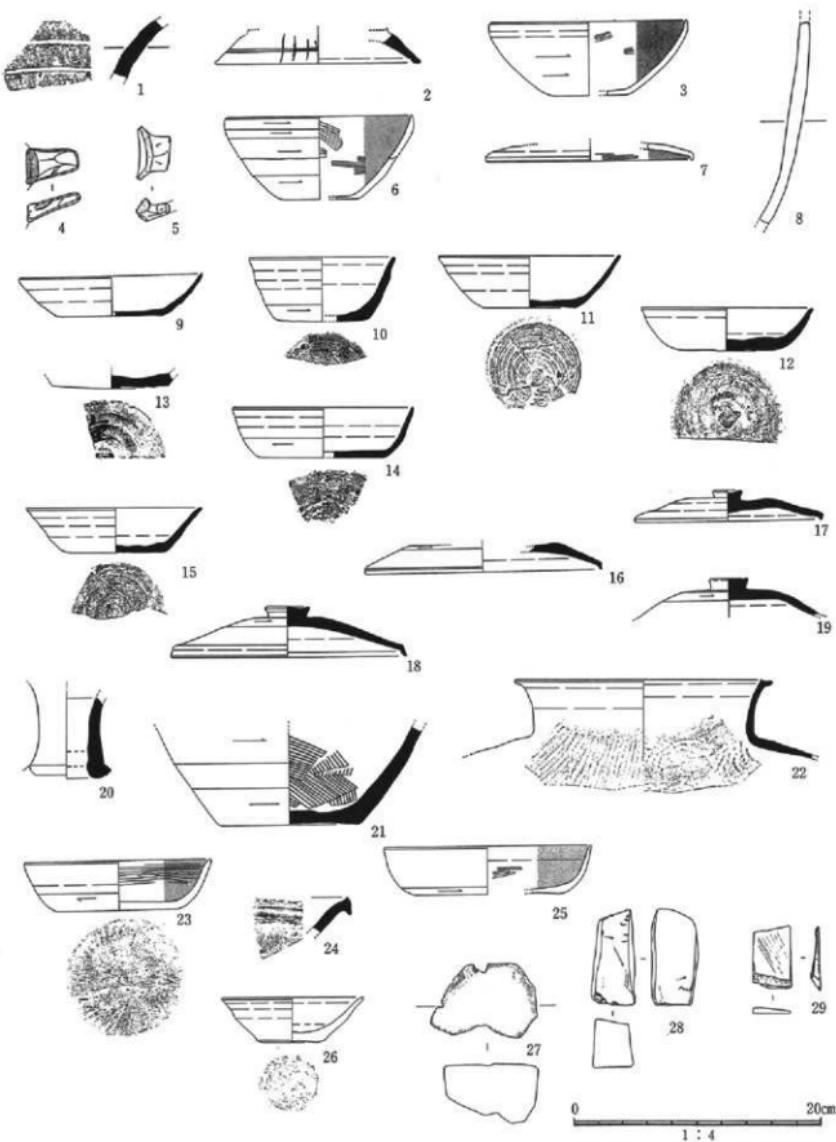
第49図 遺物実測図(17)



第50図 遺物実測図(18)



第51図 遺物実測図(19)



第52図 遺物実測図(20)

表一 出土遺物觀察表（1）

探査番号	層別	標識	計測値		成形		出土地点	備考
			口径	底径	高さ	外側		
1	土師器	甕	100	—	—	ハケメ	ST47	木製底二次加熱
2	土師器	坪	32	—	—	ロクロ	ロクロ	RP135二次加熱
3	土師器	坪	64	—	—	ロクロ	ロクロ	ST48EK15
4	土師器	坪	130	50	57	ロクロ	ロクロ	ST48岸
5	土師器	坪	58	—	—	ケズリ	ST48EK15	底無手持ヘラケズリ
6	土師器	甕	80	—	—	ダタキケズリ	ST48EK15	内曲面付厚二次加熱
7	土師器	甕	216	—	—	ケズリナメ	ST48EK15	
8	土師器	井	—	—	—	ハケメケズリ	ST48EK15	RP137
9	土師器	甕	—	—	—	ハケメ	ST48EK15	RP124
10	土師器	甕	205	105	205	ハケメ	ST48EK15	RP136RP133時代底
11	土師器	甕	—	—	—	ハケメ	ST48カマド	
12	土師器	甕	188	—	—	ロクロナメ	ロクロハケメ	ST48EK15
13	土師器	盆	—	—	—	ロクロ	ロクロ	ST48EK15
14	土師器	甕	236	—	—	ハケメ	ST48EP1	
15	黑色土器	坪	122	54	50	ロクロケズリ	ロクロミガキ	ST48EK15
16	黑色土器	坪	142	65	48	ロクロ	ロクロミガキ	ST48EK15
17	黑色土器	坪	144	58	52	ロクロ	ロクロミガキ	ST48EK15
18	黑色土器	坪	128	66	48	ロクロ	ロクロミガキ	ST48
19	黑色土器	坪	134	58	46	ロクロケズリ	ロクロミガキ	ST48EK15
20	黑色土器	坪	130	70	31	ミガキ	ミガキ	ST48
21	黑色土器	高台村坪	184	92	48	ロクロ	ロクロミガキ	ST48カマド
22	黑色土器	坪	122	—	—	ミガキ	ミガキ	ST48EP1
23	黑色土器	甕	122	—	—	ロクロケズリ	ロクロ	ST48岸
24	黑色土器	坪	142	—	—	ロクロ	ロクロ	RP120底無焼成痕転用碗
25	黑色土器	高台村坪	156	54	55	ロクロ	ロクロ	ST46EK4
26	黑色土器	坪	138	61	49	ロクロケズリ	ロクロミガキ	ST46EK4
27	黑色土器	坪	—	—	—	ミガキ	ミガキ	ST35
28	土師器	甕	180	94	55	ケズリナメ	ミガキ	ST35
29	土師器	甕	240	—	—	ハケメナメ	ハケメ	ST35
30	土師器	甕	165	—	—	ハケメ	ハケメ	RP106二次加熱
31	黑色土器	坪	—	—	—	ハケメ	ST1375EK3	本系前輪供ST1375カマドと結合
32	黑色土器	坪	165	—	—	ハケメ	ST1195	内曲面底無焼成
33	黑色土器	坪	52	—	—	ロクロ	ロクロミガキ	ST1195底部
34	黑色土器	坪	160	68	45	ロクロ	ロクロミガキ	ST1195底部
35	黑色土器	坪	60	—	—	ロクロ	ロクロ	RP57RF58RP59ST1195カマドと結合
36	土師器	甕	185	—	—	ハケメ	ハケメ	ST148EP7
37	土師器	甕	180	—	—	ハケメ	ハケメ	ST148カマド
38	土師器	甕	185	—	—	ハケメ	ST148EK3	二大加熱
39	土師器	甕	—	—	—	ハケメ	ST148E	RP156二次加熱
40	土師器	甕	—	—	—	ハケメ	ST148E	□隠部のみ
41	黑色土器	坪	156	90	45	ロクロケズリ	ロクロミガキ	ST168エフ
42	黑色土器	甕	180	86	79	ナダ	ミガキ	ST168エフ
43	黑色土器	甕	182	—	—	ロクロケズリ	ロクロ	ST168エフ
44	黑色土器	甕	160	85	64	ロロロロロロ	ロクロミガキ	ST1745岸
45	鐵器	鍔	144	98	98	ロクロケズリ	ロクロ	ST168エフ
46	土師器	甕	—	—	—	ハケメ	ST1506	岡山土器SK2059と結合
47	鐵器	鍔	164	—	27	ロクロケズリ	ロクロ	ST168カマド
48	鐵器	鍔	162	—	28	ロクロケズリ	ロクロ	ST168カマド
49	黑色土器	甕	163	85	64	ロロロロロロ	ロクロミガキ	ST1745岸
50	鐵器	鍔	144	98	98	ロクロケズリ	ロクロ	ST168エフ
51	黑色土器	甕	—	—	—	ミガキ	ミガキ	ST1506
52	鐵器	鍔	164	—	27	ロクロケズリ	ロクロ	ST168カマド
53	鐵器	鍔	162	—	28	ロクロケズリ	ロクロ	ST168カマド
54	黑色土器	甕	163	85	64	ロロロロロロ	ロクロミガキ	ST1745岸
55	鐵器	鍔	144	98	98	ロクロケズリ	ロクロ	ST168エフ
56	土師器	甕	—	—	—	ハケメ	ST168E	RP60A
57	土師器	甕	—	—	—	ハケメ	ST168E	RP60B
58	土師器	甕	—	—	—	ハケメ	ST149J	
59	黑色土器	甕	90	—	—	ミガキケズリ	ミガキ	ST144J
60	土師器	坪	148	93	39	ロクロ	ロクロ	ST144J
61	土師器	甕	—	—	—	ロクロ	ST226EEF4	木製底二次加熱輪供底
62	土師器	甕	—	—	—	ハケメ	ST226EEK5	輪供底
63	土師器	甕	—	—	—	ナダ	ST226EEK5	
64	黑色土器	坪	149	68	46	ナダ	ミガキ	ST226EEK5
65	黑色土器	坪	146	96	35	ミガキ	ミガキ	ST226EEK5
66	黑色土器	坪	144	94	46	ロクロ	ロクロミガキ	ST226EEK5
67	黑色土器	甕	—	—	—	ロクロ	ロクロ	ST226EEK5
68	土師器	甕	96	—	—	ロクロ	ロクロ	ST168Z
69	土師器	甕	85	—	—	ハケメ	ST168Z	木製底
70	土師器	甕	260	—	—	ハケメ	ST168Z	RP9二次加熱
71	土師器	甕	260	—	—	ハケメ	ST159Z	

表一 出土遺物觀察表(2)

探査区	剖面	層級	計量値			外観	内面	断面切端	出土地点	備考
			口径	因縫	壁高					
	1	土壠部 壁	80						ST1592	本頭側一次加熱
	2	土壠部 壁	125	85	126	ハケメ			ST1592	RP145丸頭底
	3	無色土 壁	130		34	ミガキ	ミガキ		ST1592	RP145丸頭土壠部丸底
	4	土壠部 壁				ハケメ			ST2289	内面有機物付着跡
路	5	頭底部 壁	110			ロクロ			ST2289	RP149
	6	土壠部 壁	121			ハケメ	ハケメ		ST1156	RP116-1北加熱側底
	7	黒色土 壁	140	86	60	テヅリ	ミガキ		ST1156SK4	内面黒色處理被膜跡-30と結合
	8	無色土 壁	100			ミガキケズリ	ミガキ		ST1149SK4	内面全側丸底SK428と結合
36	9	頭底部 高台付	92	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	断面	ST1150SK4	RP115頭部断面ヘケズリ
	10	無色土 壁	105	111	31	ロクロケズリ	ロクロミガキ	断面	ST447	RP119丸頭底付埋底部断面ヘケズリ
	11	頭底部 高台付	144	94	46	ロクロケズリ	ロクロ	断面	ST447	RP119丸頭底付埋底部断面ヘケズリ
	12	無色土 壁	140	90	38	ロクロナヂ	ロクロミガキ	断面	SB36EB42	内面黒色處理底部断面ヘケズリ二次加熱
	13	赤褐色土 壁	100	66	25	ロクロ	ロクロ	断面	SE27ER32	
	14	無色土 壁	134	65	49	ロクロ	ミガキミガキ	断面	SE1733	内面黒色處理
	15	無色土 壁	126	58	43	ロクロ	ロクロミガキ	断面	SE1732	内面黒色處理
	16	頭底部 壁	144	65	43	ロクロ	ロクロ	断面	SE1733	黒ねじき痕跡
	17	頭部 壁	256	170		ロクロミガキ	ロクロアチ		SE1733	
	18	頭部 壁				ロクロミガキ	ロクロアチ		SE1733	
路	19	頭部 壁				ロクロミガキ	ロクロアチ		SE1733	
	20	頭底部 高台付	153	95	54	ロクロ	ロクロ	断面	SE1733	底部断面ヘケズリ重ね焼き痕跡
	21	頭部 壁				ロクロ	ロクロ	断面	SE1733	燒造底状況SD1505と結合
	22	頭部 壁				ロクロ	ロクロ	断面	SE1733	燒造底状況
	23	頭部 壁				ロクロ	ロクロ	断面	SE1733	燒造部久留底ヘーカを比較
	24	木製鳥 壁	760	780	45				SE1733	丸孔切り抜き
	25	木製鳥 壁	254						SD2220	
37	26	頭部 壁							SD2220	
	27	頭部 壁							SD2220	
	28	頭部 壁	145	87	42	ロクロ	ロクロ	断面	SD2220	RP149底部断面ヘケズリ重ね焼き痕跡
	29	頭部 壁	162	98	41	ロクロ	ロクロ	断面	SD1505	
	30	頭部 壁	187			ロクロ	ロクロ	断面	SD1505	
	31	頭部 壁	140		31	ロクロケズリ	ロクロ	断面	SD1505	底部断面ヘケズリ高台断面SE1733と結合
	32	頭部 壁	190			ロクロ	ロクロ	断面	SD1505	重ねり
	33	生土 壁	56						SE246	RP119頭部に3束の沈鉢
	34	頭部 壁	高台付	70	ロクロ	ロクロ	ロクロ	断面	SE2103	遮断面付層不明
	35	無色土 壁	128	35	33	ナヂ	ミガキ		SK1863	RP118内面黒色付埋底部分に沈鉢
	36	土壠部 壁	230			ミガキケズリナヂ			SK2079	
	37	土壠部 壁	220			ハケメナヂ			SK2079	輪削底
	38	土壠部 壁				ハケメ			SK2079	RP142木底痕
	39	土壠部 壁	98	70	117	ハケメナヂ			SK2079	木底底二重加熱
	40	土壠部 壁	82						SK2079	RP143木頭底二次加熱SX2064と結合
	41	土壠部 壁							SK2079	□焼造のSX2084と結合
	42	土壠部 壁	70			ケズリ	ハケメ	断面	SK2079	別形体
	43	土壠部 壁	96			ハケメ			SK2079	
	44	無色土 壁	184	94	55	テヅリ	ミガキ		SK2079	木頭底二次加熱X2045F1946と結合
	45	無色土 壁	180	132	38	ケズリ	ミガキ		SK2079	内面黒色處理底手持ヘケズリ内外面二次加熱
	46	頭底部 中空断面	155	105	60	ロクロケズリ	ロクロ	断面	SK2095SU36	内面黒色處理底手持ヘケズリ体部中央に沈鉢二次加熱
	47	頭部 壁	206			ロクロ	ロクロ	断面	SK2079	RP141便用糞多内外側埋底部ヘーカを焼き糊
	48	頭部 壁	118	86	44	ケズリ			SK2079	RP153体部上部に2束の埋底状伏文柱上部に15mmの円孔1ヶ所把手
	49	石器	石刀	石刀	厚46				SK2079	二次加熱
	50	土壠部 壁	240			ハケメ			SK2084	埋底に沈鉢
	51	土壠部 壁	262			ハケメ	ハケメ		SK2084	RP7頭部付線SK2079と結合
	52	土壠部 壁	91			ハケメ			SK2079	RP153・54頭部輪削底SX2084と結合
	53	土壠部 壁	206			タキハケメナヂ			SK2079	二次加熱SX2084と結合
	54	土壠部 壁							SK2084	二次加熱
	55	土壠部 壁	160			ナヂ			SK2084	□縫部
	56	土壠部 壁	84	70	47				SK2084	RP158
	57	土壠部 壁	62			ハケメ			SK2084	木床底
	58	土壠部 壁				52.5			SK2084	体部中央に沈鉢
	59	土壠部 壁							SK2084	
	60	土壠部 壁							SK2084	
	61	土壠部 壁	176						SK2084	二次加熱
	62	土壠部 壁							SK2084	二次加熱
	63	土壠部 壁				ハケメ	ハケメ		SK2084	輪削底
	64	土壠部 壁							SK2084	二次加熱
	65	土壠部 壁							SK2084	SK1900と融合
	66	土壠部 壁							SK2084	二次加熱
	67	頭部 内面観	85	133	42	ロクロ	ロクロ		SK2084	頭部内面の酒けし5厚板ヘラ剥きで解せ上部に1条の波線SK2273と結合
	68	黒色土壁				ミガキ	ミガキ		SK3335	向風土壁
	69	土壠部 壁	217		338	タキハケメ	ハケメ		SK2135	RP147丸底SK2079SK2337と結合

表一 出土遺物觀察表 (3)

件名	種類	器種	計 素 個			皮 茄	出土点	備考
			口徑	底径	高さ			
39	29 上部鉢	壺	100	ハケメ	ハケメ	SX1235	RPI18底部板瓦調二次加熱	
39	31 上部鉢	便	90			SX1169	木炭焼二次加熱	
40	22 上部鉢	壺				SX1169	圓筒状沈緑	
	1 黒色土器	壺	56		1.0cm	SX1169	円筒形黑色處理	
	2 黒色土器	杯	160	84	34	ロクロ	圓盤ヘラ	SX1169 重ね使用跡
	3 黒色土器	円筒瓶	195	215	76	ロクロ		SX1169 RPI150方形の造りし4単位
	4 黒色土器	盤			1.0cm	SGK2214	圓筒土器底部手持ちハラズ	
	5 黒色土器	壺	150		26	ロクロ2.0cm	ロクロ	SK1169 RPI11重ね焼き痕跡利用現
	6 上部鉢	便	95	ハケメ	ハケメ	SG1.2T1	木炭焼	
	7 上部鉢	蓋	160	56	1.0cm	ロクロ		SG1.2T1 重ね焼き痕跡
	8 黒色土器	壺	112	58	29	ロクロ	圓盤	SG1.2T1
	9 黒色土器	円筒瓶	215		1.0cm	ロクロ		SG1.2T1
	10 有縫土器	杯	118	53	41	ロクロ	圓盤	SG1.2
	11 有縫土器	瓶	97	44	21	ロクロ	圓盤	SG1.2T1
	12 有縫土器	壺	59		1.0cm	ロクロ	圓盤	SG1.2T1
	13 木製品	漆塗鏡	20				SG1.2T1	鏡口だし裏面
	14 木製品	漆塗鏡	60				SG1.2T1	高台側面
	15 木製品	下駄	長60	幅92	高56		SG1.2T1	
	16 木製品	板	長60	幅72	厚9		SG1.2T1	
	17 木製品	漆塗土器					SG1.2T2	RPI29漆塗底二次加熱
	18 黒色土器	杯	150	26	40	ロクロ	圓盤ヘラ	SG1.2T2 RPI1
	19 黒色土器	杯	106	62	31	ロクロ	圓盤	SG1.2T2 丸錐
	20 黒色土器	杯	147	79	38	ロクロ	圓盤	SG1.2T2 RPI28内外面二次加熱
	21 有縫土器	杯	56		1.0cm	ロクロ	圓盤	SG1.2T2 RPI6
	22 有縫土器	高台付杯	82		1.0cm	ロクロ		RPI32
	23 有縫土器	杯	106	56	37	ロクロ	圓盤	SG1.2T2 RPI7
	24 有縫土器	杯	134	66	38	ロクロ	圓盤	SG1.2T2 RPI30RPI21
	1 有縫土器	瓶	128	58	30	ロクロ	圓盤	SG1.2T2 RPI33
	2 有縫土器	杯	13.5	49	40	ロクロ	圓盤	SG1.2T2 RPI35
	3 有縫土器	四石	長84	幅64	厚24			
	4 土器脚	杯					SG1.2T2	
	5 有縫土器	杯	56		1.0cm	ロクロ	圓盤	SG1.2T2
	6 有縫土器	杯	146	86	45		SG1.2T2	RPI7漆塗器身
	7 有縫土器	漆塗土器	120				SG1.2T2	木炭焼痕根拠
	8 有縫土器	漆塗	194		1.0cm	ロクロ	SG1.2T2	
	9 有縫土器	漆	84	ハケメ	ハケメ		SG1.2T2	鏡口二次加熱
	10 有縫土器	蓋	115				SG1.2T2	
	11 有縫土器	便	62				SG1.2T2	木炭焼内面接付漆塗容器身
	12 有縫土器	便	187		1.0cm		SG1.2T2	RPI52RPI63
	13 有縫土器	便			1.0cm	ハケメ	SG1.2T2	
	14 有縫土器	双耳片柄	長78	幅28	厚1.5cm		SG1.2T2	内面黑色燒痕部欠損
	15 有縫土器	杯	144	90	42	ロクロ2.0cm	ロクロ2.0cm	SG1.2T2 RPI7内面黑色燒痕部凹痕へハケメリヘラズ
	16 有縫土器	瓶	132	85	61	ロクロ2.0cm	ロクロ2.0cm	SG1.2T2 内面黑色燒痕底部凹痕へハケメリ
	17 有縫土器	杯	180		1.0cm	ロクロ2.0cm	ロクロ2.0cm	SG1.2T2 RPI10内面黑色燒痕底部凹痕へハケメリ外側痕跡
	18 有縫土器	杯	151	96	40	ロクロ2.0cm	ロクロ2.0cm	SG1.2T2 内面黑色燒痕底部凹痕へハケメリ
	19 有縫土器	杯	62		1.0cm	モガキテツリ	モガキテツリ	SG1.2T2 内面黑色燒痕底部凹痕へハケメリ外側痕跡
	1 有縫土器	杯	152		1.0cm	ロクロ2.0cm	ロクロ2.0cm	SG1.2T2 内面黑色燒痕底部凹痕へハケメリ二次加熱
	2 有縫土器	杯	162	114	34	ロクロ2.0cm	ロクロ2.0cm	SG1.2T2 内面黑色燒痕底部凹痕へハケメリ
	3 有縫土器	杯	84		1.0cm	ロクロ2.0cm	ロクロ2.0cm	SG1.2T2 RPI9内面黑色燒痕底部凹痕へハケメリ
	4 有縫土器	瓶	148	88	61	ロクロ2.0cm	ロクロ2.0cm	SG1.2T2 内面黑色燒痕RPI7底部凹痕へハケメリ
	5 有縫土器	杯	96		1.0cm	モガキテツリ	モガキテツリ	SG1.2T2 内面黑色燒痕底部凹痕へハケメリ二次加熱
	6 有縫土器	杯	134	65	45	ロクロ	ロクロ2.0cm	SG1.2T2 RPI6内面黑色燒痕二次加熱
	7 有縫土器	肉	150	85	62	ロクロ2.0cm	ロクロ2.0cm	SG1.2T2 RPI9内面黑色燒痕底部凹痕へハケメリ
	8 有縫土器	杯	145	72	49	ロクロ	ロクロ2.0cm	SG1.2T2 内面黑色燒痕
	9 有縫土器	便	142	56	52	ロクロ	ロクロ2.0cm	SG1.2T2 内面黑色燒痕
	10 有縫土器	肉	146	88	62	ロクロ2.0cm	ロクロ2.0cm	SG1.2T2 RPI8底部凹痕へハケメリ
	11 有縫土器	蓋	168		1.0cm	ロクロ2.0cm	ロクロ2.0cm	SG1.2T2 内面黑色燒痕
	12 有縫土器	蓋				ロクロ2.0cm	ロクロ2.0cm	SG1.2T2 内面黑色燒痕
	13 有縫土器	高台付肉	149	72	71	ロクロ	ロクロ2.0cm	SG1.2T2 RPI6内面黑色燒痕二次加熱
	14 有縫土器	高台付杯	150	96	52	ロクロ	ロクロ2.0cm	SG1.2T2 RPI7内面黑色燒痕
	15 有縫土器	便				ロクロ	SG1.2T2	内面黑色燒痕内側に漆付着
	16 有縫土器	蓋	290		1.0cm	モガキテツリ	モガキテツリ	SG1.2T2 内面黑色燒痕
	17 有縫土器	杯	126	20	モガキ	モガキ	SG1.2T2	内面土器9底
	18 有縫土器	高台付杯	79	20	モガキ	モガキ	SG1.2T2	RPI6内面土器
	19 有縫土器	高台付杯	65		1.0cm	ロクロ2.0cm	ロクロ2.0cm	SG1.2T2 RPI5内面土器拂みだし高台

表一 出土遺物觀察表(4)

件名	種別	器種	計測値		外觀	内面	直鉢切削	出土地点	備考
			口径	底径					
新	19	直鉢形	坪	142	79	38	□口縁	直鉢	SG1,TT3 重ね焼き痕跡
	21	直鉢形	坪		68	□口縁	直鉢	SG1,TT3	
42	22	直鉢形	坪	154	98	39	□口縁	直鉢・ヘタ	SG1,TT3 RP68底部手持ちヘタケヅリ
	23	直鉢形	坪	156	96	44	□口縁	直鉢・ヘタ	SG1,TT3 RP78
	24	直鉢形	坪	142	88	42	□口縁	直鉢・ヘタ	SG1,TT3 RP71底部手持ちヘタケヅリ
新	1	直鉢形	坪	122	85	30	□口縁	直鉢・ヘタ	SG1,TT3 直鉢口縁ヘタケヅリ
	2	直鉢形	坪	144	83	39	□口縁	直鉢	SG1,TT3 RP70
	3	直鉢形	坪	134	74	39	□口縁	直鉢	SG1,TT3 RP64底部痕
	4	直鉢形	坪		78	□口縁	直鉢・ヘタ	SG1,TT3 RP65	
	5	直鉢形	坪		76	□口縁	直鉢・ヘタ	SG1,TT3 直鉢口縁ヘタケヅリ底部下に横アリ	
	6	直鉢形	坪		68	□口縁ケヅリ	直鉢・ヘタ	SG1,TT3 底部痕ヘタケヅリ底部下に横アリ	
	7	直鉢形	坪	136	65	39	□口縁	直鉢	SG1,TT3 重ね焼き痕跡
	8	直鉢形	坪		76	□口縁	直鉢	SG1,TT3 RP48	
	9	直鉢形	坪	136	74	42	□口縁	直鉢	SG1,TT3 RP60・ラケヅリ重ね焼き痕跡
	10	直鉢形	坪	140	72	43	□口縁	直鉢	SG1,TT3 RP63底部痕跡
	11	直鉢形	坪	159	92	42	□口縁	直鉢・ヘタ	SG1,TT3 底部手持ちヘタケヅリ
	12	直鉢形	坪		76	□口縁	直鉢・ヘタ	SG1,TT3 底部痕手縁不明	
43	13	直鉢形	坪		68	□口縁	直鉢・ヘタ	SG1,TT3 RP72	
	14	直鉢形	坪	132	96	38	□口縁	直鉢	SG1,TT3 RP69・ラケヅリ重ね焼き痕跡
	15	直鉢形	坪		85	□口縁	直鉢・ヘタ	SG1,TT3 火瘤	
	16	直鉢形	坪		97	□口縁	直鉢・ヘタ	SG1,TT3 底部ヘタ焼き印	
	17	直鉢形	坪	136	106	37	□口縁	直鉢・ヘタ	RP73底部口縁ヘタケヅリ
	18	直鉢形	坪	164	108	45	□口縁	直鉢・ヘタ	RP71底部口縁ヘタケヅリ
	19	直鉢形	坪		66	□口縁	直鉢・ヘタ	SG1,TT3 底部痕手縁不明	
	20	直鉢形	坪		84	□口縁	直鉢・ヘタ	SG1,TT3 底部痕手縁不規則付着	
	21	直鉢形	坪		65	□口縁	直鉢	SG1,TT3 底部痕手縁不明	
	22	直鉢形	坪				直鉢・ヘタ	SG1,TT3 底部ヘタ焼き印	
	23	直鉢形	内面机			□口縁	直鉢	SG1,TT3 舞面に焼け跡	
	24	直鉢形	茎	172	30	□口縁ケヅリ	□口縁	SG1,TT3 RP14重ね焼き痕跡西北アラビヒ結合	
	25	直鉢形	茎	116	24	□口縁ケヅリ	□口縁	SG1,TT3	
	26	直鉢形	茎	164	37	□口縁ケヅリ	□口縁	SG1,TT3 RP51重ね焼き痕跡	
	27	直鉢形	茎	144	25	□口縁ケヅリ	□口縁	SG1,TT3	
第	1	直鉢形	茎	170	34	□口縁ケヅリ	□口縁	SG1,TT3 重ね焼き痕跡	
	2	直鉢形	茎	164	26	□口縁ケヅリ	□口縁	SG1,TT3 重ね焼き痕跡	
	3	直鉢形	茎	166	37	□口縁ケヅリ	□口縁	SG1,TT3 RP72重ね焼き痕跡	
	4	直鉢形	茎	170	34	□口縁ケヅリ	□口縁	SG1,TT3 RP79	
	5	直鉢形	茎	156	25	□口縁ケヅリ	□口縁	SG1,TT3 RP75底部口縁ヘタケヅリ	
	6	直鉢形	茎	154		□口縁ケヅリ	□口縁	SG1,TT3 ST14B8結合	
	7	直鉢形	茎	140	40	□口縁ケヅリ	□口縁	SG1,TT3 RP102底部口縁ヘタケヅリ痕跡	
	8	直鉢形	茎			□口縁ケヅリ	□口縁	SG1,TT3 RP76	
	9	直鉢形	高台付坪	168	98	59	□口縁	直鉢・ヘタ	SG1,TT3 RP75底部口縁ヘタケヅリ
	10	直鉢形	高台付茎		70	□口縁ケヅリ	直鉢	SG1,TT3 ST14B8結合	
44	11	直鉢形	坪	161	94	49	□口縁	直鉢・ヘタ	SG1,TT3 RP14底部口縁ヘタケヅリ痕跡
	12	直鉢形	高台付坪	166		□口縁	直鉢	SG1,TT3 RP76	
	13	直鉢形	根ぬ	175	109	49	□口縁	直鉢・ヘタ	SG1,TT3 底部口縁ヘタケヅリ
	14	直鉢形	高台付坪	161	94	58	□口縁	直鉢・ヘタ	RP17底部口縁ヘタケヅリ重ね焼き痕跡
	15	直鉢形	根ぬ	147	96	51	□口縁	直鉢・ナゲ	SG1,TT3 RP60底部口縁ヘタケヅリ重ね焼き痕跡
	16	直鉢形	根ぬ	138	86	46	□口縁ケヅリ	直鉢	SG1,TT3 RP69
	17	直鉢形	根ぬ	156	164	51	□口縁ケヅリ	直鉢	SG1,TT3 RP99底部口縁ヘタケヅリ実被りSB36EB42と結合
	18	直鉢形	根ぬ	154	95	41	□口縁	直鉢・ヘタ	SG1,TT3 RP88底部口縁ヘタケヅリ
	19	直鉢形	根ぬ	166	106	52	□口縁ケヅリ	直鉢・ヘタ	SG1,TT3 RP62底部口縁ヘタケヅリSE1733と結合
	20	直鉢形	根ぬ	146		□口縁ケヅリ	直鉢・ヘタ	SG1,TT3 重ね焼き痕跡	
	21	直鉢形	根耳付坪	長45	幅20	厚6	□口縁		SG1,TT3 根耳50mm
	22	直鉢形	根耳付坪	長50	幅28	厚8	ケヅリ		SG1,TT3
	23	直鉢形	根耳付坪	長40	幅30	厚5	ケヅリ		SG1,TT3
	24	直鉢形	根耳付坪	長40	幅24	厚5	ケヅリ		SG1,TT3
	25	直鉢形	茎			□口縁	直鉢	SG1,TT3 火瘤9	
第	1	直鉢形	茎			□口縁	直鉢	SG1,TT3 火瘤9	
	2	直鉢形	茎	220		□口縁ケヅリ	□口縁アテ	SG1,TT3	
	3	直鉢形	茎	125		□口縁	直鉢	SG1,TT3 火瘤9	
	4	直鉢形	茎	116		□口縁ケヅリ	□口縁アテ	SG1,TT3 火瘤9	
	5	直鉢形	茎	230		□口縁ケヅリ	直鉢	SG1,TT3 RP17	
	6	直鉢形	茎	280		□口縁ケヅリ	アテ	SG1,TT3 RP61	
	7	直鉢形	茎			□口縁ケヅリ	□口縁アテ	SG1,TT3	
	8	直鉢形	茎			タクキ	アテ	SG1,TT3 RP1600mm280mm	

表—5 出土遺物觀察表（5）

種別	種類	器種	計 測 準				内 形	后部内形	出土地点	備 考
			□寸	□倍	□倍	□高				
器	9 領道器	便	100	ワコケツリ	ロクロ	イマ			SG1.273	
器	10 領道器	便		ロクロ	ロクロ				SG1.273	翻被状文
器	11 領道器	便		ロクロ	ロクロ				SG1.273	RP56翻被状文
器	1 領道器	便		ロクロ	ロクロ				SG1.273	翻被状文
器	2 領道器	便		ロクロ	ロクロ				SG1.273	翻被状文
器	3 領道器	便		ロクロ	ロクロ				SG1.273	翻被状文
器	4 領道器	便		ロクロ	ロクロ				SG1.273	翻被状文
器	5 領道器	便		ロクロ	ロクロ				SG1.273	翻被状文
器	6 領道器	便		ロクロ	ロクロ				SG1.273	翻被状文
器	7 領道器	便		ロクロタキ	ロクロアテ				SG1.273	横刷り
器	8 領道器	便		ロクロ	ロクロ				SG1.273	
器	9 領道器	便		ロクロタキ	ロクロアテ				SG1.273	RP91
器	10 領道器	便		ロクロタキ	ロクロアテ				SG1.273	
器	11 領道器	便	192	ロクロタキナダ	ロクロアテ				SG1.273	RP26灰被り
器	12 領道器	便		ロクロタキ	ロクロアテ				SG1.273	
器	1 領道器	便	160	ワコケツリ	ロクロアテ				SG1.273	
器	2 領道器	便		ロクロ	ロクロ				SG1.273	翻被状文
器	3 領道器	便		ロクロ	ロクロ				SG1.273	翻被状文
器	4 領道器	便		ロクロ	ロクロ				SG1.273	翻被状文
器	5 領道器	便		ロクロ	ロクロ				SG1.273	翻被状文
器	6 領道器	便		ロクロ	ロクロ				SG1.273	翻被状文
器	7 領道器	便		ロクロ	ロクロ				SG1.273	翻被状文
器	8 領道器	便	126	ロクロ	ロクロ				SG1.273	
器	9 領道器	便	145	129	ワコケツリ	ロクロアテ			SG1.273	
器	10 領道器	便	78	166	277	ロクロタキナダ	アテ		SG1.273	
器	11 領道器	便	266	149	372	タキ	アテ		SG1.273	
器	2 領道器	便		ロクロ	ロクロ				SG1.273	翻被状文
器	3 領道器	便		ロクロ	ロクロ				SG1.273	翻被状文
器	4 領道器	便		ロクロ	ロクロ				SG1.273	翻被状文
器	5 領道器	便		ロクロ	ロクロ				SG1.273	翻被状文
器	6 領道器	便		ロクロ	ロクロ				SG1.273	翻被状文
器	7 領道器	便		ロクロタキ	ロクロアテ				SG1.273	自然物
器	8 領道器	便		ロクロタキ	ロクロアテ				SG1.273	内側とも接着部分器
器	9 領道器	便		ロクロタキ	ロクロアテ				SG1.273	
器	10 領道器	便		ロクロタキ	ロクロアテ				SG1.273	ST149と結合
器	11 領道器	便	126	ロクロケツリ	ロクロ				SG1.273	RP26灰被り
器	1 領道器	便		ロクロタキ	ロクロアテ				SG1.273	
器	2 領道器	便		タキ	アテ				SG1.273	
器	3 領道器	便		ロクロタキナダ	ロクロアテ				SG1.273	
器	4 領道器	便		タキ	アテ				SG1.273	RP21
器	5 領道器	便		ロクロタキ	ロクロアテ				SG1.273	灰被り
器	6 領道器	柄鉢		タキ	アテ				SG1.273	RP49
器	7 黒色土器	汎	156	47	ミガキ				SG1.274	内面黑色馬蹄形鉢底
器	8 黒色土器	汎	133	89	49	ロクロハケヌ	回転丸		SG1.274	RP36ねじれ回転
器	9 土器	汎	130	58	45	ケツリ			SG1.275	RP42面部全体外表面持ちヘラケズリ内面有植物付
器	10 扇形土器	汎	103	49	27	ロクロ	回転丸		SG1.275	
器	1 黑色土器	汎	140	62	45	ミテ	ミガキ		SG1.275	内面黑色処理鉢底下半に浅脚輪状痕
器	2 黑色土器	汎	130	58	39	ロクロ	ミガキ	回転丸	SG1.275	内面黑色處理
器	3 黑色土器	汎	136	96	37	ロクロケツリ	ミガキ	回転丸	SG1.275	内面黑色處理底部回転ヘラケズリ
器	4 新生土器	汎							SG1.275	波状文
器	5 新生土器	汎							SG1.275	波状文
器	6 新生土器	汎							SG1.275	RP37渦巻き波状文
器	7 新生土器	汎	160	88	30	ロクロ	ロクロ	回転ヘテ	SG1.275	
器	8 新生土器	汎	150	182	40	ロクロ	ロクロ	回転ヘテ	SG1.275	
器	9 新生土器	汎	156	182	37	ロクロ	ロクロ	回転ヘテ	SG1.275	RP38内面摩擦面
器	10 硬膜土器	汎	76			ロクロ	ロクロ		SG1.275	二次加熱
器	11 硬膜土器	汎	96	35	27	ロクロ	ロクロ	回転丸	SG1.277	
器	12 黑色土器	汎					ミガキ		SG1.277	内面黑色處理
器	13 黑色土器	汎					ロクロハケヌ		SG1.277	
器	14 黑色土器	汎	134	99	36	ロクロケツリ	ロクロ	回転ヘテ	SD1999	前部内面ヘラケズリ裏中アラボリと結合
器	15 灰土器	汎							SD1999	木製瓶二次加熱
器	16 上部土器	汎				ハケヌ	ハケヌ		SK425	KP11SK426と結合
器	17 黑色土器	汎合付	168	106	51	ロクロケツリ	ロクロハケヌ	回転ヘテ	SD1278	RP40内面黑色處理底部回転ヘラケズリ
器	18 上部土器	汎		35	20	ロクロ		回転丸	SX1910	かわらけ
器	19 黑色土器	汎合付				ミガキ			SK3173	内面黑色處理底部欠損
器	20 表土器	磨石	75	74	70	ロクロ			SK1999	颗粒

表一 6 出土遺物観察表 (6)

編番	種別	形態	計測値		外觀	内面	底面切跡	出土地点	備考
			口径	底径					
21	灰陶器	壺	147	29	39	クロ	クロ	圓輪ヘラ	SX1752
22	灰陶器	高台付壺	144	66	46	クロ	クロ	圓輪ヘラ	SX1173 底面切跡へラケズリ無ね燒き痕
23	土師器	壺	95			ハケメ			SX1917~1930 木葉底二次加熱
24	土師器	壺	78			ハケメ			SX1918
25	土師器	壺				ハケメ			SX1868 二次加熱
26	土師器	壺				ハケメ			SX1918 二次加熱痕根拠
27	土師器	壺	84						SX1868 木葉底二次加熱
28	土師器	壺	100						SX1983 円輪付村壁
29	土師器	耳付壺	長40	幅26	厚7	ケヅリ			SX1917~1920
30	黒色土器	坪	142	62	38	クロ	クロミガキ		SX1973 内面黒色熟成
31	灰陶器	壺				クロケズリ	クロ		SX2171 N-12と結合
32	灰陶器	壺	167	33	30	クロ			SX1866 RP146
33	灰陶器	壺	216	32.5	32.5	クロケズリ	クロ		SX1917~20
34	灰陶器	坪	150	96	40	クロ	クロ	圓輪ヘラ	SX1973 底部手持ちハラケズリ裏面アラボリと結合
35	灰陶器	壺	166	116	46	クロ	クロ	圓輪ヘラ	SX1917~1920 底面切跡へラケズリSX2173と結合
36	灰陶器	内面鏡	194			クロ	クロ		SX1973 内影の透ししへ書きで底の比較O-12と結合
37	灰陶器	壺	116	38	38	クロ	クロ		SPP225
38	土師器	壺				ナゾ			SPP2082
39	土師器	壺				ナゾ			SPP1937
40	土師器	壺				ハケメ			SP1960
41	土師器	壺				ハケメ			SP1960 二次加熱SX2084と結合
42	灰陶器	坪	62			クロ	クロ	圓輪ヘラ	SF2056 底部墨字字體不明
43	灰陶器	壺	82	34	17	クロ	クロ	圓輪ヘラ	SF2107 墨147m(SK210)と結合
44	黑色土器	坪	146	70	42	クロナメ	クロミガキ	圓輪ヘラ	SF64 内面黒色熟成底面切跡へラケズリ
45	かくわい	盤	82	34	17	クロ	クロ	圓輪ヘラ	M-8
46	土師器	壺							P-5 二次加熱
47	土師器	壺	96						O-30 SF15木葉底二次加熱
48	土師器	壺	56			ケヅリ			D-13 木葉底二次加熱
49	土師器	壺	82						N-30 木葉底墨字字體底面切跡二次加熱
50	黑色土器	坪	168	76	65	クロケズリ	クロミガキ	圓輪ヘラ	O-11 内面黒色熟成底面切跡へラケズリ
51	灰陶器	坪	136			クロ	クロ		O-10 底部墨字字體平滑
52	灰陶器	高台付坪	125			クロ	クロ	圓輪ヘラ	D-11 底面切跡へラケズリ
53	黑色土器	坪	129	66	35	ミガキケズリ	ミガキ		N-30 内面土器
54	黑色土器	坪	183			クロケズリ	クロ		N-17 内面土器
55	灰陶器	坪	138	64	38	クロケズリ	クロ	圓輪ヘラ	M-13 底面切跡へラケズリ
56	灰陶器	坪	176			クロケズリ	クロ		N-30 底ね焼き跡
57	灰陶器	高台付坪	144	84	49	クロケズリ	クロ	圓輪ヘラ	Q-10 底面切跡へラケズリ
58	灰陶器	壺	146	106	48	クロケズリ	クロ	圓輪ヘラ	N-11 底面切跡へラケズリ
59	土師器	壺							N-30 脚筋状突
60	土師器	壺				ハケメ			
61	灰陶器	内面鏡	166			クロ			I-14 方孔の透ししへ書き及び下部に1条の穴開
62	黑色土器	坪	160	66	60	クロナメ	ミガキ		南西アラボリ 内面黒色熟成
63	黑色土器	坪	142	42	29	ケヅリ			南西アラボリ 内面黒色熟成
64	灰陶器	坪	162	62	28	坪8			南西アラボリ 内面土器
65	灰陶器	坪	150	64	67	ケヅリ	ミガキ		南西アラボリ 内面黒色熟成輪郭
66	土師器	壺	168			クロケズリ	ミガキ		南アラボリ 内面黒色熟成
67	土師器	壺				ハケメ			東アラボリ 内面黒色熟成
68	灰陶器	坪	148	93	33	クロ	クロ	圓輪ヘラ	南アラボリ 底面切跡へラケズリ
69	灰陶器	坪	118	72	53	クロケズリ	クロ	圓輪ヘラ	南アラボリ 二次加熱
70	灰陶器	坪	147	76	42	クロ	クロ	圓輪ヘラ	南アラボリ 底面切跡へラケズリ
71	灰陶器	坪	148	85	35	クロ	クロ	圓輪ヘラ	南アラボリ 底面切跡へラケズリ
72	灰陶器	坪	94			クロ	クロ	圓輪ヘラ	東アラボリ 底面墨書字體不明
73	灰陶器	坪	146	100	41	クロケズリ	クロ	圓輪ヘラ	南アラボリ 底面墨書字體不明
74	灰陶器	坪	142	89	36.5	クロ	クロ	圓輪ヘラ	南アラボリ 底面切跡へラケズリ
75	灰陶器	壺	192			クロケズリ	クロ	圓輪ヘラ	東南アラボリ
76	灰陶器	壺	154	25		クロ	クロ		東中アラボリ 底ね焼き跡
77	灰陶器	壺	191	41		クロケズリ	ミガキ		南アラボリ
78	灰陶器	壺				ミガキ			東アラボリ
79	灰陶器	壺				ハケメ			東アラボリ 底面切跡へラケズリ
80	灰陶器	壺				ハケメ			東アラボリ 底面切跡へラケズリ
81	灰陶器	壺	114			クロケズリ	ミガキ		東中アラボリ 底被り
82	灰陶器	壺	218			クロケタキ	ミガキ		SD1258 RP6底被り
83	黑色土器	坪	132	109	40	クロケズリ	クロミガキ	圓輪ヘラ	XO 内面黒色熟成底面切跡へラケズリ
84	灰陶器	壺				クロ			脚筋状突
85	黑色土器	坪	130	92	39	クロケズリ	ミガキ	圓輪ヘラ	XO 内面黒色熟成底面切跡へラケズリ
86	石製品	不明	114	48	36	クロ	クロ	圓輪ヘラ	SG1.2
87	石製品	不明	651	655	48				脚筋状突
88	石製品	砾石	長76	幅35	厚6				南アラボリ
89	石製品	砾石	850	650	70				南アラボリ

VI まとめ

今回の調査は、国道121号(館山②)道路改良工事に先立つ緊急発掘調査である。推定遺跡面積のうち、9,800m²を調査対象とした。検出された遺構は、竪穴住居跡19棟、掘立柱建物跡9棟、井戸跡2基、溝跡、土壤、河川跡、道路遺構など総計約2,500基以上である。

出土した遺物は、土師器、黒色土器、須恵器など総計約23,000点以上、整理箱53箱である。

遺構・遺物は、調査区内のほぼ全域に分布している。特に河川跡の右岸(東側)の自然堤防を中心とした地域に竪穴住居跡が多く、さらにその南東地域に掘立柱建物跡が分布する。調査区のさらに東側に遺跡の中心が存在する可能性があり、遺跡範囲も東側と南側に伸びる様相が見られる。

調査区西側で検出された河川跡は、鬼面川の旧河道と考えられ恒常にかなりの水量を保持し、当時の水上交通路として利用されたものと思われる。水駅の存在も視野に入れなければならない。また、幾たびか大規模な洪水を引き起こし周辺の地形を変えたものと推測される。

道路遺構は、調査区のほぼ中央を真北方向に直線的に伸びている。道路幅は5m内外を測る。明治初期作成の地籍図や昭和40年代後半撮影の空中写真の観察により、検出された道路遺構の延長上に直線的な水路や畦が確認され、東側には条里方格地割の痕跡と考えられるものが見られる。また、大道端東・西の小字の存在も道路の存在を暗示する。郡家間を結ぶ伝路の可能性が考えられる。

出土した遺物で特徴的なものは、栗圓式の範疇に属すると考えられる土師器甕・黒色土器A類壺の存在である。7世紀後半から8世紀初頭とされる遺物は置賜地方のみならず県内でも検出例が極めて少ない。当該時期の土器様相を解明する上で貴重な資料となるものである。また、北陸系とされる丸底叩き出し技法の長胴甕や製塙土器や、福島県郡山市周辺で出土する底部から体部にかけて、回転ヘラケズリを施される黒色土器A類壺がまとまって出土している。これら地域と置賜地方の人的交流のみならず、政治的な結びつきが考えられる。

さらに、須恵器円面鏡が10個体出土したことが特筆される。山形県内の20%を占め最多の出土である。中空円面鏡が2点含まれるが、手付有孔中空円面鏡(越型鏡)は日本初出であり、他方、壺皿型中空円面鏡も東北では初出となるものである。他は圓脚円面鏡であるが口径200mmを超える大型品を含め、7世紀前半から8世紀後半に収まる。類例は大阪府陶邑や平城京など畿内ばかりでなく、秋田城跡や仙台市郡山遺跡などに求めることが出来る。使用した官人層の出自や流通について今後検討が必要になる。

円面鏡がこれほどまとまって出土することは、西町田下遺跡の性格は官衙的様相が強いということを示している。検出された遺構の検討からは「郡衙」と断定することは若干無理があり、今のところ官衙関連施設、例えば郡司や官人の居住施設あるいは道路遺構に関連する駅家ないし水駅などの可能性があるとしたい。並行する周辺遺跡の資料の蓄積により、明確にしていかなければならない。

山形県内出土円面硯について

今時調査において、10個体の円面硯が出土した。山形県内において円面硯がこれほどまとまって出土したのは西町田下遺跡が初めてである。その意義を考察するために必要な円面硯の基本的属性と県内出土例について、以下に概述する。

(1)概説と研究史

円面硯は中国で発明された文房具である。日本の円面硯は古代中国に源流を求めることができる。5世紀頃、中国ないし朝鮮半島を経由して伝來したと考えられる。隋・唐時代に隆盛を極めた陶硯の形式である円面硯が我が国にもたらされ、基本形となったと思われる。

律令制の浸透とともに文字の使用が盛んとなり円面硯も全國的に普及していった。6世紀末から7世紀初頭頃には大阪府陶邑窯跡群や京都府隼上り窯跡で円面硯が生産され官衙や寺院に供給されている。「刀筆の吏」といわれるよう、木簡・筆・刀子・墨そして円面硯が官吏の必需品となり、律令政治を支えていたのである。官衙跡からの出土が多いことがそれを裏付けている。円面硯などの硯が出土する遺跡ということは、これら硯を日常的に使用していた官吏が存在していたことを示している。

考古学的な見地からの陶硯研究は、昭和19年の内藤政恒氏による「本邦古硯考」から始まる。その後出土資料が増大するに伴い、檜崎彰一氏の「古代陶硯に関する一考察」、「日本古代の陶硯について」、石井則孝氏の「日本古代文房具史の一覧」などの研究により、形式分類や編年等が示されている。ついで吉田恵二氏の「日本古代陶硯の特質と系譜」や、杉本宏氏の「飛鳥時代初期の陶硯」などがある。昭和58年には奈良国立文化財研究所により「陶硯関係文献目録」がまとめられている。また、横田賢次郎氏が「福岡県内出土の硯について」で、太宰府を中心とした福岡県内出土陶硯の分類と編年を試みている。最近では、平成7年大阪府立近つ飛鳥博物館が秋季特別展「古代人名録」で、円面硯のみならず陶硯全体を含めた編年をまとめている。

山形県内においては、昭和47年、伊藤忍氏の「山形県内出土の陶硯」により集成・分類が行われている。また、村山正市氏は昭和63年の「山形県における奈良・平安時代の陶硯をめぐって」において、山形県内出土陶硯の分類と編年を試みている。しかしながらこれらの研究の中心となるものは、風字硯と転用硯であり、円面硯に至っては数点に過ぎなかった。陶硯自体の出土する遺跡も限られていたことが要因となっており致し方のないことであった。1980年代後半から大規模開発の増大により、山形県内でも陶硯の発掘例が増加している。ほぼ全県的に出土しているが、その傾向を概観すると、庄内地方では、圃場整備など大規模に発掘調査された遺跡が多い鮭海地方に出土が集中している。特に城輪柵跡を中心とした北部で風字硯が数多く出土し、形象硯である鳥形硯も、城輪柵跡で1点確認されている。しかし、鮭海地方南部では、風字硯に混じり円面硯が出土しており、様相を異にしている。内陸では、置賜地方に集中しており、円面硯の出土例も多い傾向がある。

(2)円面硯の概念

出土する円面硯の分類については前述諸氏の論考を参照しなければならないが、用語及び基

準等について統一されていないのが現状である。したがって、本報告書では奈良国立文化財研究所の「陶器関係文献目録」による分類に概ね従うこととした。それによると円面覗は、覗面が円形であって陸が中央にあり、その周囲を海を取り巻いた形態をとる一群となっている。また、陸には平面型・凸型・凹型・山型がある。さらに、内堤・外堤の有無や圓脚部の形態等により細分されている。県内で出土した円面覗を以下に分類した。

A、圓脚円面覗……輪状の圓脚を有する一群で、圓脚に「透かし」が穿たれているものと無いものがある。また、中には圓脚部が著しく低い一群がある。

B、無脚円面覗……圓脚部のない円面覗。

C、中空円面覗……内部が中空となっている一群である。これには壺や皿、高台付壺等の口縁部上面を覗面で遮蔽した「壺皿型」と、把手付中空円面覗で、堤瓶を横にして体部片面を覗面としたような「堤瓶型」がある。

なお、三脚ないしそれ以上の獸脚が付く多脚円面覗や蹄脚円面覗、亀首形把手付中空円面覗等は、県内では今のところ未検出である。

以下、出土遺跡毎に概観していくことにする。

(3) 山形県内出土円面覗の概要

1. 俵田遺跡

鮫島郡八幡町に所在する。堅穴住居跡1棟、掘立柱建物跡8棟、矢板列などの他に、祭祀遺構がそのままの状態で出土し、人面描画土器をはじめ人形・刀形・馬形等の木製品が出土している。

円面覗(53-1)は、第1次調査で出土したもので、圓脚円面覗である。口径12.5cm、底径16cm、器高6cmを測り、内堤、外堤を有する。覗面形態は平面型である。圓脚部に縦長方形の透かしを有し、範描きで圓脚部上下に巡る横位沈線とそれに挟まれた縦位沈線が巡る。8世紀前半と考えたい。

2. 生石2遺跡

酒田市生石に所在する。北方約5kmに城輪柵跡がある。板材列に囲まれ計画的に配置された掘立柱建物跡群が検出されている。

円面覗は6個体出土しており、すべて圓脚円面覗である。1点(53-2)は、口径14.6cmを測り、外堤のみを有する。覗面形態は山型である。圓脚部に縦長方形の透かしを有し、範描きで圓脚部上部に横位沈線が巡り、その上部に菱形沈線文が巡る。もう1点(53-3)は、低い内堤を有し、外堤は剥離している。覗面形態は平面型である。圓脚部は欠損しており不明であるが、圓脚部肩部に範描きで横位沈線が巡りその上部に格子沈線文が巡る。他は小破片であるが、圓脚部に縦長方形の透かしを有し範描きで斜線と横位及び縦位の沈線があるもの(53-4)、圓脚部に円孔の透かしを有し範描きの縦位沈線が巡るもの(53-5)、圓脚部に縦長方形の透かしを有し範描きの斜格子沈線文が巡るもの(53-6)、圓脚部に範描きの木葉状沈線文が巡るもの(53-7)がある。8世紀中頃から後半と考えたい。

3. 南興野遺跡

酒田市南興野に所在する。北北東約4kmに城輪柵跡が位置する。掘立柱建物跡10棟、井戸跡4基等が検出された。

円面鏡(53-8)は、包含層Ⅲ層からの出土で圈脚円面鏡である。口径8.5cm、底径12cm、器高3.9cmを測り、外堤のみを有する。鏡面形態は凸型で、平坦な陸部の周囲をやや狭い海が巡っている。圈脚部には透かしが無く、篦描きの連続山形沈線文が3条巡っている。8世紀後半と考えられる。

4. 山櫛5遺跡

鮫海郡平田町山櫛地内に所在する。酒田東部丘陵に点在する窯跡群の1つである。半地下式登窯1基などが検出された。

円面鏡は2個体で、いずれも圈脚円面鏡である。灰原からの出土である。1点(53-9)は、内堤と外堤(剥離)を有し、口径12cm、底径15.5cm、器高5.2cmを測る。鏡面形態は平面型である。圈脚部には横長方形と方形の透かしを2対有し、篦描きの木葉状沈線文がある。もう1点(53-10)は、圈脚部片のみで、鏡面形態は不明である。底径13.5cmを測る。圈脚部に逆五角形の透かしを有し、篦描きの木葉状沈線文がある。2点とも8世紀中葉と考えられる。

5. 桜林興野遺跡

鮫海郡平田町桜林興野に所在する。東約2kmに山櫛5遺跡、北東約1.5kmに生石2遺跡がある。隣接して郡山という集落があり、郡山付近を鮫海郡衙擬定地とする説もある。

掘立柱建物跡や土壙などが検出されている。

円面鏡は3個体出土しているが、いずれも圈脚円面鏡の破片である。1点目(54-1)は、圈脚部下部に篦描きの横位沈線1条が巡りその上部に縦位沈線が巡っている。透かしの有無は不明である。2点目(54-2)は、圈脚部下部に篦描きの横位沈線が2条巡る。透かしの有無は不明である。3点目(54-3ABC)は、圈脚部下部に篦描きの横位沈線が3条巡り、縦長方形と菱形の透かしを有する。

6. 荒沢窯跡

鶴岡市荒沢に所在する。半地下式登窯跡数基が検出されている。

円面鏡は、立正大学が調査した際、出土したと伝えられているが、詳細は不明である。

7. 不動木遺跡

東村山郡河北町不動木に所在する。竪穴住居跡8棟、掘立柱建物跡2棟等が検出されている。

円面鏡は1個体(54-4)で、圈脚円面鏡である。口径10.6cm、底径18.4cm、器高5.3cmを測る。鏡面形態は平面型で、外堤のみを有する。圈脚部には縦長方形の透かしを有し、透かし間に五角形沈線文2個が巡る。圈脚部下部に1条の横位沈線が巡っている。8世紀中葉と考えられる。

8. 平野山古窯跡12地点

寒河江市柴橋に所在する。一帯には窯跡が多数点在している。斜面に沿って数基の半地下式登窯跡と灰原が検出されている。

円面鏡は6個体出土している。すべて圓脚円面鏡である。1点(54-5)は、口径14cm、底径17.8cm、器高6.4cmを測る。鏡面形態は平面型で、外堤のみを有する。圓脚部には縦不整方形の透かしが6単位穿たれると推定される。圓脚部に範描きで縦位沈線が巡っている。鏡面には金属器によると見られる削り痕が明瞭に残る。造りはやや粗雑である。8世紀後半代と考えられる。もう1点(54-6)は、口径8.4cmで、内堤と外堤を有す。圓脚部は破損している。鏡面形態は平面型である。他の4点は、いずれも鏡面部の破片である。うち1点は外堤のみを有するものであるが、他は内堤と外堤を有する。鏡面形態はすべて平面型である。1点のみ、圓脚部に範描きの縦位沈線が確認できる。

9. 高瀬山遺跡Ⅰ期

寒河江市高瀬山に所在する。旧石器時代から中世までの遺構・遺物が数多く出土する大規模な遺跡である。古代長岡郷の中心集落という説もある。

円面鏡は1点(54-7)で、圓脚円面鏡である。SK1015から出土している。口径11.4cm、底径13cm、器高5.3cmを測り、内堤と外堤を有す。鏡面形態は平面型で、かなり磨滅している。圓脚部には直径7mmの円孔3個が4単位穿たれると推定される。造りは大変丁寧である。8世紀前半と考えられる。

10. 高瀬山遺跡市道部分

前述の高瀬山遺跡を横切る市道部分である。寒河江市教育委員会により発掘調査が実施された。

円面鏡は1点(54-8)で、圓脚円面鏡である。SD1からの出土である。口径15cmを測り、内堤と外堤を有す。鏡面形態は平面型で、使用痕はほとんどない。圓脚部には、直径11mmの円孔3個が三角形に穿たれ、4単位巡ると推定される。プロフィールが前述の高瀬山遺跡Ⅰ期出土円面鏡(54-7)に極めて似ることから、同一工人によるもの可能性も考えられる。8世紀前半と考えられる。

11. 久保手窯跡

上山市久保手に所在する。上山市教育委員会により発掘調査が実施された。重複する半地下式登窯跡2基と土壙1基などが検出されている。1号窯跡が廃棄された後、2号窯跡へ移行している。

円面鏡は2号窯跡からの出土で、2点の小破片であり詳細は不明である。報文では2号窯跡を9世紀初頭としている。

12. 上野山古墳群

南陽市上野字狸沢に所在する。南陽市教育委員会により発掘調査が実施された。一帯には古墳群が分布している。弥生時代から古墳時代終末期の遺物・遺構が検出し、横穴式石室1基も遺存している。

円面鏡(54-9)は、中空円面鏡である。口径23cm、底径23cm、器高6.6cmを測る。低い外堤を有し、鏡面の周囲をごく浅い海部が巡る。鏡面形態は凸型である。体部上下端部及び底部端部に柳描波状文が巡る。体部中央部に、中空の把手が剥離した痕跡を残す。堤瓶を横に

したような形態を呈する把手付中空円面鏡である。東北地方では、福島県鳥打沢A遺跡に類例があるのみで、2例目となる。大型の優品である。7世紀中葉の可能性がある。

13. 沢田遺跡

南陽市島賀に所在する。南陽市教育委員会により発掘調査が実施された。置賜郡衙の擬定地とされている地域でもある。

円面鏡(54-10)は、無脚円面鏡である。口径9.5cm、底径9cm、器高1.6cmを測る。鏡面の周囲を低い海部が巡り、陸部中央部が僅かに窪む。鏡面形態は凸型である。群馬県上渕名遺跡出土のものに類似する。

14. 長岡山遺跡

南陽市長岡に所在する。南陽市教育委員会により発掘調査が実施された。

円面鏡(54-11)は、圜脚円面鏡である。口径は9.6cmを測り、外堤のみを有し突帯がやや内湾して巡っている。圜脚部は破損しているが、やや開く形と推測される。

15. 味噌根窯跡

東置賜郡高畠町大字安久津に所在する。山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館により発掘調査が実施された。2基の窯跡が検出されている。周辺には、安久津古墳群などの古墳群が点在し、南1.5kmには小郡山の集落があり、置賜郡衙の擬定地とされている。

円面鏡は2点有り、2号窯跡から出土している。1点(54-12)は圜脚円面鏡で、圜脚部の低い低脚円面鏡といえるものである。口径13cm、底径14.5cm、器高3.6cmを測り、外堤のみを有し、突帯が巡る。鏡面形態は、陸部中央が高く周囲が低くなり海部を形成する山型である。岐阜県長者原遺跡、奈良県藤原京出土のものに類似する。8世紀前半と考えられる。もう1点(54-13)は、圜脚円面鏡である。口径10cmで内堤と外堤を有し、鏡面形態は凹型である。圜脚部は破損している。

16. 大在家遺跡

東置賜郡高畠町大町に所在する。高畠町教育委員会により発掘調査が実施された。近くには置賜郡衙擬定地である小郡山の集落がある。

円面鏡は3個体出土している。すべて圜脚円面鏡である。1点(54-14)は、内堤と外堤を有し、口径9.8cmを測る。鏡面形態は凸型である。圜脚部端部が欠損しており、底径・器高は不明である。圜脚部には縦長方形の透かしを有する。範描きで圜脚部上下に巡る横位沈線と格子状沈線文が巡る。7世紀末の可能性がある。もう1点(54-15)は、外堤のみを有し、突帯が周囲を巡っている。口径9cm、底径13.4cm、器高4.9cmを測る。鏡面形態は平面型であるが、鏡面端部に長径2.8cm、短径2.4cm、深さ1.2cmの墨溜状凹部が付属している。圜脚部には縦長方形の透かしを有し、透かし間に範描きで縦沈線文2条巡っている。類例は、茨城県鹿の子C遺跡、山形県高畠町合津窯跡等がある。組み合わせ鏡といえるものである。8世紀前半と考えられる。もう1点(54-16)は、圜脚部の破片である。圜脚部に範描きの縦位沈線が見られる。

17. 合津窯跡

東置賀郡高畠町和田に所在する。高畠町教育委員会により発掘調査が実施された。須恵器坏、蓋等を焼成した窯跡が検出された。

円面覗は2点有り、すべて圜脚円面覗である。1点は、口径約17cmで、内堤と外堤を有し大型品である。硯面形態は平面型である。圜脚部には、簞描きで三条の連続山形沈線文が巡る。また、圜脚部上部に墨溜状凹部が剥離した痕跡が見られる。もう1点は、口径約17cmを測り、内堤と外堤を有す大型品である。硯面形態は平面型である。圜脚部には、縦長方形の透かし3個と簞描きの縱位沈線5本が組み合わされたものが4単位巡る。やや古い形態と思われ、7世紀末の可能性もある。

18. 笹原遺跡

米沢市中田町に所在する。米沢市教育委員会とまんぎり会により発掘調査が実施された。竪穴住居跡や溝跡などが検出されている。

円面覗は3個体出土している。1点(54-17)は、無脚円面覗である。ST 8から出土した。口径9.5cm、器高1.8cmを測り、内堤と外堤(剥離)を有する。硯面形態は平面型である。もう1点(55-1)は、圜脚円面覗である。SD 3で出土した。口径13.8cm、底径22cm、器高7cmを測り、内堤と外堤(剥離)を有する。圜脚部には直径1.7mm程の円孔が巡り、円孔間に簞描きの木葉状沈線文が配される。8世紀後半と考えられる。もう1点は、小破片のために詳細は不明である。

19. 大浦B遺跡

米沢市中田町大浦に所在する。米沢市教育委員会が発掘調査を実施した。計画的に配置された掘立柱建物跡や溝跡・土壙などが検出された。「延暦23年」の銘がある漆紙文書が出土している。置賀郡衙擬定地とされている。

円面覗は2個体出土している。すべて圜脚円面覗である。1点(55-2)は、圜脚部片の出土である。DY146土壙から出土した。底径17.5cmを測る。圜脚部には、縦長方形の透かしを有し、透かしの間に簞描きで縱位沈線文が1本ある。報文では8世紀末としている。もう1点は、圜脚部に円孔の透かしを有するものであるが、小破片のため詳細は不明である。

20. 西町田下遺跡

米沢市塩井町塩野に所在する。竪穴住居跡19棟、掘立柱建物跡9棟、河川跡、溝跡、井戸跡2基など多数の遺構を検出した。近くには置賀郡衙擬定地とされる大浦B遺跡がある。

円面覗は10個体出土している。中空円面覗と圜脚円面覗である。

中空円面覗は2点ある。1点(55-3)は、SK2079拡張トレンチから出土した。口径11.8cm、底径8.6cm、器高4.4cmを測り、内堤と外堤を有する。硯面形態は平面型である。底を扁平にして、口縁部を硯面で遮蔽した形態をしている。体部肩部・中央部に櫛描波状文が巡る。体部肩部に直径15mmの円孔が1つ穿たれている。体部中央に摘みが1つ有り5mmの小孔が穿たれている。底部は手持ち簞削りされている。かなり丁寧な造りである。坏皿型覗の一類型とも考えられるが、独自の形態と考えたい。手付有孔中空円面覗(底型覗)とする。7世紀中葉ないし前半に遡ると考えられる。もう1点(55-4)はSK2079などから出土した。口径

15.5cm、底径10.5cm、器高6.9cmを測り、内堤と外堤を有する。硯面形態は凹型で、使用痕が顕著である。高台付坏の口縁部に硯面を貼ることにより遮蔽し、内部を中空にする形態をしている。圈脚部には不整方形の透かしが4単位穿たれる。体部下半は回転窓削りされている。坏皿型硯の一類型である。7世紀末ないし8世紀初頭と考えられる。

圈脚円面硯は8点ある。(55-5)は、SK2079から出土した。口径20cmを測り、内堤と外堤を有し、突帶が巡る。硯面形態は凸型である。使用痕が顕著である。圈脚部は破損しているが、やや開く形態と考えられる。窓描きの縦位沈線文が巡る。造りの丁寧な大型品である。大阪陶邑KM51や平城京、仙台市郡山遺跡などに類例がある。7世紀末から8世紀初頭と考えられる。(55-6)は、SE1733から出土した。口径10.8cmを測り、内堤と外堤を有する。硯面形態は凸型である。使用痕が顕著である。圈脚部は破損しているが、窓描きの縦位沈線が巡る。(55-7)は、SX1850から出土した。口径19.5cm、底径21.5cm、器高7cmを測り、内堤と外堤を有する。硯面形態は凸型である。圈脚部には方形の透かしが4単位穿たれている。大型の優品である。大阪府陶邑TG64出土品に似、7世紀前半の可能性がある。(55-8)は、SX2084から出土した。口径8.5cm、底径13.3cm、器高4.2cmを測り、外堤のみを有する。硯面形態は平面型である。圈脚部には縦横円形の透かしが5単位穿たれている。窓描きで圈脚部上下に巡る横位沈線と、それに挟まれた縦位沈線が巡る。8世紀中葉と考えられる。(55-9)は、SX1973などから出土した。口径19.4cmを測り、外堤のみを有する。硯面形態は凸型である。圈脚部は破損しているが、円孔が穿たれ、窓描きで縦位沈線が巡る。(55-10)は、圈脚部の小破片である。窓描きの縦位沈線がある。(55-11)は、圈脚部の破片である。底径21.2cmを測る。(55-12)は、圈脚部の破片である。底径16.6cmを測る。縦長方形の透かしの痕跡がある。窓描きで圈脚部下部に巡る2条の横位沈線と縦位沈線が巡る。

なお、高畠町屋代の亀ヶ森において圈脚円面硯片が採取されているといわれるが、確認することができず詳細は不明であったので、集成からは除外した。

山形県内出土円面硯について概略を述べた。実見できたものは3分の2程であり、他は報告書や写真などの観察によるものである。したがって記述や記録に誤りが多々ある場合があり、あらかじめお断りしておく。

県内で円面硯を出土した遺跡は、前述したように20遺跡であり、そのうち集落跡が半数以上の11遺跡を占め、次いで生産地である窯跡が6遺跡となり、いわゆる官衙・官衙関連遺跡からの出土は少ない傾向が窺える。しかし、集落跡から出土する円面硯が多数を占めることが、8世紀代の識字層の広がりを物語るものとはいえない。ここで問題となるのは、円面硯が出土する集落跡の性格付けである。通常、遺構や遺物などからはっきりと官衙とされる場合を除き、集落跡とされてきた場合が多い。したがって今後は、円面硯を出土する遺跡、特に集落跡の歴史的性質の位置づけが必要になってくる。しかし、従来は土器研究に重きが置かれ円面硯は特殊稀少遺物として、県内では研究が進まなかったのが現状である。今後、大規模な発掘・出土遺物の見直し等によって円面硯の出土数がさらに増加し、集成が進み分析が行われること

により、それらの課題を明らかにしなければならない。

県内で出土する円面鏡は、概ね7世紀中葉から9世紀初頭と考えられる。これは他県における状況とほぼ一致している。しかし、中空円面鏡など一部に7世紀前半に遡る可能性が伺えるものもあり、今後分析を進め検討しなければならない。

円面鏡が出土する遺跡の分布については前述しているが、出土遺跡を地図にプロットしていく作業を進めていくうちに特徴的な事柄が浮かび上がってきた。それは、山形県内において奈良時代の都衙とされる地点と円面鏡出土遺跡とが強い相関関係にあることである。後掲の山形県内円面鏡出土遺跡分布図を見ると、特に置賜地方と飽海南部地方にその傾向が強くあらわれていることがわかる。また、出土円面鏡は、置賜地方のものが概ね古く7世紀後半から8世紀前半、飽海南部地方のものがやや新しく8世紀前半から後半以降という様相が見られる。したがって置賜地方においては、日本書紀持統3年(689年)優嗜曇郡城養蝦夷脂利古云々の記述のある優嗜曇郡衙あるいは優嗜曇柵との関連性を視野に入れる必要があり、さらに、置賜郡衙が高畠町小郡山から南陽市郡山、米沢市大浦B、川西町道伝と移転したという説に対し、移転の時期や移転の有無等について再検討を求めることがある可能性を持つ。また、庄内地方においては、飽海郡衙との関連が考えられてくる。すなわち飽海郡衙は、円面鏡が集中する平田町桜林興野遺跡から酒田市生石2遺跡を中心とする地域の可能性が指摘されるのである。城輪柵跡からは前述したように、鳥形の形象鏡1点(頭部)と風字鏡と転用鏡のみの出土であり、円面鏡の報告は皆無である。

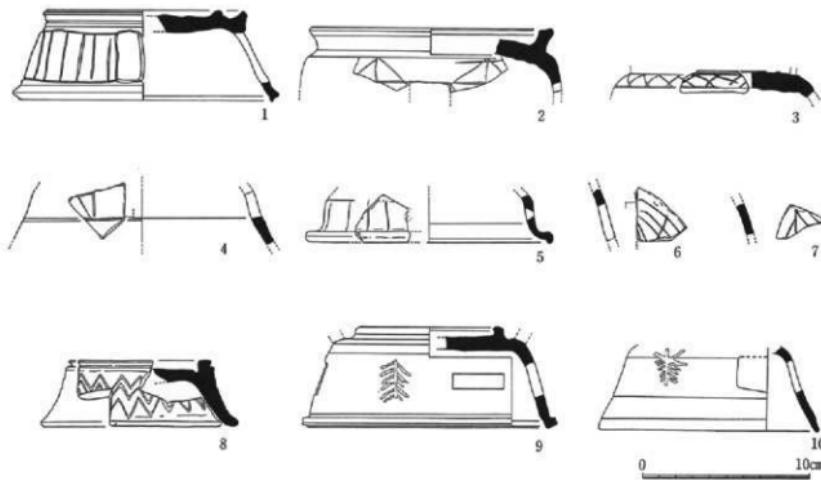
さらに初期出羽郡衙あるいは出羽柵との関連では、唯一円面鏡が出土する鶴岡市荒沢窯跡が重要になる。おそらく初期出羽郡衙あるいは出羽柵は、從来唱えられていた藤島町平形遺跡付近ではなく、むしろ荒沢窯跡に比較的近い平野部、あえて言えば鶴岡市大山近辺に存在する可能性が強いものと考えることができる。とすれば、8世紀中葉頃と考えられる酸化焰焼成の土器(秋田城出土の赤褐色土器に先行するもの)の环類や須恵器縫燒写しである土師器(内面黒色処理)の積塊などがまとまって出土している鶴岡市北西部に所在する西谷地遺跡が注目されるのである。ここでは「左」と墨書きされた土器が64点出土しており、墨書き土器全体の半数を超える。秋田城では「佐」と墨書きされた土器が見られ、「すけ」と読んでいる。仮に、西谷地遺跡出土の「左」が「すけ」と読むことが可能であれば、初期出羽郡衙あるいは出羽柵が鶴岡市大山近辺に所在するという考え方の1つの傍証としてもできよう。さらに、西谷地遺跡に隣接する五百刈遺跡からは平成5年の調査の際、「岐」銘の墨書き土器が2点出土している。都岐沙羅柵に何らかの関連があることも考えることができるので、遺物は9世紀代に属するものである。しかしながら、山形県内では8世紀の遺跡の調査例が極めて少ないので現状である。特に庄内地方南半では、鶴岡市南西部に所在する月記遺跡の河川跡下層から出土した回転ヘラ切りの須恵器環の一群が唯一である。都岐沙羅柵・出羽郡衙・出羽柵・出羽國府など、律令制の進展に伴い日本書紀などの史料に記載される、官衙施設や領域などに関し未だ定説はないのが現状である。平成8年度から鶴岡市教育委員会により大規模な発掘調査が進められている、大山地区南部に広がる山田遺跡が注目される。今後資料の蓄積がなされることにより、当該期の出羽南

半の様相が明らかにされることに期待したい。

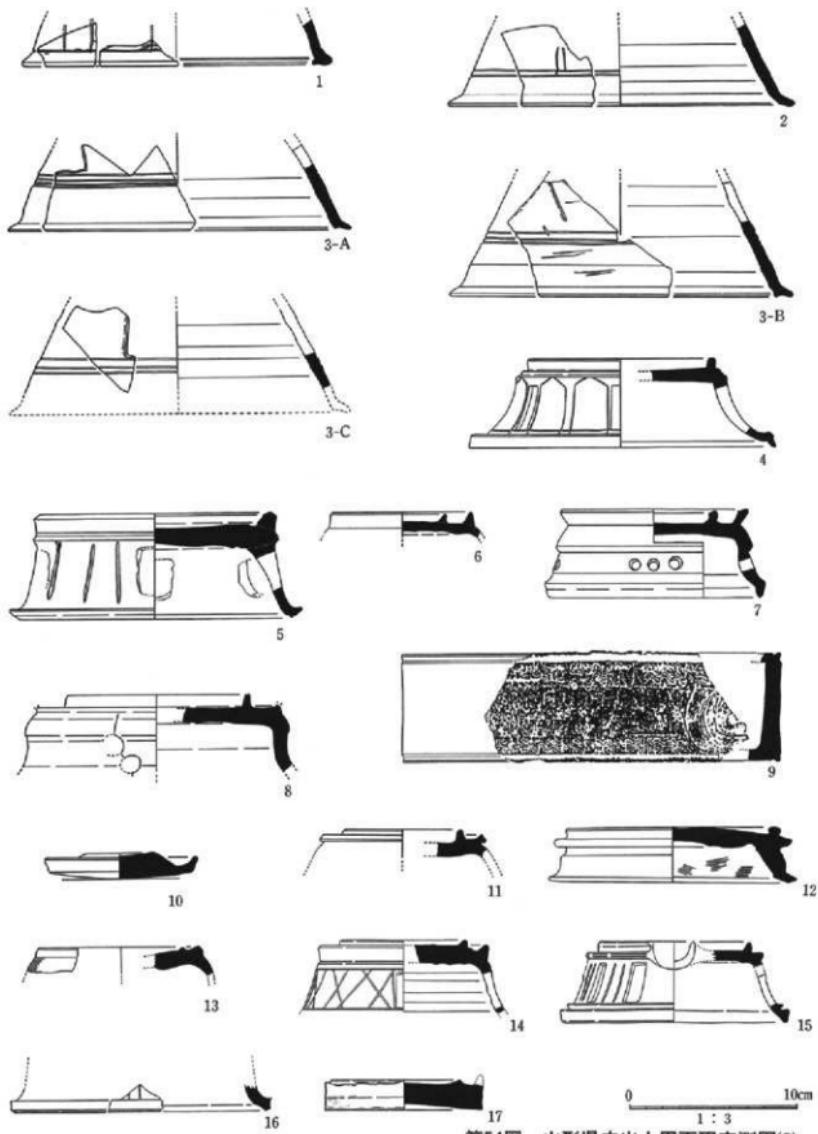
また、円面硯を出土する窯跡と他の円面硯出土遺跡との相関も強いものがあると考えられる。生産施設と消費地という関係のみならず、官窯と官衙および官衙関連施設、あるいは窯跡と国分寺などの寺院という結びつきも視野に入れなければならないのである。円面硯が出土した前述6窯跡の胎土と県内出土円面硯の胎土を詳細に分析し、あわせて県内の窯跡との比較を行うことにより、円面硯生産とその消費の関わりを明らかにすることが必要である。

今回、山形県内出土円面硯について具体的な年代観を与えているのはごく限られた数にとどまってしまった。実見できなかったものや、記録不足によるものであるが、たぶんに勉強不足によるところが大きい。今後、発掘調査の進展により円面硯の出土例が増加することにより、さらに研究が進むことに期待したい。

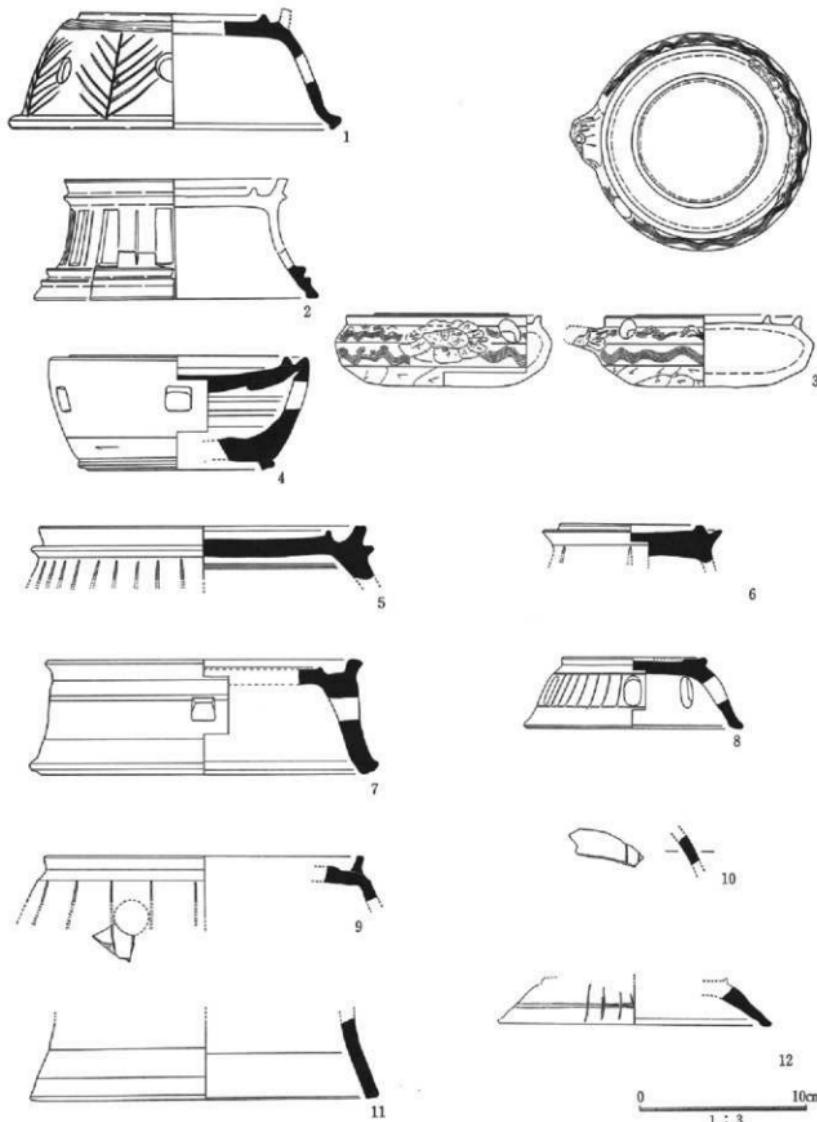
山形県内出土円面硯



第53図 山形県内出土円面硯実測図(1)



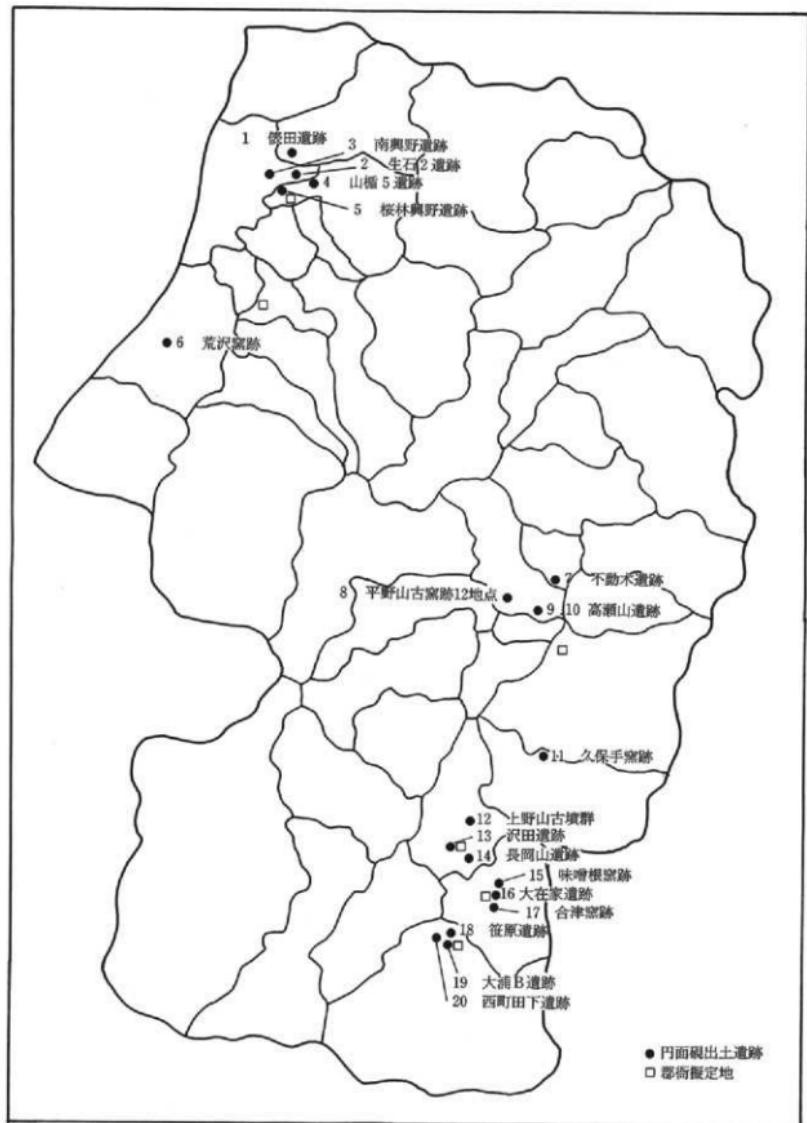
第54図 山形県内出土円面鏡実測図(2)



第55図 山形県内出土円面硯実測図(3)

山形県内出土 円面鏡集成表

No.	出土地點	市町村	種類	銘文	細部記述	1.目	新潟	福島	宮城	山形	福島	宮城	山形
1	仙台城跡	八幡町	無銘鏡	53-1	圓鏡面直鏡、内縁、外縁切欠き、半圓切欠	125	53	16	扇形切欠	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	
			無銘鏡	53-2	圓鏡面直鏡、外縁の内側、山形	146			扇形切欠	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	
			無銘鏡	53-3	圓鏡面直鏡、内縁、外縁(火打)切り	90			扇形切欠	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	
2	生石2号墳	鶴田村	官署銘鏡	53-4	圓鏡面直鏡、半明	146			扇形切欠	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	
			無銘鏡	53-5	圓鏡面直鏡、半明				扇形切欠	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	
			無銘鏡	53-6	圓鏡面直鏡、半明				扇形切欠	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	
3	南陽野古墳群	鶴田村	無銘鏡	53-7	圓鏡面直鏡、外縁の内側、山形	85	39	110	扇形切欠	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	
4	山形5号墳	平田町	無銘鏡	53-8	圓鏡面直鏡、内縁、外縁(火打)切り	85			扇形切欠	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	
			無銘鏡	53-9	圓鏡面直鏡、内縁、外縁(火打)切り	85			扇形切欠	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	
			無銘鏡	53-10	圓鏡面直鏡、半明	100			扇形切欠	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	
5	松林寺跡	平田町	無銘鏡	54-1	圓鏡面直鏡、半明	100			扇形切欠	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	
			無銘鏡	54-2	圓鏡面直鏡、半明	105			扇形切欠	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	
			無銘鏡	54-3	圓鏡面直鏡、半明	107			扇形切欠	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	
6	東洋館跡	鶴岡市	無銘鏡	54-4	圓鏡面直鏡、外縁の内側、山形	106	53	144	扇形切欠	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	
7	不動本尊跡	阿志町	無銘鏡	54-5	圓鏡面直鏡、外縁の内側、山形	106	60	144	扇形切欠	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	
			無銘鏡	54-6	圓鏡面直鏡、外縁の内側、山形	84	53	144	扇形切欠	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	
8	芦野山古墳群12	寒河江町	無銘鏡	54-7	圓鏡面直鏡、内縁、外縁(火打)切り	100			扇形切欠	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	
			無銘鏡	54-8	圓鏡面直鏡、内縁、外縁(火打)切り	105			扇形切欠	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	
9	渡利山古墳群1号	寒河江町	無銘鏡	54-9	圓鏡面直鏡、内縁、外縁(火打)切り	105			扇形切欠	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	
			無銘鏡	54-10	圓鏡面直鏡、内縁、外縁(火打)切り	105			扇形切欠	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	
			無銘鏡	54-11	圓鏡面直鏡、内縁、外縁(火打)切り	105			扇形切欠	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	
10	渡利山古墳群	上山町	無銘鏡	54-12	圓鏡面直鏡、内縁、外縁(火打)切り	114	53	140	扇形切欠	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	
11	大船平古墳群	鶴岡市	無銘鏡	54-13	圓鏡面直鏡、外縁の内側、山形	105			扇形切欠	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	
12	中野山古墳群	鶴岡市	無銘鏡	54-14	中空円筒形鏡、外縁の内側、山形	95	15	60	扇形切欠	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	
13	芦原山古墳群	鶴岡市	無銘鏡	54-15	中空円筒形鏡、外縁の内側、山形	95	15	60	扇形切欠	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	
14	芦原山古墳群	鶴岡市	無銘鏡	54-16	中空円筒形鏡、外縁の内側、山形	95	15	60	扇形切欠	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	
15	柳原山古墳群	鳥取町	無銘鏡	54-17	圓鏡面直鏡、外縁の内側、山形	100			扇形切欠	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	
16	大穴冢古墳	鳥取町	無銘鏡	54-18	圓鏡面直鏡、外縁の内側、山形	90	49	134	扇形切欠	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	
17	今治塚跡	夷隅町	無銘鏡	54-19	圓鏡面直鏡、内縁、外縁(火打)切り	100			扇形切欠	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	
			無銘鏡	54-20	圓鏡面直鏡、内縁、外縁(火打)切り	100			扇形切欠	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	
			無銘鏡	54-21	圓鏡面直鏡、外縁の内側、山形	100			扇形切欠	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	
18	菅原遺跡	米沢市	官署鏡	55-1	圓鏡面直鏡、内縁、外縁(火打)切り	118	70	239	扇形切欠	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	
19	大日山遺跡	米沢市	官署鏡	55-2	圓鏡面直鏡、内縁、外縁(火打)切り	118	44	86	扇形切欠	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	
			官署鏡	55-3	中空円筒形鏡、外縁(火打)切り	118	44	86	扇形切欠	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	
			官署鏡	55-4	中空円筒形鏡、内縁、外縁(火打)切り	115	65	105	扇形切欠	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	
			官署鏡	55-5	圓鏡面直鏡、内縁、外縁(火打)切り	100			扇形切欠	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	
			官署鏡	55-6	圓鏡面直鏡、内縁、外縁(火打)切り	100			扇形切欠	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	
			官署鏡	55-7	圓鏡面直鏡、内縁、外縁(火打)切り	100			扇形切欠	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	
			官署鏡	55-8	圓鏡面直鏡、内縁、外縁(火打)切り	85	42	133	扇形切欠	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	
20	宮代町下草跡	米沢市	官署鏡	55-9	圓鏡面直鏡、内縁の内、山形	104			扇形切欠	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	
			官署鏡	55-10	圓鏡面直鏡、内縁の内、山形	104			扇形切欠	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	
			官署鏡	55-11	圓鏡面直鏡、半明	212	黑	131	扇形切欠	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	
			官署鏡	55-12	圓鏡面直鏡、半明	116			扇形切欠	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	扇形切欠及び鑄造	



第56図 山形県内円面鏡出土遺跡分布図



第57図 遺跡周辺地籍図

参考文献

島内

- 1 手塚 幸也 「佐原」、「米沢市埋蔵文化財調査報告書第7集」1981
- 2 萩谷幸雄 「上谷地C道路沿線古墳群」、「山形県埋蔵文化財調査報告書第106集」1995(以下「山形文報」と略す)
- 3 伊藤祐弘他 「南庭跡・堂ノ下跡跡・原守地跡・高祖跡古所古跡」、「山形県埋蔵文化財センター・免国民安部書類第2集」1994(以下「山形文報」と略す)
- 4 野尻 兼也 「北丘田遺跡・橋本遺跡跡第2次発掘調査報告書」、「山形文報第196集」1996
- 5 萩原俊一他 「宮ノ下遺跡・高麗城跡古所古跡」、「山形文報第202集」1996
- 6 佐藤庄一他 「五亘河遺跡・高麗城跡古所古跡」、「山形文報第30集」1994
- 7 萩原弘也 「西谷地遺跡跡・高麗城跡古所古跡」、「山形文報第12集」1994
- 8 尾形與内他 「西谷地遺跡跡・久我原跡古所古跡」、「山形文報第26集」1995
- 9 洪貴基他 「西谷地遺跡跡第3次発掘調査報告書」、「山形文報第30集」1996
- 10 安部 真也 「生石C道路角原開発古所古跡」、「山形県埋蔵文化財調査報告書第118集」1987

国外

- 11 「山田水谷道跡」、「山田道跡調査会」1977
- 12 平山謙一他 「珍田水谷道跡(草木平安町下平)」、「神戸市埋蔵文化財センター」1994
- 13 工藤哲也 「原道跡」、「台古市文化財調査報告書第43集」、1986
- 14 岩井秀海 「新舊ノババス原道跡調査報告書」、「新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集」、1989
- 15 佐野敏伸 「原江原跡解剖ノ入遺跡」、「西南町文化財調査報告書第7集」、1993
- 16 石本 弘也 「東北横断自衛隊道跡調査報告書第22・祇内遺跡」、「福島県文化財調査報告書第293集」、1993
- 17 木本寛之 「東北幹線開拓道路跡・角原開拓跡古文書V・神内戸跡」、「福島県文化財調査報告書第101集」、1982
- 18 舟田潤也 「「秋田城跡」についての一考察」、「秋田県埋蔵文化財センター・研究記要第1号」、1986
- 19 木村信二他 「郡山遺跡I昭和105年度調査報告」、「仙台市文化財調査報告書第29集」、1981
- 20 木村信二他 「郡山遺跡II昭和106年度調査報告」、「仙台市文化財調査報告書第38集」、1982
- 21 木村信二他 「郡山遺跡IV昭和108年度調査報告」、「仙台市文化財調査報告書第44集」、1986
- 22 木村信二他 「郡山遺跡V昭和109年度調査報告」、「仙台市文化財調査報告書第74集」、1985
- 23 小島秀季他 「北面における城壁」、「北面の古代工芸展」、1989
- 24 石本 弘也 「丸山城から平城へ・福島県におけるロココ入城跡の土石礎」、「歴史としのぶ考古」、1996
- 25 伴田茂伸 「東北地方におけるロココ土石礎の歴史とその背景」、「考古学雑誌第79巻3号」、1994
- 26 木下 真典 「古代に考えるる古代道跡」、「宮川川文庫」1996
- 27 関田雅治 「原生器の革革」、「歴史雑誌」9号、講談社1996
- 28 「宮城県平塚市」、「県政史地誌」、県政史地誌編纂課1995
- 29 「仙台古史跡羽田野2考古資料」、「仙台市」1996

円周観闇原

- 30 手塚 幸也 「匠原」、「米沢市埋蔵文化財調査報告書第7集」、1981
- 31 手塚 幸也 「大字大沼跡跡・高麗城跡古所古跡」、「米沢市埋蔵文化財調査報告書第20集」、1991
- 32 手塚 幸也 「大字・大沼跡跡・高麗城跡古所古跡」、「米沢市埋蔵文化財調査報告書第36集」、1993
- 33 篠原 保也 「西高野跡跡・高麗城跡古所古跡」、「山形文報第14集」、1987
- 34 安部 真也 「生石C道路角原開拓調査報告書」、「山形文報第117集」、1987
- 35 安部 真也 「山城跡4-5番跡・高麗城跡古所古跡」、「山形文報第119集」、1994
- 36 佐藤庄一他 「「仙台遺跡跡第2次発掘調査報告書」、「山形文報第76集」、1984
- 37 名和道信他 「「仙台跡跡・高麗城跡古所古跡」、「山形文報第113集」、1987
- 38 吉岡 駿也 「「仙木道路角原開拓調査報告書」、「山形文報第100集」、1986
- 39 佐舟正信他 「「上山市大字手取跡跡・高麗城跡古所古跡」、「上山市埋蔵文化財調査報告書第3号」、1983
- 40 三輪大治他 「「宮城県仙台市第一号古跡」、「宮城県教育委員会」1987
- 41 「「宮城県仙台第一号古跡」、「宮城県教育委員会」1987
- 42 「多賀城跡・飛行政本郷」、「宮城県教育委員会」1982
- 43 小松正夫他 「「仙台城跡」昭和40年度秋田城跡発掘調査報告」、「秋田市教育委員会」1966
- 44 小松正夫他 「「仙台城跡」昭和41年度秋田城跡発掘調査報告」、「秋田市教育委員会」1967
- 45 小松正夫他 「「仙台城跡」平成2年度秋田城跡発掘調査報告」、「秋田市教育委員会」1990
- 46 小松正夫他 「「仙台城跡」平成3年度秋田城跡発掘調査報告」、「秋田市教育委員会」1991
- 47 村山正市 「「山形城跡」における余糞・平安時代の陶器をめぐって」、「さあべい第14号」、1988
- 48 伊藤 英 「「山形城跡出土の陶器」、「庄内守志」、1972
- 49 鳩崎彰一 「「古代陶器に関する一考察」、孔紀寺手作円窯跡と宝殿窯」、「名古屋大学総合研究資料収集報告」、1965
- 50 鳩崎彰一 「「古代の陶器について」、「日本考古学会第10回企画講演會」、1969
- 51 「「御嶽城跡」文獻目録」、真帆立文化財研究所・御嶽城文化財センター・1963
- 52 石本 宏 「「足島時代視察の文獻」、「考古学雑誌第73卷2号」、1987
- 53 吉田喜二 「「日本古代陶器の特質と系譜」、「關西筑大考古学資料叢書紀要」」、1985
- 54 横山賢次郎 「「福岡県内出土の礎について一分類と編年に関する一試案」、「九州歴史資料館研究論集」9、1983
- 55 「「年縦一」、「朝鮮高麗唐宋文化財調査事業団」、1990
- 56 石井樹孝 「「日本古代文獻具足の一箇例」、「御嶽筑大考古学資料叢書紀要」」、1989
- 57 石井樹孝 「「御嶽一古字」イブリーリー2-2」、「ニース・エニス社」1985
- 58 「「仙台古跡跡・島上上之城跡跡・上城の町田跡」、「輔馬株式会社」、福島県埋蔵文化財調査事業団」、1988
- 59 「「古代人名跡・芋野跡・計帳の世界」、「大阪府立近づかる博物館」平成7年度秋季特別展覧会」1990

報告書抄録

ふりがな	にしまちだしないせきほくつちょうきほうこくしょ
書名	西町田下遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第44集
編集者名	高橋 敏・黒沼幹男
編集機関	財団法人 山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL0236-72-5301
発行年月日	西暦1997年3月31日

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° °'	東経 ° °'	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
西町田下	山形県 米沢市 塩井町 塩野字 西町田下		平成7年 度登録	37度 56分 1秒	140度 6分 47秒	19960508 ~ 19961031	9,800	国道121号 (館山②) 道路改良 事業

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西町田下	集落跡	奈良時代 ~ 平安時代	堅穴住居跡 掘立柱建物跡 溝跡 道路跡 土壤 河川跡	土師器 須恵器 壺・坏 坏・塊 高台付坏 稜塊 壺・壺 蓋 円面硯 黑色土器 壺・坏 高台付坏 稜塊	中空円面硯2個体を 含め10個体の円面硯 が出土した。 7世紀後半から8世 紀前半の北陸系の丸 底の土師器甕や製塙 土器、栗組系の土師 器小甕、福島系の内 黒土器塊等が多数出 土し、特異な様相を 示す。

図 版



西町田下遺跡空中写真(↑S)



遺跡近景(↑NE)

図版(2)



調査区設定状況(↑NE)



試掘 トレンチ掘下げ状況(↑N)



重機粗掘状況(↑S)



調査概要説明状況



作業状況(↑S)



グリッド杭打状況(↑S)



マーキング状況(↑SW)



排水作業状況(↑NE)



SG I - 2 精査状況(↑SW)



ST34精査状況(↑NE)



ST48 - EKI15精査状況(↑N)



略測状況(↑E)



屋内作業状況



米沢市公民館職員遺跡見学状況(↑W)



空中写真摄影状況(↑SE)



写真摄影状況(↑N)

図版(4)



SEI 1733セクション実測状況(↑SE)



STI 1488かまど精査状況(↑SW)



現地説明会状況



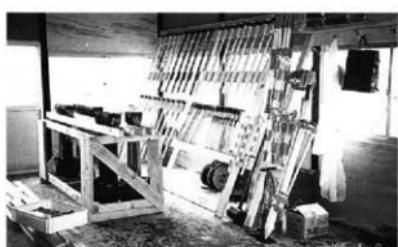
現地説明会状況



調査区内片づけと埋戻し(↑NE)



作業状況(↑NW)



器材庫内部状況



器材撤収状況



ST34検出状況 (↑S)



ST34東西ベルトセクション (↑N)



ST34南北ベルトセクション (↑W)



ST34・EP7セクション (↑S)



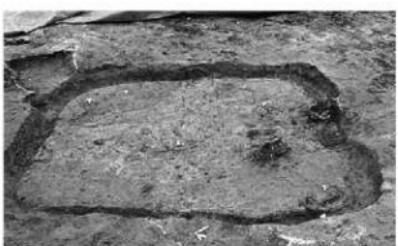
ST35検出状況 (↑SW)



ST35東西ベルトセクション (↑NW)

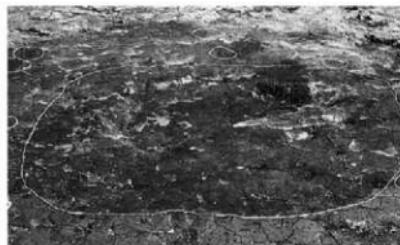


ST35南北ベルトセクション (↑SW)



ST35床面状況 (↑SW)

図版(6)



ST46検出状況(↑S)



ST46東西ベルトセクション(SW)



ST46かまどセクション(↑NE)



ST46・EK4遺物出土状況(↑E)



ST47・ST48検出状況(↑SW)



ST47かまどセクション



ST48東西ベルトセクション(↑S)



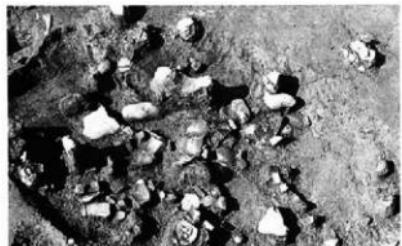
ST48南北ベルトセクション(↑W)



ST48かまどセクション(↑W)



ST48・EK15ベルトセクション(SW)



ST48・EK15遺物出土状況



ST48遺物出土状況(↑W)



ST96床面検出状況(↑SW)



ST96かまどセクション(↑S)



ST447検出状況(↑S)

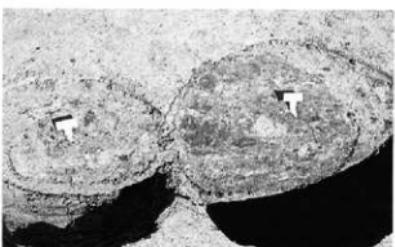


ST447東西ベルトセクション(↑S)

図版(8)



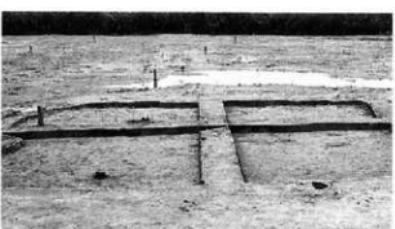
ST447南北ベルトセクション(↑W)



ST447・EP5・EP6セクション(↑SW)



ST1150東西ベルトセクション(↑S)



ST1150南北ベルトセクション(↑W)



ST1195東西ベルトセクション(↑SW)



ST1195南北ベルトセクション(↑W)



ST1195かまどセクション(↑SW)



ST1195遺物出土状況(↑NW)



STI375検出状況(↑W)



STI375精査状況(↑E)



STI375南北ベルトセクション(↑W)



STI375東西ベルトセクション(↑S)



STI375かまどセクション(↑S)



STI375かまど(↑W)



STI488検出状況(↑S)



STI488東西ベルトセクション(↑S)

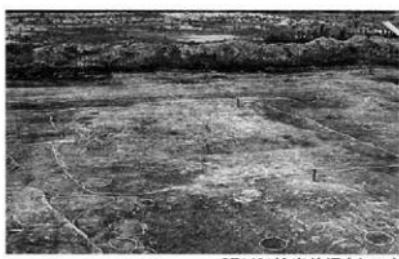
図版(10)



STI488南北ベルトセクション(↑W)



STI488かまど状況(↑N)



STI491検出状況(↑SW)



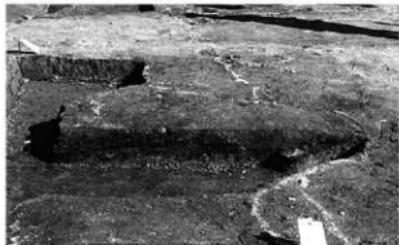
STI491東西ベルトセクション(↑S)



STI491南北ベルトセクション(↑W)



STI491かまどセクション(↑S)



STI506かまどセクション(↑W)



STI506発掘状況(↑NW)



STI592東西ベルトセクション(↑SW)



STI592南北ベルトセクション(↑NW)



STI592遺物出土状況(↑NW)



STI592土師器出土状況(↑E)



STI636東西ベルトセクション(↑S)



STI636南北ベルトセクション(↑W)



STI745東西ベルトセクション(↑S)

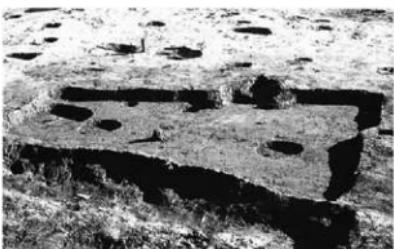


STI745南北ベルトセクション(↑W)

図版(12)



ST1745かまどセクション(↑W)



ST1745完掘状況(↑N)



ST2260東西ベルトセクション(↑S)



ST2260南北ベルトセクション(↑W)



ST2260床面状況(↑N)



ST2289東西ベルトセクション(↑N)



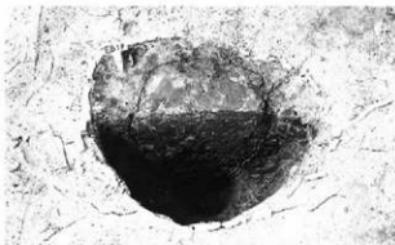
ST2289南北ベルトセクション(↑W)



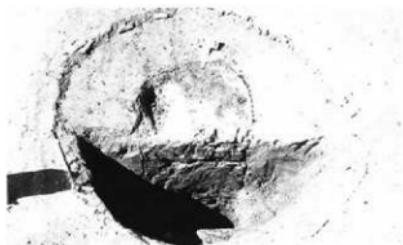
ST2289床面状況↑(SW)



SB26検出状況(↑S)



SB26・EB18セクション(↑S)



SB26・EB19セクション(↑S)



SB26・EB20セクション(↑S)



SB36検出状況(↑S)



SB36・EB43セクション↑(S)



SB36・EB44セクション(↑S)



SB36状況(↑S)

図版(14)



SB666状況(↑S)



SB666・EB671セクション(↑SW)



SB666・EB674セクション(↑SW)



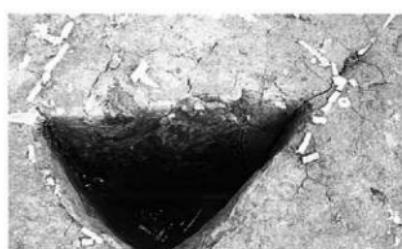
SB730状況(↑S)



SB730・EB732セクション(↑SW)



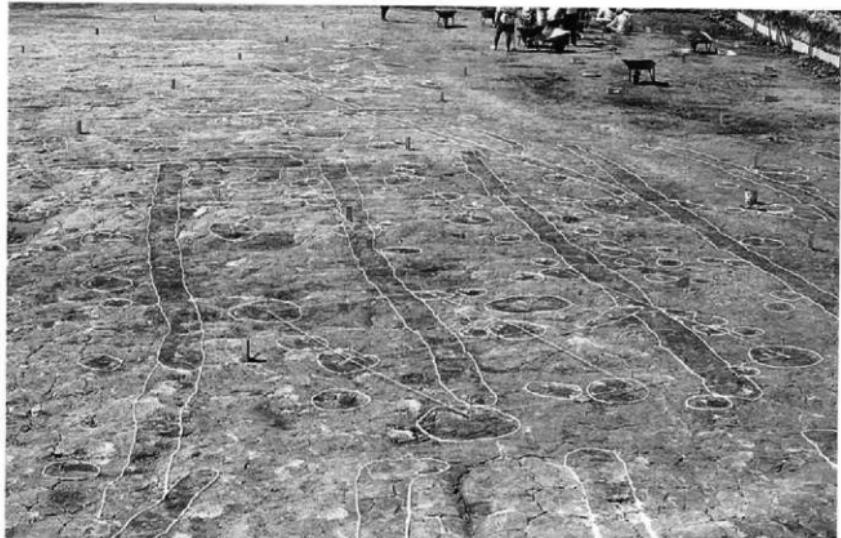
SB730・EB737セクション(↑SW)



SB600・EB604セクション(↑S)



SB600・EB608セクション(↑S)



SB666、SB600、SB730検出状況（手前から）(↑ S)



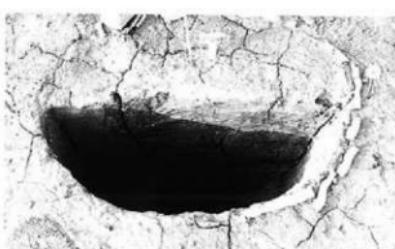
SB1025検出状況(↑ W)



SB1025・SB1027セクション(↑ W)



SB1025・EB1033セクション(↑ W)



SB1025・EB1046セクション(↑ W)

図版(16)



SBI233状況(↑S)



SBI233・EB984セクション(↑S)



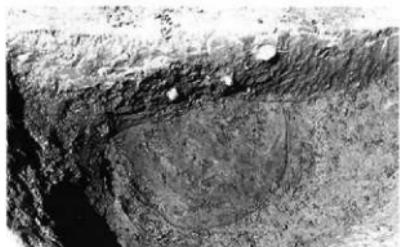
SBI233・EB958セクション(↑S)



SBI233・EB1024セクション(↑S)



建物跡完掘状況



SE1733検出状況(↑S)



SE1733セクション(↑S)



SE1733精査状況(↑SW)



SE1733完掘状況(↑S)



SE1733井戸眼(↑SE)

図版(18)



SE369精査状況(↑SE)



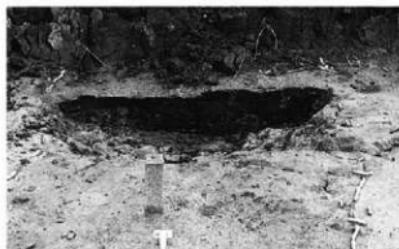
SE369セクション(↑SW)



SDI2セクション(↑S)



SDI2セクション(↑E)



SDI235セクション(↑S)



SDI3セクション(↑S)



SDI1285セクション(↑W)



SDI1258セクション(↑W)



SD 3 セクション(↑NE)



SD2220セクション(↑W)



SD2030セクション(↑W)



SD2324セクション



SD2245セクション(↑S)



SD1505セクション(↑W)



SD 8 セクション(↑S)



SD10セクション(↑S)

図版(20)



道路遺構状況 (↑S)



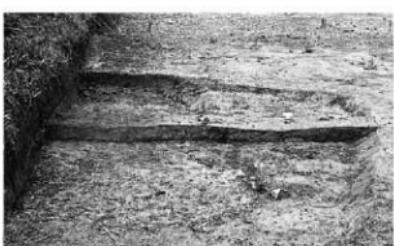
SK1481セクション(↑W)



SK1483セクション(↑SW)



SK2273セクション(↑S)



SX2345セクション(↑S)



SK246セクション(↑S)



SK1883セクション(↑S)



SK2079セクション(↑SW)



SK2079円面硯出土状況(↑S)



SK2079遺物出土状況(↑S)

図版(22)



SX1850セクション(↑S)



SX1850円面甌出土状況(↑S)



SK1669セクション(↑W)



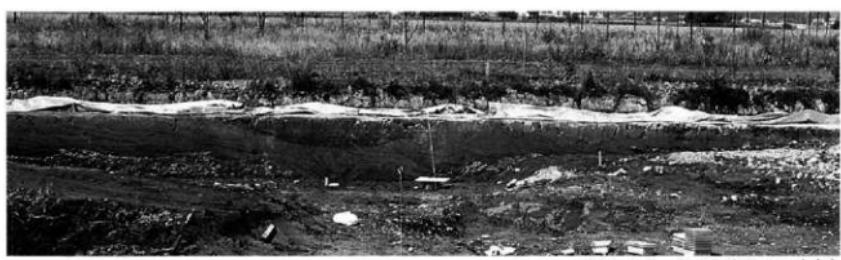
SK2214セクション(↑S)



SG 1 + 2 検出状況(↑S)



SG 1、T 2セクション(↑SE)



SG 1 + 2、T 3セクション↑(E)



SG I + 2 精査状況(↑W)



SG I + 2、T 3 遺物出土状況(↑NE)



SG I + 2 遺物略測状況(↑SE)



SG I + 2 重機粗掘状況(↑SE)



SG I + 2 遺物出土状況(↑N)



須恵器稜塊出土状況 SG I + 2 (↑N)



内黒土器塊出土状況 SG I + 2 (↑S)



SG I + 2 遺物出土状況(↑S)

図版(24)



ST48かまど遺物出土状況(↑E)



ST48床面転用研出土状況(↑SW)



土師器壺出土状況SD2220(↑SE)



ST35土師器出土状況(↑W)



SK2079拡張トレンチ 38-14 手付有孔中空円面硯出土状況(↑SW)



SK246弥生土器出土状況(↑S)



RP 3、RP 4 出土状況(↑NE)



SK1669出土状況(↑S)



遺構略測状況(↑S)



竪穴住居跡発掘状況(↑N)

図版(26)



基本層序 A



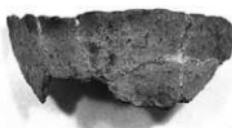
基本層序 B



基本層序 C



基本層序 D



33-7

33-11

34-1

33-13



33-17

33-18

33-19

図版(28)



33-16



34-2



34-3



34-4



34-5



34-6



34-8



34-9



34-7



34-14

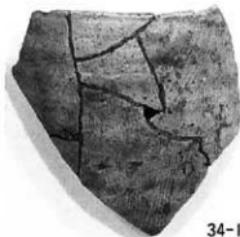


34-10

34-11



34-13



34-15



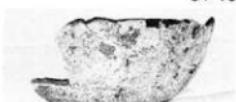
34-16



34-17



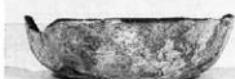
34-18



34-21



34-22



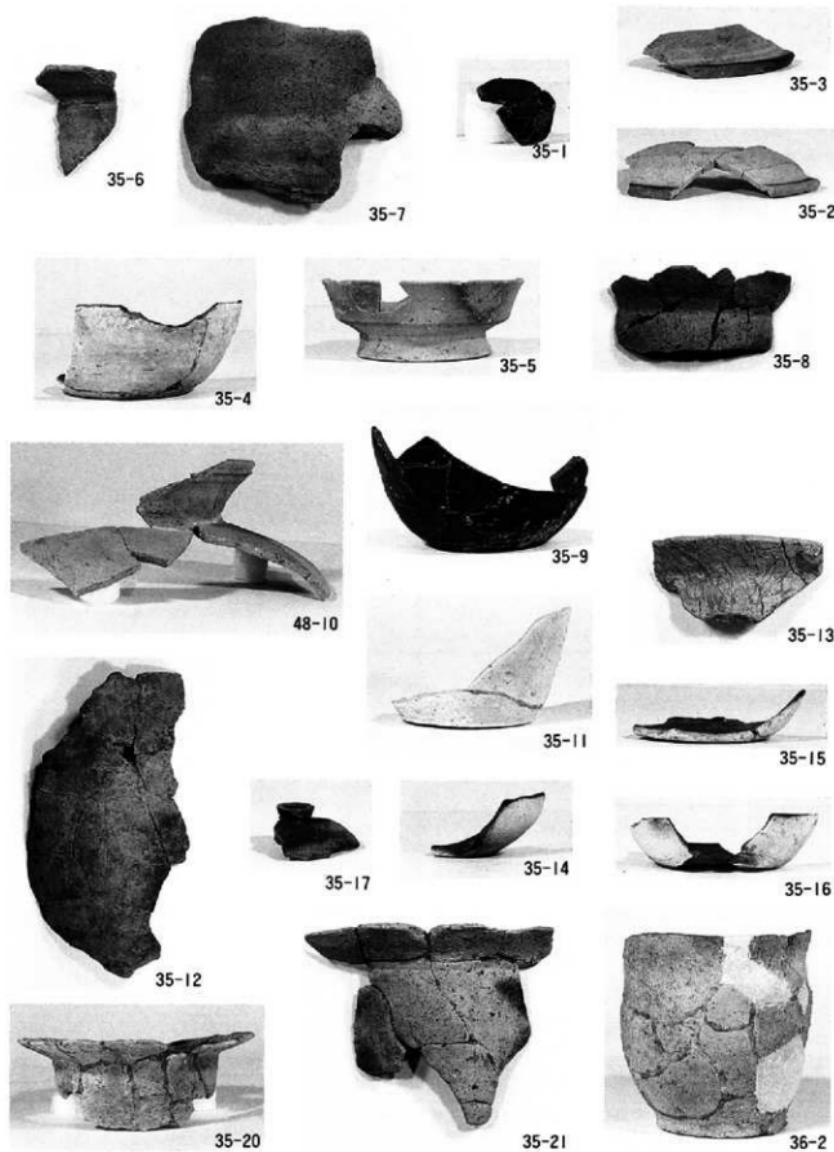
34-19



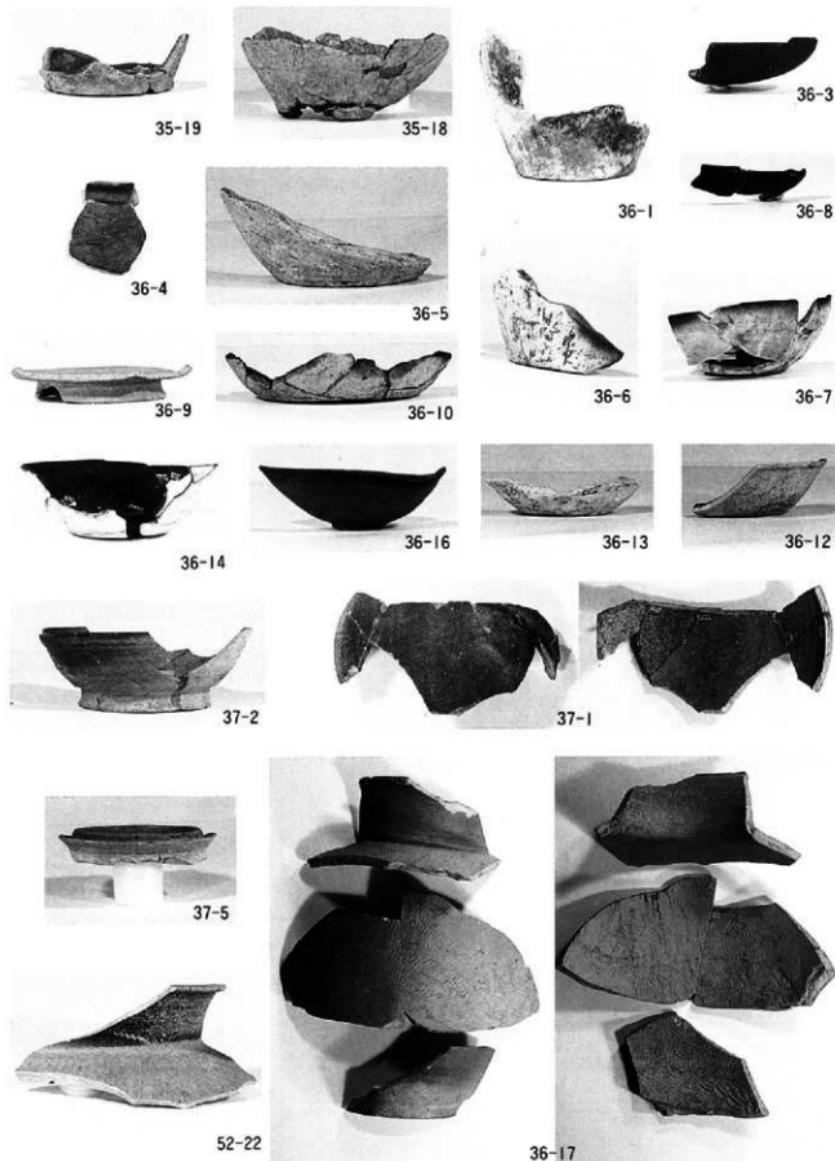
34-20



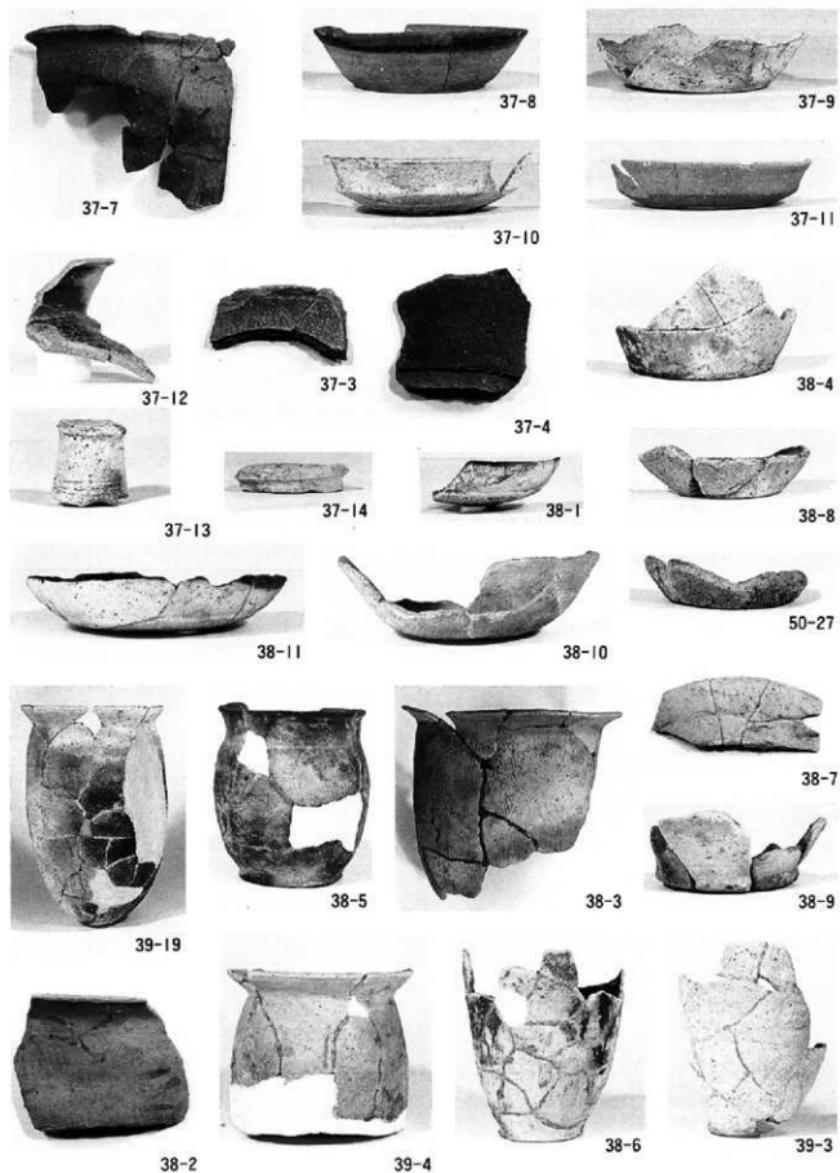
44-10



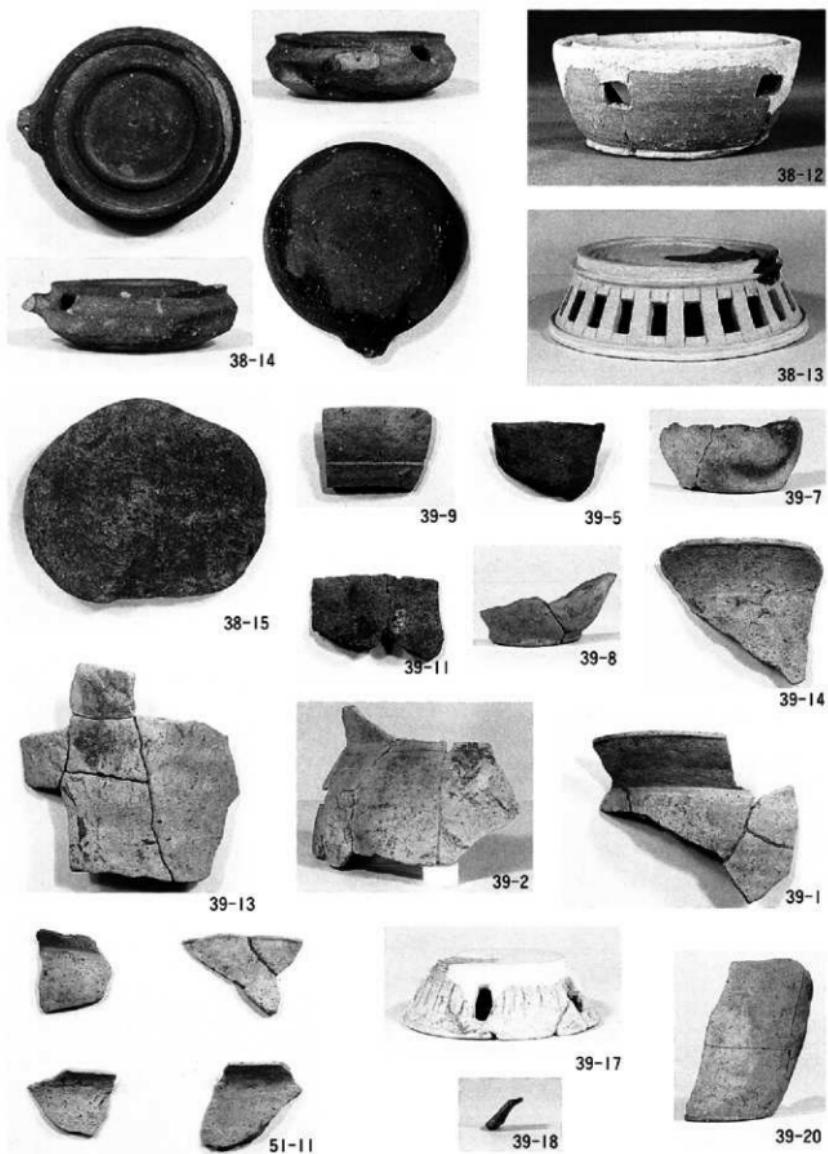
図版(30)

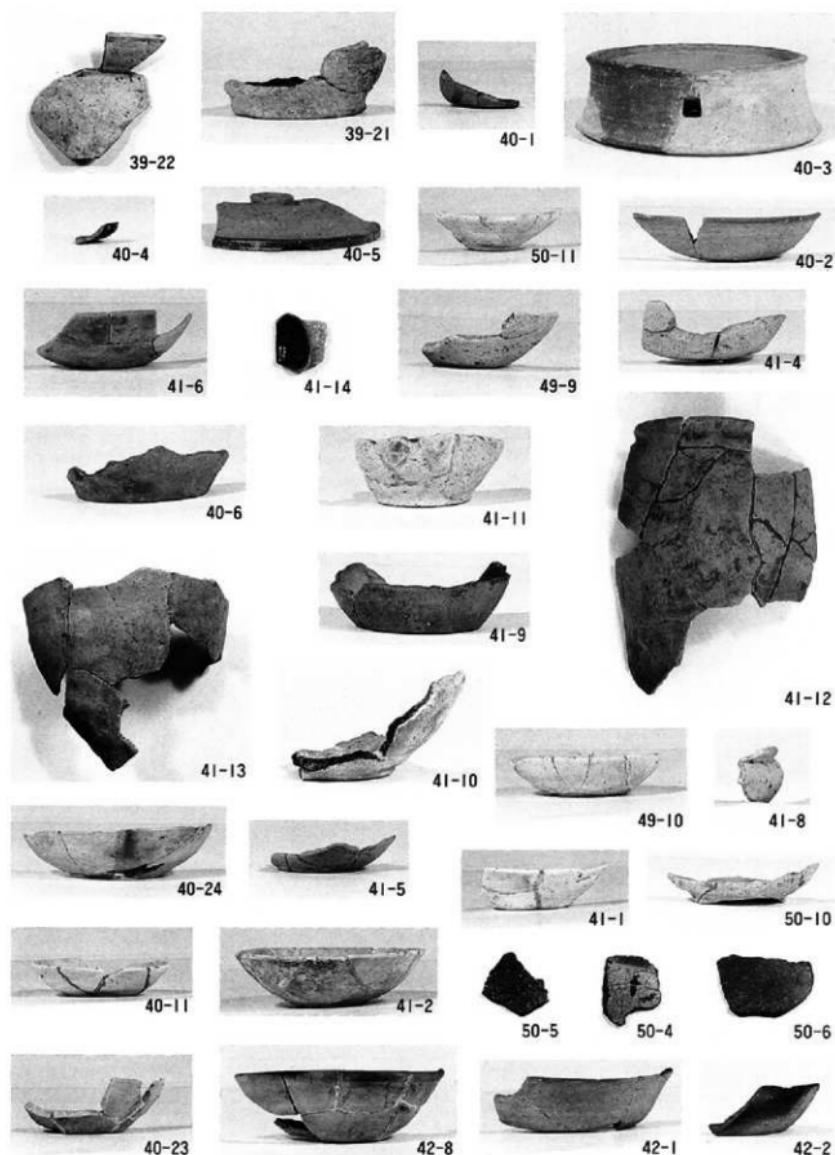


図版(31)

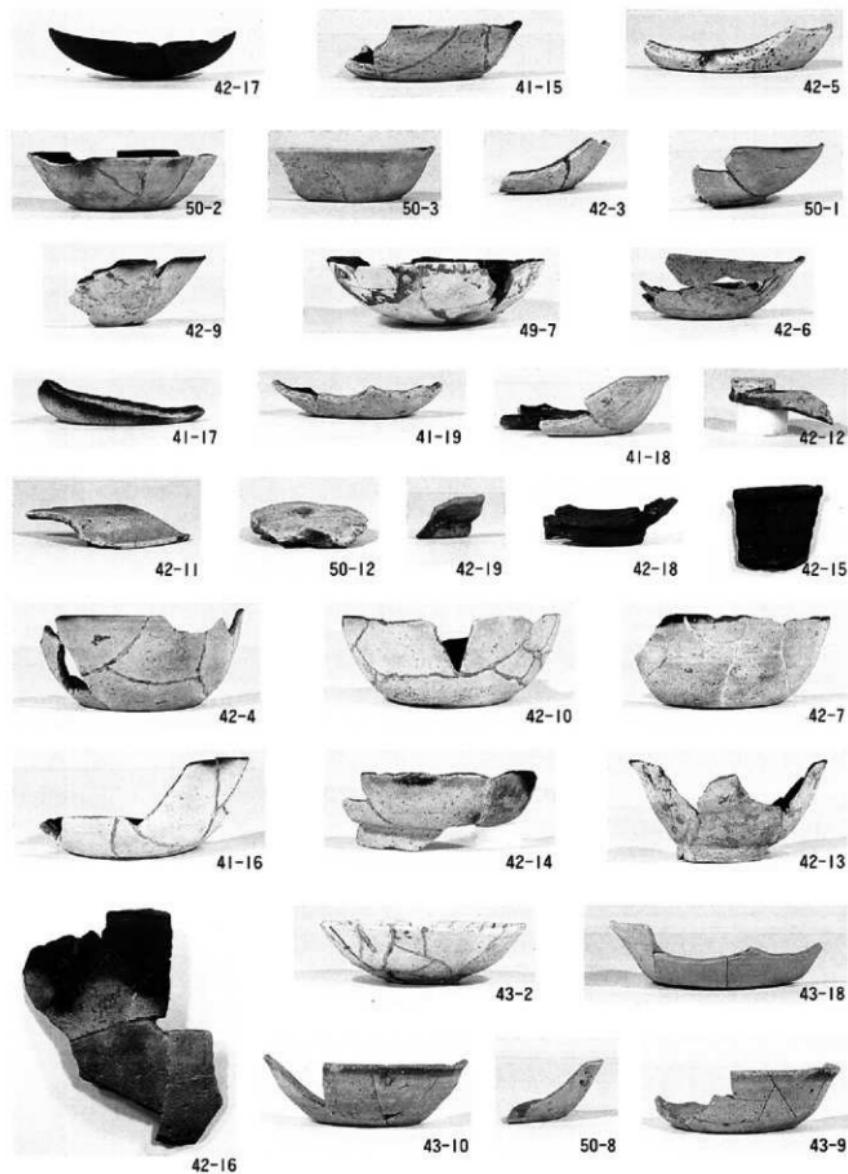


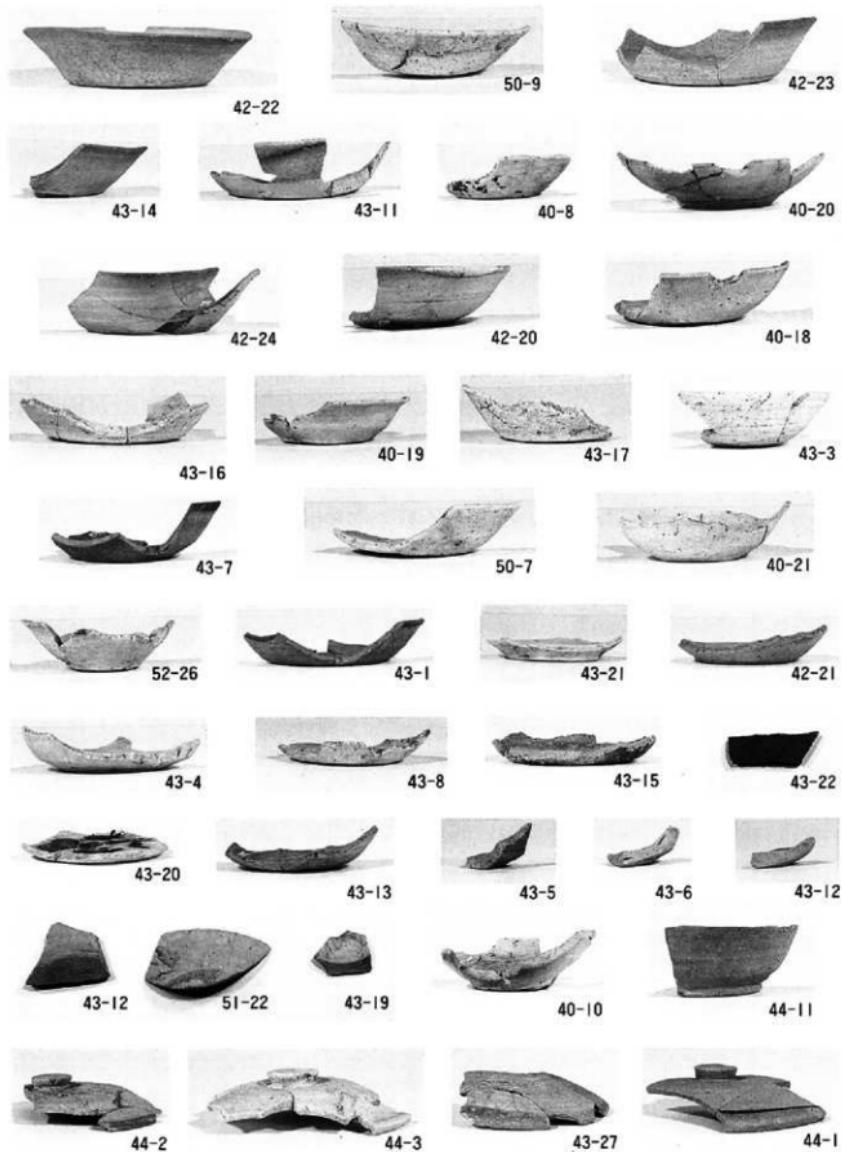
図版(32)



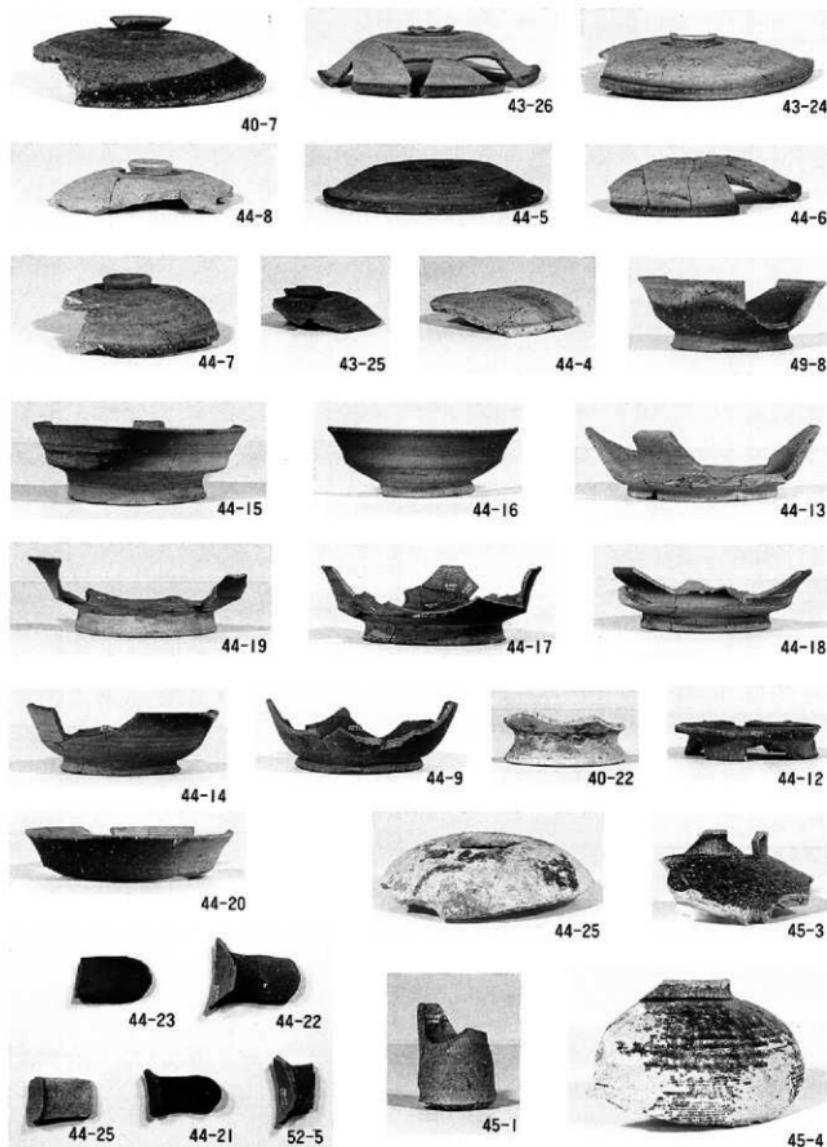


図版(34)





図版(36)





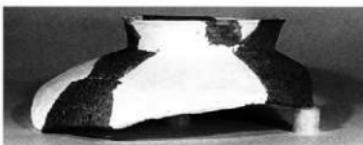
47-9



47-8



47-7



45-6



48-3



45-9



46-8



46-9



48-1



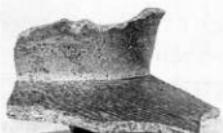
46-5



49-3



46-10

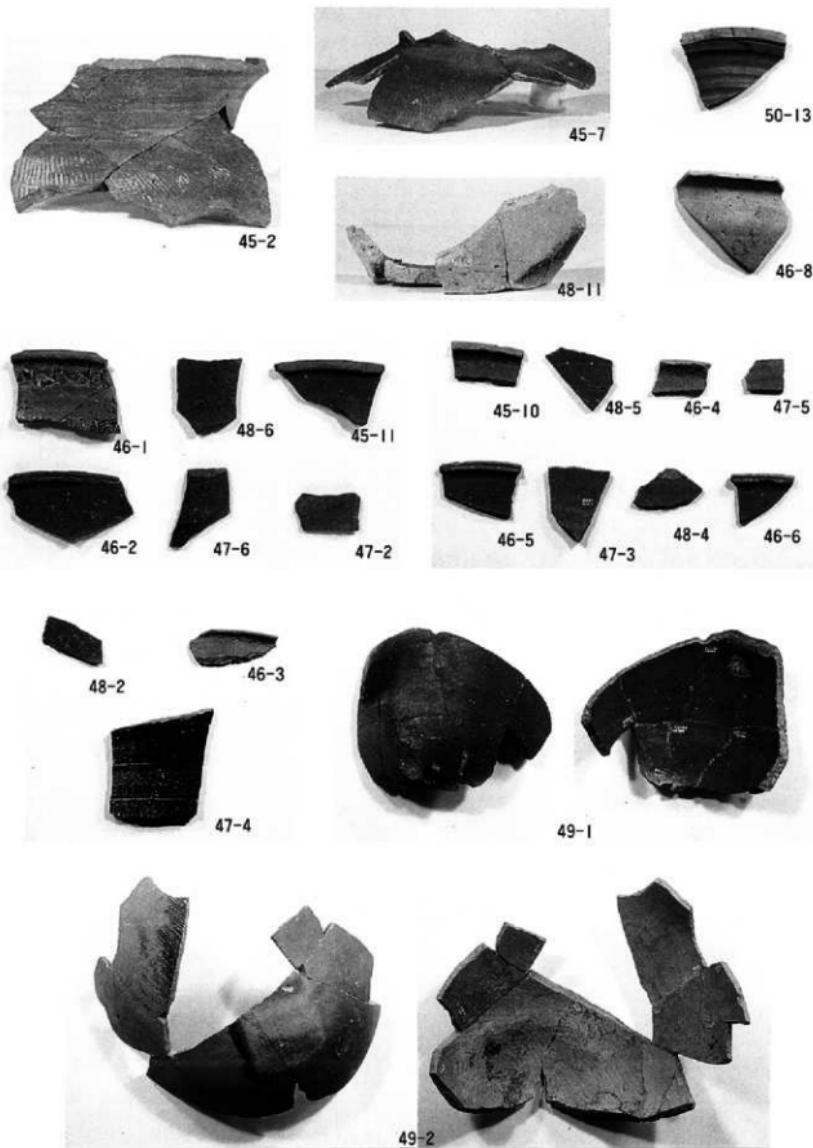


46-11



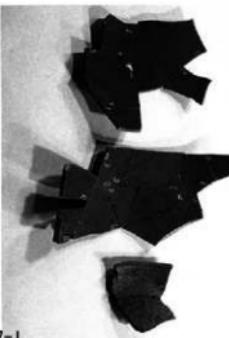
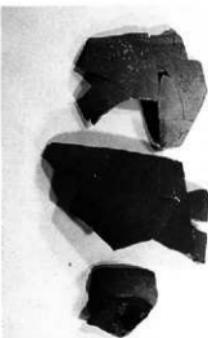
46-7

図版(38)





48-7



47-1



46-12

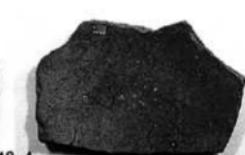


48-9

図版(40)



49-4



49-5



48-8



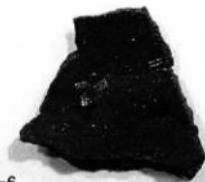
40-9



43-23



49-6



52-27



41-3



40-12

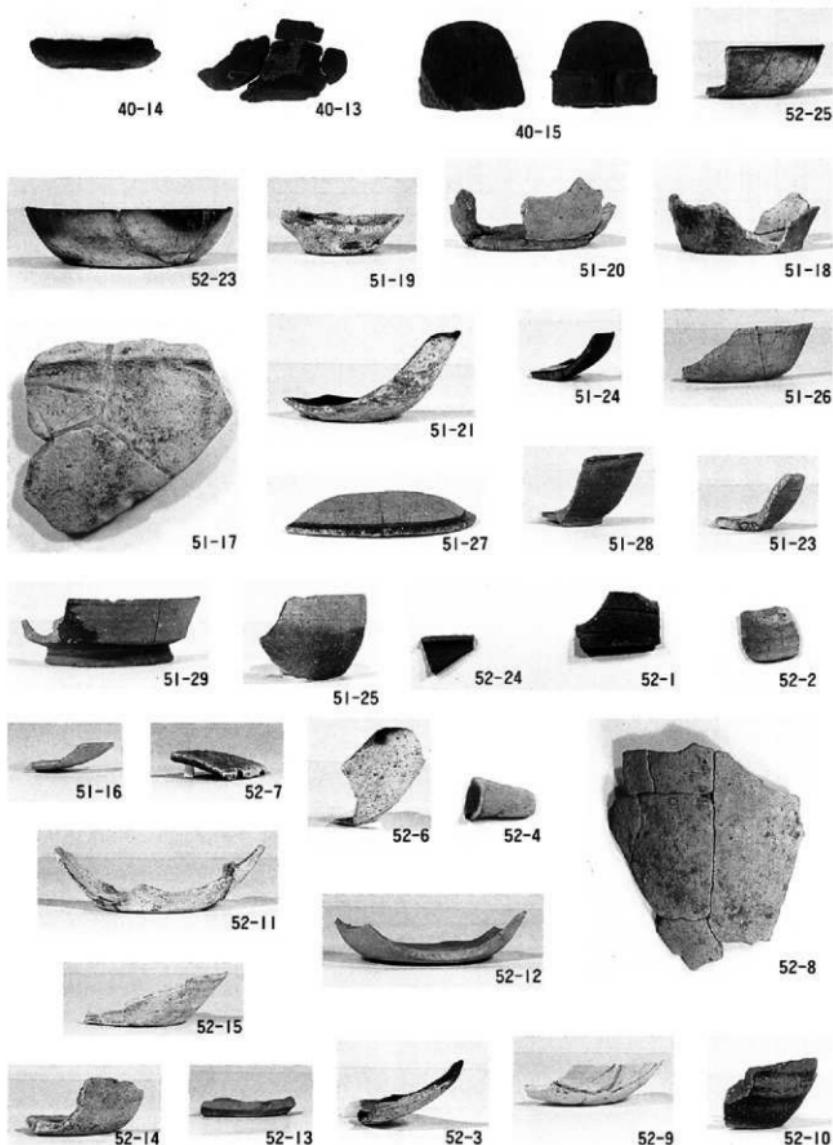


41-7

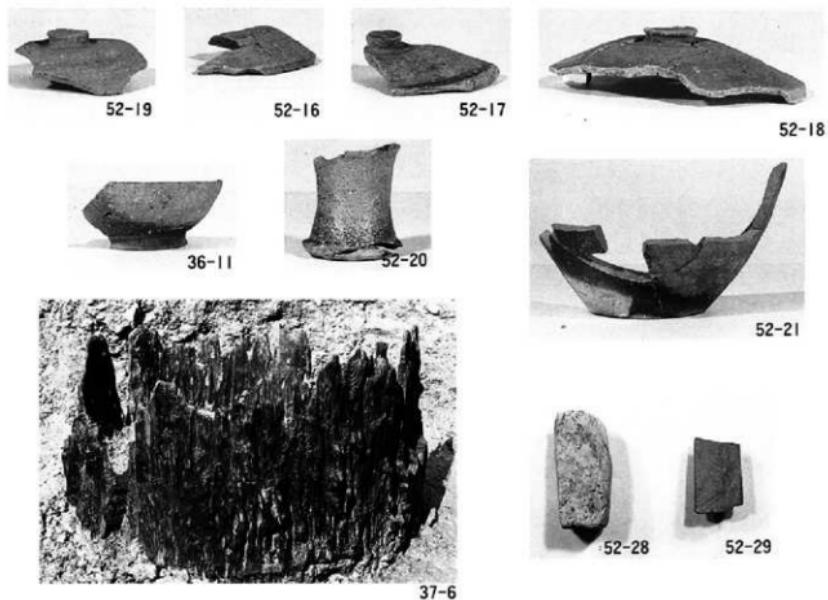


40-17

図版(41)



図版(42)



西町田下遺跡出土円面鏡（一部）



50-17



50-15



50-14



50-16



50-22



50-21



50-20



50-19



51-4



50-18



50-23



51-1



51-5



51-7



50-24



50-26



51-2



51-6



50-28



51-3



51-15



51-9

図版(44)



51-10



35-10



51-13



51-14



西町田下遺跡上空より米沢市内を望む（北から）

付 編

西田町下遺跡出土の赤色物質について

菱 田 量 (株式会社パレオ・ラボ)

1. はじめに

西町下遺跡は、山形県の南東部に位置する遺跡である。この遺跡から出土した土師器の底部に、全体に橙色(7.5YR7/6)を呈し、部分的に赤褐色(5YR4/8)の土壤塊のような物質が認められた。この物質は、明瞭な赤色を呈するものではないが、赤色顔料と関連する可能性があるので、本報告では、便宜上「赤色物質」とよぶ。

ここでは、この物質について、含まれる元素を蛍光X線分析による明らかにした。従来、赤色顔料の種類として、水銀朱(HgS)、ベンガラ(Fe₂O₃)、鉛丹(Pb₃O₄)が知られている(たとえば市毛, 1984)。分析結果によって得られた元素組成の特徴により、赤色顔料との関係を検討した。

2. 分析方法

出土した試料の赤色顔料について、エネルギー分散型蛍光X線分析計を用いて、非破壊による分析を行い、含まれる元素を定性的に明らかにした。

分析装置は、セイコー電子工業(株)製車上型蛍光X線分析計SEA-2001Lである。X線発生部の管球はロジウム(Rh)ターゲット、ベリリウム(Be)窓、X線検出器はSi(Li)半導体検出器である。測定条件は、測定時間300秒、照射径10mm、電圧50kV、試料室内は真空であり、測定にはマイラー容器を用いた。

結果については、試料の蛍光X線スペクトル図を示し、蛍光X線のピークから、含有する元素を明らかにした。

3. 結果および考察

(1) 赤色物質について

図1に蛍光X線スペクトルと検出される元素を示す。主成分元素としてFe(鉄)が顕著に検出され、その他にAl(アルミニウム)、Si(ケイ素)、K(カリウム)、Ca(カルシウム)、Ti(チタン)、Mn(マンガン)などのピークがみられる。また、微量成分元素として、Zn(亜鉛)、Rb(ルビジウム)、Sr(ストロンチウム)、Zr(ジルコニウム)の小さなピークが認められる。

この赤色物質は明瞭な赤色を呈しておらず、また、土器などに塗布されたものではないので、赤色顔料そのものかどうかについては判断が難しいと思われる。しかし、土師器底部から見いだされたことを考慮すると、赤色顔料の原材料、あるいは製造過程において産する物質である可能性も考えられる。こうした状況において、ここでは、試料の赤色物質が赤色顔料に由来する物質とした前提で、以下に考察を述べる。

先にも述べたように、赤色顔料の種類として水銀朱(HgS)、ベンガラ(Fe₂O₃)、鉛丹(Pb₃O₄)が知られている。分析結果からは、Fe(鉄)のピークが明瞭に認められ、Hg(水銀)やPb(鉛)のピークは検出されない。赤色顔料の1つであるベンガラは、鉄の化合物である酸化鉄(III)、すなわち

Fe_2O_3 が主な成分となっている。こうしたことから、ここで分析を行った赤色物質は、ベンガラに由来する物質と考えられ、水銀朱や鉛丹とは異なるものである。

現段階では、データが少ないため、この物質に含まれる元素だけで、赤色顔料の原材料なのか、製造過程のものなのか、あるいは顔料そのもののかを明確に示すことは困難である。さらに多くの近況的な証拠をもとに推定すべき問題と考える。

(2) ベンガラについて

ベンガラは、古代においては、鉄分に富んだ土壤(たとえば褐鉄鉱を含むものなど)を焼いてつくられたと考えられている(山崎, 1987など)。もちろん、天然の赤鉄鉱などの鉄鉱石を採取して製造した場合もあるだろう。また、北野(1994)によると、近世においては、上記の他に、硫化鉄(磁硫鉄鉱: FeS , 黄鉄鉱: FeS_2)が風化して形成された錆礫(りょくばん, 通称ロウハ, 硫酸鉄(II): $\text{FeSO}_4 \cdot 7\text{H}_2\text{O}$)を原材料とし、これを焙燒して酸化鉄(III)を製造し、ベンガラを生産していたことが知られている。さらに、矢彦沢ほか(1995)は、黄鉄鉱を含むグライ土層の堆積物の風化過程において、含水酸化鉄(III) ($\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot n\text{H}_2\text{O}$)が沈積することを確認し、これがベンガラの原材料になり、弥生土器の塗彩に使用された可能性を指摘している。

このように、ベンガラの原材料や製法については、いくつかのものが示されている。すなわち、ベンガラに由来する物質には、 $\text{Fe}(\text{鉄})$ だけではなく、それ以外にも特徴的な元素が含有するものがあると考えられ(たとえば S: 硫黄など)、その違いによって、いくつかの種類に分類できる可能性がある。今回分析した試料は 1 点だけなので、他の赤色物質との比較した検討はできないが、今後、土器などに塗布されたベンガラとの比較、顔料の出土状態、あるいは他の遺跡での出土例との比較など、考古学的状況をふまえて総合的な検討がなされることを期待する。

引用・参考文献

- 市毛 熊 1984 「増補 朱の考古学」, 第 2 版, 考古学選書 12, 雄山閣出版, 324p.
- 北野信彦 1994 「近世出土漆器資料の保存処理に関する問題点 II—文献史料からみた赤色系漆に使用するベンガラの製法について—」『古文化財の科学』, 39, 93-102.
- 小山正忠・竹原秀雄編 1967 「新版 標準土色帖」, 奥林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修, 日本色研事業株式会社 発行.
- 永嶋正春 1985 「縄文時代の漆工技術—東北地方出土藍胎漆器を中心にして—」『国立歴史民俗博物館研究報告 第 6 集』, 国立歴史民俗博物館, 1-54.
- 永嶋正春 1987 「北江吉田遺跡出土赤色漆塗り遺物の塗膜構成について」『北江吉田遺跡発掘調査報告書(2)』, 東京都中野区・北江吉田遺跡調査会, 557-564.
- 永嶋正春 1995 「古代漆の源流」『古代に挑戦する自然科学』, 第 9 回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編, クバプロ, 82-93.
- 矢彦沢清允・岡角秀俊・藤松 仁・村上 泰・森鶴 稔 1995 「弥生式土器の塗彩に使われたベンガラの由来—フォッサマグナ東端地域を中心として—」『考古学雑誌』, 80, 4, 75-87.
- 山崎一雄 1987 「古文化財の科学」, 雄山閣出版, 352p.

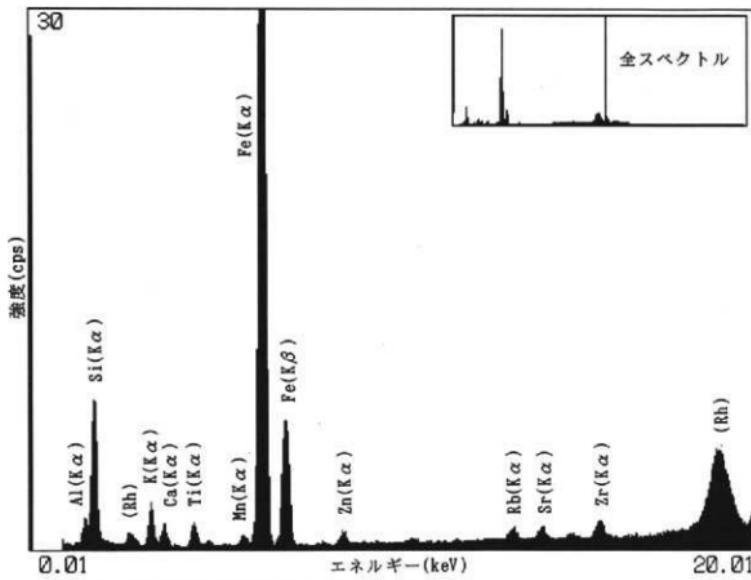


図1 赤色物質の蛍光X線スペクトル図

Al:アルミニウム, Si:ケイ素, K:カリウム, Ca:カルシウム, Ti:チタン, Mn:マンガン, Fe:鉄,
Zn:亜鉛, Rb:リビウム, Sr:ストロンチウム, Zr:ジルコニウム, (Rh):ロジウム(X線管球ターゲットから)

山形県埋蔵文化財センター報告書第44集

西町田下遺跡発掘調査報告書

1997年3月31日発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター
〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号
電話 0236-72-5301
印刷 藤庄印刷株式会社
